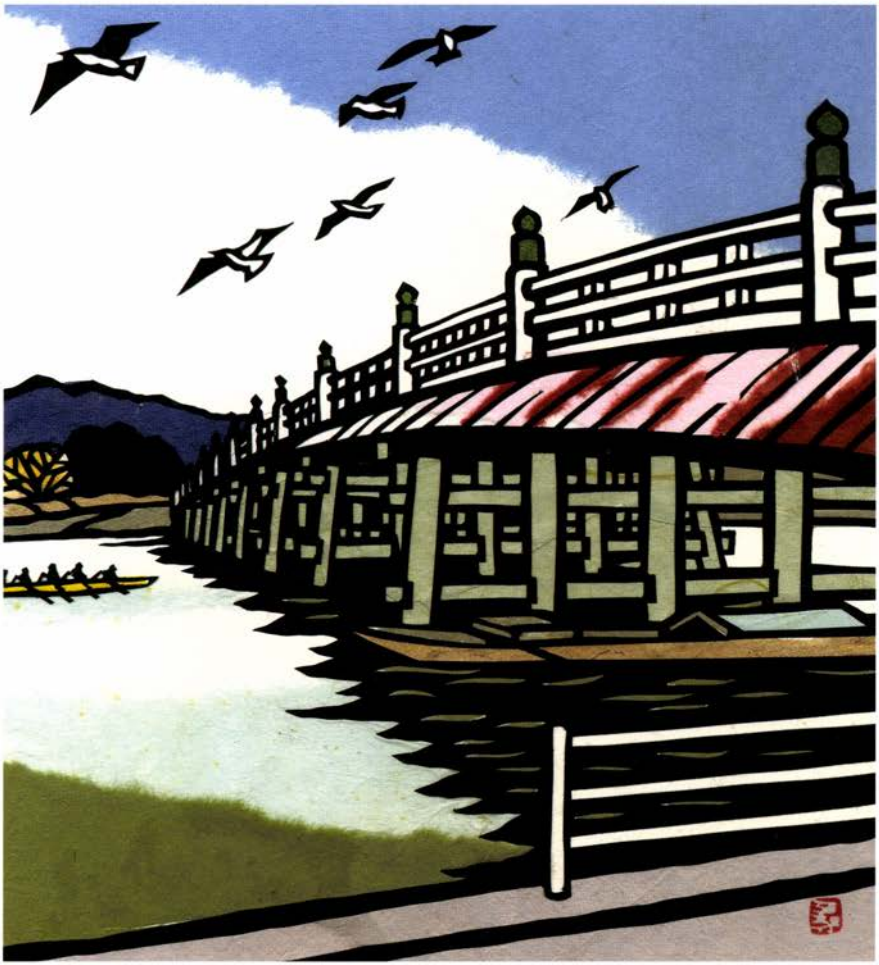
川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十七年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇六三号



日川協加盟

No.1063

十二月号

第四回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第三回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句　共選）

課題吟
「包　む」「政　岡　日枝子（川柳塔社）」「川　上　大　輪（川柳塔社）」
「重　い」「菱　木　　誠（番傘川柳本社）」「新　家　完　司（川柳塔社）」「赤　井　花　城（ふあうすと川柳社）」「小　島　蘭　幸（川柳塔社）」

雑　詠

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料　一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切　**平成二十八年二月二十日（金）消印有効**

送付先　〒五四三－〇〇五二
大阪市天王寺区大道一－一四－一七－二〇一
川柳塔社　誌上大会係　宛
ＴＥＬ／ＦＡＸ（〇六）六七七九－三四九〇

賞及び発表　各題秀句に賞呈　発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

平成28年　本社句会　開催日程表

会場：ホテルアウィーナ大阪

開催日	時間	会場
1月7日(木)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
2月4日(木)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
3月7日(月)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
4月7日(木)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
5月6日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
6月7日(火)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
7月6日(水)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
8月5日(金)	13:00～17:00	金剛の間(中)　4F
9月7日(水)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
10月1日(土)	同人総会　9:30～11:00 生駒	3F
第22回 川柳塔まつり	句　会 11:00～17:00 金剛(中西)	4F
	懇親宴 17:00～20:00 葛城(全)	3F
11月7日(月)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
12月7日(水)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F

寒中見舞募集

○本誌　平成28年2月号掲載
○締切　12月20日

川柳塔社事務所　宛

ＮＨＫひるまえ川柳

小島蘭幸

5月号の巻頭言に、ＮＨＫひるまえ川柳に初めて出演した時のことを書かせて頂きました。早いもので10月のお題「秋」で7回の出演となりました。その間、中国五県の川柳会の皆様から多くのご応募を頂きました。エールを沢山の方から頂きました。ここに7回の入選句の中から特に印象に残っている作品を紹介させて頂きます。

婚活の環状線を抜けて春　藤井　智史

第1回「春」の特選句です。「環状線を抜けて春」という表現に感動したのを覚えています。後日、作者の智史さんにお会いした時、思わず「結婚決まった？」と聞いてしまいました。

アウェーのスタンド染めている真っ赤　大本　和子

「春」「赤」には、カープを詠んだ作品が特に多かったです。アウェーのスタンドを真っ赤に染めた、カープ女子、カープファンの大声援は最後の最後まで続きました。

夫の朝布団のなかで聞いている　工藤千代子

「朝」は爽やかな作品が多くありました。その中でこの句には驚きました。エッ何故!!と思いながら繰り返し読んでいるうちに、夫より先に起きられない理由があることに気がつきました。作者は工藤千代子さんでした。大病から復活されて、今では各地の大会に元気に出席されておられます。

緑日の浴衣の君と初ラムネ　森　ふみか

「夏」は淡い恋の思い出を詠んだ作品が多くありました。この句は「初ラムネ」の措辞が光ります。

けんけんば路地からつづく遠い夏　北川　拓治

「夏」の特選句です。遠い夏は、遠い恋なのです。

花が好き人間が好き酒が好き　増田　敏夫

「花」の特選句です。好き好き好きのリフレイン効果を力説？したところ、次回の「秋」では、リフレイン効果を狙った作品がどっと来ました。テレビの影響は凄いと思いました。

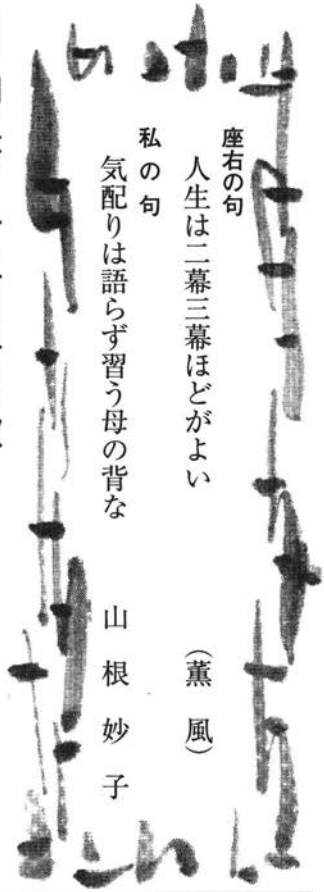
バンザイの秋がまたまたまた延びた　山下てん平

最後に負けて、ＣＳ進出を逃したカープ、またまたに作者の思いが凝縮されています。

セピア色の里を彩る柿すだれ　竹治ちかし

私は、この句を見てすぐに、毎月、川柳塔の表紙を飾っていただいています前田尋画伯の美しい切り絵を想像していました。

ＮＨＫひるまえ川柳、いつまで続くか分かりませんが、文芸としての川柳を多くの人に知って頂く大きなチャンスなのです。引き続きご支援をお願い致します。



座右の句

人生は二幕三幕ほどがよい　（薫風）

私の句

気配りは語らず習う母の背な　山根妙子

川柳塔　十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「瀬田唐橋」

■巻頭言　NHKひるまえ川柳……小島蘭幸…（1）
天守を曳く……福士慕情…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
川柳塔の川柳讃歌 ⑫②……木津川計…（43）
自選集……（44）
温故知新……（47）
水煙抄……川上大輪選…（48）
新川柳鑑賞 ㊻……麻生路郎…（68）
橘高薫風句抄……（69）
誹風柳多留一二篇研究 30……（70）
英語 de Senryu ㊽……吉村侑久代…（72）
高野山川柳塔碑合祀報告……（73）
愛染帖……新家完司選…（74）
檸檬抄「ロス」……三浦強一・長浜美籠共選…（78）

天守を曳く

福士慕情

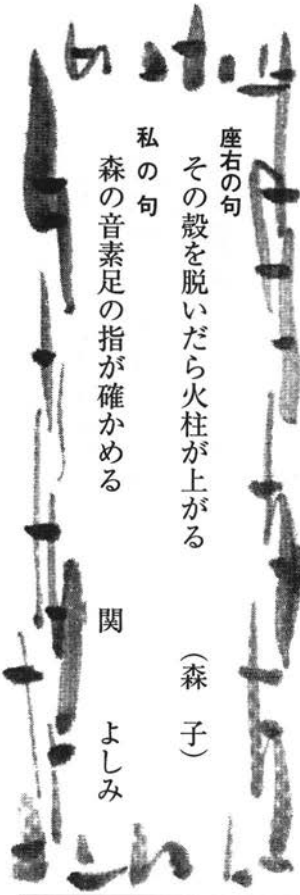
日本一の桜を自負する弘前公園の中央に、現存十二城の一つ弘前城がある。

一九八三年、日本海中部地震による被害調査の過程で弘前城本丸東側石垣の膨らみが確認され、このままでは崩壊の危険があるとのことから、石垣の大改修工事が施工されることになった。

そのためには天守を解体せずにそのままの形で曳屋をして、石垣を改修するのだという。実は、約一〇〇年前、重機もなく、建設機材の乏しい時代にこの天守が一度曳屋され石垣の工事が成されていたのである。弘前の大工の棟梁、堀江佐吉の指導のもと、滑車やコロ（丸太）を駆使し、人力でのことらしいのだが、残念ながら詳しい資料は残されていない。

二〇一三年から十年の歳月と二十億円の事業費を投じて可能な限り、従来の工法で石垣を修復するという。

一路集（「くすぐる」……黒田茂代選……(81)
「日曜日」……小沢　淳選……(82)
「パック」……斉尾くにこ選……(83)
初歩教室「ストレート」……山口光久……(84)
川柳塔鑑賞……中居善信……(86)
水煙抄鑑賞……渡辺富子……(88)
せんりゅう飛行船 ⑥⓪……新家完司……(89)
『麻生路郎読本』余滴 (32)……桒原道夫……(90)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世……(92)
民族の詩歌 (42)……三好専平……(94)
十一月本社句会……(95)
句会燦燦……岩崎眞里子……(99)
各地柳壇（佳句地十選／藤井則彦・高島啓子）……(100)
第30回 国民文化祭・かごしま2015 入選作品……(113)
十二月各地句会案内……(114)
柳界展望……(116)
■編集後記（ひとこと／栃尾奏子）……朱夏・勝弘……(118)



座右の句

その殻を脱いだら火柱が上がる　（森　子）

私の句

森の音素足の指が確かめる　関　よしみ

天守内の柱、壁、床等の調査、仮天守台や曳屋を見学出来る公開ステージの建設、曳屋ルートにある樹木の移設、一次曳屋は、天守を鋼材で保護し、架台とレールを敷設、油圧ジャッキで行われた。

最大のイベントの二次曳屋は「曳屋ウオーク」として九月二十日から一週間、三千九百名の参加者を得て実施。

初日の曳初式には小型ねぷたと情っ張り太鼓、自衛隊員三十名による剣舞、等セレモニーの後に人力による曳屋が始まった。天守の高さ、14m、重さ400tを西方へ74m動かすのである。

市長の掛け声で、天守に取り付けた四本の綱を約一〇〇人の老若男女が太鼓に合わせ「そーれっ」と曳くのである。一回で15cm、五分位で次の組みと交替をするのだが、なかなか力が入る。目には見えないが確かに天守は動いた。

6年後に天守は元の位置に戻るという。その時もまた曳屋に参加したいものだ。

僅か5分の参加ではあるが、世紀のイベントに参加出来たことが嬉しい。快い疲れに秋の風が心地良い。

川柳塔

小島蘭幸選

残された時間を思う曼珠沙華
白髪のカップルが乗る秋日和
分かれ道まではお連れになりましょう
免許証はゴールド運がよいだけの
ペン先も刃先も他人には向けぬ
本を読む少女が一人いた車輌

紀の川市　辻内次根

四万人待たせて靴の紐結ぶ
次の日を決めてふくらみだすハート
あんたなら出来るにだまされてみよう
パソコンを開くと猫が邪魔をする
もうちょっと掘ればハートが出てきます
鼻欠けた石仏争いは絶えぬ

尼崎市　山田耕治

老い先を見つめる道化師の涙
手すりばかりの家にわたしの自尊心
虫集くしきりに思う父のこと

和歌山市　木本朱夏

月の暈ははに詫びねばならぬこと
断捨離で見つけた若い日のわたし
不揃いの皿や小鉢にある歴史

札幌市　三浦強一

五月蠅いと言われてもなお反戦歌
安倍獅子吼あのヒトラーに似てきたぞ
きみまろとゲラゲラ笑う妻である
疾しいと妻はわたしの目を見ない
誕生日大河ドラマの句読点
自分史に自己満足の句が並ぶ

弘前市　福士慕情

病窓で見る花火には音がない
里芋の煮付けは亡母の鍋にする
活断層ここは極楽温泉地
輪廻転生鮭は故郷へ直走る
歴史ある団地途切れぬ救急車
洗顔の水に行く秋教えられ

鳥取市　岸本宏章

ありがたく受け取るときは両手出す
てんこ盛りで出してくれない京料理
何があった場所か更地になっている
菩提寺の住職なんと芸大出
奥行きの長い商家に見る歴史
大阪弁標準語より難しい

松江市　石橋芳山

剪定の円周率がまた伸びる
声聞いただけだが冬の日本海
ヒッチコック症候群に病むカモメ
体形は草書体へと変わりだす
外面を上り框で脱ぎ捨てる
お許しはヨモツヒラサカ途中まで

桜井市　安土理恵

平凡な暮しなんです筑前煮
夕暮れて半額で買う明日のパン
ひと囲いの菜園に蒔く夢の種
本物の悪女は月を見て泣かぬ
紅が哀しい思愁期の蒂草
一緒に散ろうって葉ざくらから便り

岡山市　丹下凱夫

絵空事だけの恋ですサユリスト
金木犀今年も霧の朝に咲き
秋刀魚食うためにわざわざおふくろ亭
オンボロ車だけど税金払っている
仰ぎ見る九条大事にしてやろう
指切りをしたのは小学生のころ

吹田市　山本希久子

新旧は言わぬ切手で秋が着く
秋の装いイブモンタンと歩きたし
笑い袋と秋のジョークをふところに
最後には切る高齢というカード
女子会のパンチ会話にカクテルに
ワイン片手に読書おんなの夜が更ける

香芝市　大内朝子

わたくしを無垢へいざなう秋の天
にんげんにまだまだ遠い登り坂
身内より心許せる飲み仲間
すっぽんぽんで生きる世間が広くなる
避けられぬ老いと対峙のケセラセラ
両の手を合わす感謝が多くなる

大阪市　栃尾奏子

薄氷は割れて本音は剥き出しに
許されぬままで私の指定席
私も清くありたいのです雪
亡母にも亡父にも似て雪達磨
くすぐっています笑ってほしいから
除夜の鐘街をゆっくり浄化する

倉吉市　牧野芳光

メタボ腹見てはいけないものを見た
頼みごとくたびれ果てた声ですする
ＡＫＢの歌が胸まで届かない
マス席に座る幸せそうな人
横文字がわからないので答えない
友達でないから理由考える

河内長野市　山岡冨美子

花屋から秋を一鉢買ってくる
錆止めの処方箋ですラブソング
灯が一つ消える本屋の店仕舞い
碑の父の名前も薄くなり
影法師ちょっと傾き秋深む
地球軸傾く難民の居場所

三田市　北野哲男

松茸は今年も鼻で食べました
駐車場かつては父の自慢の田
チャレンジに男の流儀女の眼
居眠りの出来ない席が埋らない
逸材と才媛その後如何です
小手調べリンゴ噛って見る入歯

和歌山市　古久保和子

秋桜やさしい語尾を持つ人と
違反切符子よりも若いおまわりさん
爪を切る古新聞のニュース読む
新米は沢庵だけで召し上がれ
美術館の坂で夢二の女らしき
ギンナン直撃秋は進行形

大阪市　藤田武人

覆面を剥ぐとのっぺらぼうでした
筆箱の中想い出はミニサイズ
すっぴんは三軒先の八百屋まで
和装した後ろ姿に惚れ直す
黙らずに民意よ吠えて吠えまくれ
ブランコに乗って天辺蹴り上げる

藤井寺市　髙田美代子

特上のにぎりに土瓶蒸しが付く
紅葉が見頃でリュックにぎり飯
吊り橋を走り渡った日もあった
雑草の中の本音を拾わねば
その先は読まずにおこう風の旅
句読点一つを持っていて悩む

寝屋川市　森茜

いわし雲　さば雲赤信号かわる
御所冨有　祇園坊　身不知秋たわわ
空青く立ったぞ天辺組体操
かえらない子よ　紅萩のぽろっぽろ
出不精の尻尾がきまる雨あがる
触れられてぽろりはちきれそうな哀

ノーベル賞に拍手している微生物
言い訳をしても自分は裏切れぬ
下駄箱へ偶には下駄も置いてやる
礼儀正しく今年も咲いた彼岸花
せっかちもぶらり歩きに癒される
チャンネル権妻に奪われ皿洗い

豊中市　藤井則彦

干し芋のふる里想う亡母憶う
スーパーでカートに介護されている
着るよりも眺めて楽し赤パンツ
まんまるこ 視点を少し変えただけ
直定規はずして軽い風になる
骨量も貯金も底が見えている

鳥取市　福西茶子

悪口もひょいと躱せる老い佳境
たまの御洒落心に張りが付くんです
頭イエス体はノーと言い始め
軒に舟吊るす先祖の生きる知恵
仁王様と睨めっこする青い空
悉皆成仏地球にロスはありません

大阪市　田浦實

「天皇語録」昭和を生きてきた陛下
匍匐前進した昭和史に影が無い
一線を引いてわたしは譲らない

島根県　伊藤寿美

ホバリングして安保法案吊り上げる
押鮨は老姑にまかせる秋祭り
削除キー押し何もなかったことにする

西宮市　緒方美津子

酒煙草十八歳に許すまじ
免許証を手にして僕の始発駅
孫という魔物に期待してしまう
秋蝶の高さ覚えている小菊
枯菊をふんわり括る父でした
年金日夫に感謝する日です

藤井寺市　田付絹枝

目を閉じてハグしてみたい名古屋城
原寸の金のシャチホコ我を飲む
襖絵の威風堂々立ち竦む
太閤も民のかまどを眺めしや
神宮の〝心の小径〟無に返る
旅帰り季の移ろいが背なを押す

富田林市　中崎深雪

コスモスの海でわたしも揺れてみる
車椅子空にひろがる鰯雲
木犀の香りあの日を連れてくる
皮剥きの手間はさぞかし栗の飯
向い風の中で度胸もつきました
戦争が少しずつ押し寄せてくる

京都市　清水英旺

薬のむ長い戦になりそうだ
外交が下手で国民損をする
囚われの気分にさせる12桁
一億分の一の尊厳侵されぬ
剃り残しの髭がひねもす悩ましい

京都市　高島啓子

転がって収まりのよい方へ行く
叩き上げだいぶ無理してきたらしい
十のうち六つ出来ればよいのです
神さまに何度か助けられている
覚悟して最後の橋を渡るかな

京都市　桝本宏子

お野菜と会話が弾むおばあさん
満天の星恋の愚痴など聞いてほし
てにをはを省きこじれた姑と嫁
七十代が大活躍の町内会
アンコール手叩くだけの無責任

京都市　三宅満子

古希すぎて無駄な時間は戻らない
台風を耐えて来たんだ梨林檎
食べられるために生まれて来た秋刀魚
見栄張ってモンローウォーク腰痛め
雑魚の声聞こえぬふりの安倍首相

八幡市　今井万紗子

弁護する訳ではないが妻の勝ち
婚姻届べったり朱肉付いている
キレる前にちょっと羊かん丸かじり
お相手次第タンゴにジルバ踊れます
半端でも皆に好かれて逝きはった

長岡京市　山田葉子

低空飛行続けています自己管理
不意の客波立つ空気連れて来る
オシャレして元気に出向く通院日
拒むほどの大層なことではないな
わかってるのに素直になれず立ち尽す

大阪市　池上清治

孫の彼俺でも選びたい男
挫けそうな男引っ張る妻の愛
夕食は何と問う癖子も孫も
七五三たらふく食べて子等帰り
ノーベル賞眩しく仰ぐ友の顔

大阪市　井丸昌紀

銭湯の湯気の向こうに晒し首
飛び込んでみたけどそこは元の位置
わだかまり残ったままの風呂上がり
血を吸ったわけではないが彼岸花
巧妙な詐欺師身近な額を言い

大阪市　宇都　満知子

せわしなく生き物みんな冬仕度
かわらない老舗の豆腐買いに行く
酸いも甘いも卒寿の義母の知恵袋
脳トレにひとりじゃんけんたどたどし
重宝にスマホも祖母もつかわれる

大阪市　内田　志津子

飽食の子飢餓の子みんな地球の子
一歩ずつ確かめながら触れながら
芯のないコスモスゆらり生き上手
給料日楽しみひとつ添えておく
厨房に入る息子の中和剤

大阪市　江島谷　勝弘

爆買いにケチをつけてはいけません
ちちんぷいぷい妻の膝が治らない
漏れ防止下着気になる歳になる
あと十年句会めぐりをするつもり
楽しいな目線が同じ飲み仲間

大阪市　榎本　日の出

少しですタンス預金が笑い出す
浮いている地球でいつも熟睡す
死ぬなんて考えてないこの私
大阪はお好み焼きがご飯です
背が低いその分幅で貫禄を

大阪市　榎本　舞夢

塔まつり済んで心を癒してる
心機一転元気な内は頑張れる
来年は会えないかもと出かけてる
会えば楽し思わぬ話に花が咲く
秋満喫老いの身癒す旅プラン

大阪市　大川　桃花

コスモス寺秘仏開扉というおまけ
変換キー押してチャンスにするピンチ
リニューアルした公園でリフレッシュ
ゴミ捨てるマナーに国の文化見え
何所へでも一人で行ける内は華

大阪市　奥村　五月

僕さえも国勢調査プラス一
拝む神色が違うとすぐ戦
祖母の愚痴仏壇だけは知っている
美人の湯昔美人の揃い踏み
子が巣立ち猫の天下になる我が家

大阪市　笠嶋　恵美

一時間電話で腹のさぐり合い
プライドよ薔薇のごとくに凜とせよ
徳を積む和栽の友の清清し
子に手紙心配性に笑うでしょ
試着して鏡にうつす未来像

大阪市　川端一歩

夕陽見てそのでっかいを学ばんか
苦しい時笑えば風が変わり出す
ユーモアのセンスが切れた古道具
枯れるまで恋とワルサをしてやろう
八十歳デモの後からついてゆく

大阪市　熊代菜月

遠ざかる思い出ばかり日記帳
脇道にそれた心を呼びもどす
母の日も娘の都合で日が決まる
捨て切れぬ物ばかりなり更衣
メモ見ても思い出せない今日のこと

大阪市　古今堂蕉子

三人掛け真中の席苦しそう
紅葉の季節私は生き返る
平行線のところどころに子が座る
やさしい声だけはかけてくれるけど
あがりなやなどと緊張させる声

大阪市　小谷集一

自画像は十年さばを読んでおく
好奇心騒ぐと右脳目を覚ます
女性だけ長生きしてもつまらない
七分粥ジョークが言えるほどに癒え
匂いにも思い出がある路地の風

大阪市　近藤正

ニュートリノと心通わす梶田さん
気の利いた微生物から贈り物
凜と咲く花一輪のあるトイレ
TPP米議会さえノーと言う
大阪を潰す維新が好きですか

大阪市　坂裕之

会釈してご近所さんといい感じ
飲みだすと理屈をこねて強くなる
人波にもまれ真っ直ぐ歩けない
この次はりっぱな花を咲かせます
あなたなら出来る出来るとこそばゆい

大阪市　佐藤忠昭

運動会見知らぬ人と相席に
テントある敬老席は満員だ
我が子より力が入る孫走る
鈍足を押し付けあっても夫婦です
今日は奈良明日神戸で運動会

大阪市　谷口義

お待ちなせえと声を掛けたい十二月
目からうろこ落ちないままに十二月
ガッタンゴットン予定通りの十二月
湯通しをすると十二月になった
直角の椅子に座って十二月

大阪市　津村　志華子

電話口元気な声を誉められる
ひとり身の夕餉冷凍オムライス
投書欄世相に学ぶことばかり
寒風に杖もわたしも冬ごもり
来年の予定を立てている卒寿

大阪市　津守　なぎさ

旅準備指折り数え寝つかれぬ
手間かけて皆喜ばす栗御飯
最高の景色紅葉の渡月橋
突然に寒い日もあるかんな月
好き嫌いせずに食べよと医者の指示

大阪市　寺井　弘子

穏やかに春夏秋冬森の彩
シルクロード正倉展へ時空こえ
大漁で安価で堪能初さんま
バーゲンで品位落している淑女
家計簿の余白に残る涙あと

大阪市　寺本　実

七色の声で女は電話する
昇天はまだ許可せぬと妻が言う
妻と嫁隙間で生きる今の僕
りりしいな古い日記の兄と僕
茶柱がゆらりゆらりと立っている

大阪市　原田　すみ子

真っ新な明日へ悩みが先へ行く
無理もした体大事にいま使う
品数は有って今着る服が無い
勝つ時は味方どんどん増えてゆく
元気さが続くと思ってた不覚

大阪市　板東　倫子

口惜しいが死ぬまで抜けぬやせ我慢
古き良き時代に戻れと言うたとて
相談をされに帰った里がえり
日本のラグビー負けても世界一
孔孟の教え砂塵と舞うて散る

大阪市　平嶋　美智子

涙腺緩み時時うろたえる
淋しくない言いきかせても淋しい日
誉め言葉もらい八十路の有頂天
オットット鍛えていますこけません
発車ベル長く鳴らして終電車

大阪市　伏見　雅明

満員を承知で並ぶワンコイン
どこまでも防犯カメラ追ってくる
お隣の庭にはいつも癒される
会社から程よい距離にある飲み屋
手作りのパソコン僕の宝物

大阪市　升成　好

染みも皺も生きた私の宝です
遊び癖もう直そうと思わない
乗り越える筈だと神が出す試練
耳を貸す位の力にはなれる
未体験のグレーゾーンに老い進む

大阪市　松尾　柳右子

献立の脳活性に立つキッチン
昼食の淡路島へと連れてくれ
生け造りおいしい島に子等と共
髪染めて齢ごまかし達者です
投げ出した足に掛けてる肩掛けを

大阪市　山﨑　君子

飴なめてヘルパーさんと一息を
やさし子に今朝も涙のあとがある
入院満床看護師さんの白い服
青い空今朝も飛行機ゆっくりと
今日からはリラックスして何事も

大阪市　山本　加お里

久しぶり逢った友達言葉出ず
取り敢えず歩きなさいと医者は言う
車椅子乗っているのは老いた犬
五年後の私どうしているのかな
たっぷりと眠りたいのに朝が来る

大阪市　吉内　タカ子

秋晴れに歩け歩けの予定表
色々のリハビリ兼ねたカラオケ屋
デイケアで心を開く愚痴の花
平和こそ喜び学ぶ日を送る
親の歳こえて甘える味を知る

大阪市　若本　安代

介護して初めて知った生きること
善人と悪人となり父介護
親介護やっとお返しできました
巻き戻す古いテープに父の歌
笑ってる亡父の写真を引き伸ばす

大阪府　桑田　ゆきの

こすもすの里へゆっくり介護椅子
恙無い一と日となって菊日和
嵯峨野路の笹音さやと追うロマン
ノーベル賞受けて謙虚な話し振り
遠回り棚田にポツン破れ案山子

大阪府　野田　栄呼

若者はスマホに夢中歩行時も
体調へ優しい管理草むしり
ハーモニカ吹けて納得童歌
週一回自転車に乗る剣が峰
眠れない夜ない不思議あたためる

大阪府　籾山隆盛

くれないの美の中に立つ老いぼつん
出合いから恋の序曲が流れだす
何を掴んでなにを逃がした老いた手よ
完結のページ埋まらず時刻む
水滴の優しさ石を穿つ愛

大阪府　米澤俶子

明日あると信じる限りあるいのち
マイナンバー憶えきれるか悩む脳
マネキンは冬のファッション飾り窓
シュート前忍者の誓い五郎丸
いま今いましあわせいろの陽よ風よ

堺市　奥時雄

ゴルフでは上手な人が偉い人
ニュークラブ講釈述べてから素振り
ゴルフ場僕くらいだな5ナンバー
素振りする仕草他人は気障に見え
年寄りがファッション競うゴルフ場

堺市　柿花和夫

種ありの柿とぶどうに安堵する
満員の昭和が恋し縄電車
何もかも流した水に溺れてる
断捨離敢行私の番が来る前に
女子会でころころ笑うのがサプリ

堺市　加島由一

勝ち負けの分かるパチンコ屋の出口
タクシーに聞くおいしくてやすい店
ウィスキーだと帰宅できなくなる怖れ
歩き出した孫によちよちついて行く
高三のような気分の七十二

堺市　源田八千代

組み体操の孫の勇姿を撮り損ね
巡回のおまわりさんも疑われ
身体中トラブル抱え存える
息子夫婦とんぼがえりで父見舞う
スーパームーン次回見るのは彼の世から

堺市　齋藤さくら

定年後多弁になっている夫
人前であがらぬ呪文掛けた筈
誰に世話なるか判らぬ飴をまく
物忘れ年相応と言うてくれ
無意識で置いた財布が見つからぬ

堺市　澤井敏治

山の神よく旅行する神無月
神の留守に子供を託す七五三
木枯しが灯油を売りにやって来る
雨戸カタカタ冬将軍に燗二合
黒田節ひと節待って年の暮

戦後七十年で原発ゼロ終わる
運命に寛容になり老けていく
清貧の分からぬ孫がいとおしい
もみじ狩り少しあるいて落ち着かず
リハビリに気合の妻が紅をひく

堺市　遠山唯教

夫より姑に甘いのが不満
振り向けば長い階段苦にならず
これからと言ってるうちにお正月
息子らに顔忘れたと便り出す
国勢調査聞いてくれない幸福度

堺市　内藤憲彦

幾度かピンチ切り抜け長い旅
また明日へ望みを託す丸い月
悩み事薄らいでゆく青い空
お隣のお花が種を蒔いてくれ
不機嫌なかあさんそっと避けてゆき

堺市　宮本かりん

何となく胡散臭そな総理の弁
全国民にわかラグビーファンです
ピッチャーで四番昭和のガキ大将
言い訳が嫌いで黙って叱られる
物真似の上手い男のオノマトペ

堺市　村上玄也

白と黒だけでは渡れない浮世
ライバルの独楽はまだまだ廻ってる
人間が好きなんですと低音で
車で五分 日参だって出来る墓
スケジュール埋める嬉しい知らせ来る

堺市　矢倉五月

逃げ道を少し作った妻の愚痴
プライドがあって車座に入れぬ
長生きのコツを教えた父が逝く
共白髪歩きたくなる靴を選る
エンジンを全開にして八十路坂

和泉市　横山捷也

言霊の揺らぎに残す塔の句碑
トラブルを避けた妥協のツケに泣く
すっぴんのジョギング誰も気がつかず
白鳥の優雅とバタ足の必死
母はもう古い記憶と遊んでる

茨木市　島田誠一

秋風が戦力外を告げにくる
子の船はひょうたん島へ行きたがる
B面の君が分かってからの距離
法人税減税消費税アップ
祭りには帰れと金を添えて書く

茨木市　藤井正雄

大阪狭山市　矢野　梓

さぬき富士見えて家郷の風やさし
さぬき路のうどんに和む国訛
旅帰り二人の暮らし再起動
新米に秋のレシピが忙しい
八十路来て時間のロスもしておれぬ

貝塚市　石田　ひろ子

手摺り付きのトイレ優しくおもてなし
ばあちゃんが生き生き食べに行く話
早や孫もイクメンパパの板に付き
二世帯の二階も静か秋の午後
寝返りを打ち追い掛ける五七五

河内長野市　植村　喜代

ショートステイああだこうだとすぐ三年
波の音幼い頃は幸もらい
いつまでがんばれるか八十六
娘と病院ゆっくり話せる待時間
座ってると鳴らないのに立ったら鳴る電話

河内長野市　大島　ともこ

ライバルのお陰で今の僕がある
大風呂敷広げ調子に乗る喋り
親の怒り愛と分かった墓の前
削る物もう無いギリの暮らし振り
何もかもに笑い転げた少女の日

河内長野市　梶原　弘光

いじめられぬうちに鍛えてどこ悪い（安保法　2句）
九条を宝石箱に入れて鍵
一度だけチャブ台返ししたかった
また半歩前に世話役買って出る
ふる里の古老市長にないオーラ

河内長野市　木見谷　孝代

友とのギャップが刺激になっている
夫とのギャップようやく楽しめる
議事堂がゆらり反戦デモの波
古都人気寺社に飛び交う外国語
農園に手塩にかけた宝物

河内長野市　黒岩　靖博

胸借りた兄と競って恩返す
十万キロ走って元気わが愛車
花火だけあげても諭吉集まらず
すらすらと筆一本で経木書く
千二百年霊気漂う高野山

河内長野市　坂上　淳司

冗談の積りの舌禍人を刺す
暴飲暴食の罪に大腸癌の罰
生真面目に生き認知症とは解せぬ
戦わぬ誇りを捨てた罪な法
パチンコのたんまの勝ちは還付金

河内長野市　谷　久美子

諦めず再チャレンジの粘り腰
あれやこれ迷い無くして逝くあの世
母ちゃんが静かな時は要注意
日本の誇り今年もノーベル賞
諦めと切なさ古希の誕生日

河内長野市　辻村ヒロ

二人して時を紡いだ意味がある
隠したい私が覗く日記帳
年年と潤滑油減る連鎖力
負けは負けタラタラ言わぬ潔さ
あの世へはさわやかに行くつもりです

河内長野市　藤塚克三

二人暮らし互いの狡さ認め合い
やる気ないのに血圧だけが高くなる
朝と夜の薬間違え調子良い
病院の相部屋鼾震度3
B級グルメ決め手のソース喉渇く

河内長野市　松岡篤

息抜きに柿ピーナツを二つ三つ
カルテより私を見てねお医者様
親しいが恋人未満五十年
隣席が松頼んでる僕も松
口喧嘩妻相手では不戦敗

河内長野市　山室光弘

白秋もハイネもとんで秋祭り
むっくりとお洒落心に秋の風
演奏者変りましたと虫の声
秋の虫まだ聞けるぞと思う幸
メタボには何より恐い秋の味

岸和田市　岩佐ダン吉

眉を上げるもう大勢は気にしない
深刻な顔して散歩やめなさい
道ひとつ孤立だなどと思わない
本当のあなたの色は何ですか
多数派の中で耐えてる無力感

岸和田市　雪本珠子

ドクターも我が身のサイン気付かない
反対と息巻くだけで能が無い
雑草が都会の隅に根をおろす
紅一点座に彩りを添えている
ぐい飲みで白寿の母が祝い酒

四條畷市　吉岡修

どなたかの都合で僕に来たチャンス
アメリカとコンビだなんていい度胸
この腹を割って見せたいとも思う
どきどきして会いたく靴をはきかえる
精いっぱいお愛想してる鬼瓦

吹田市　太田　昭

戦争は反対だろう蟻の列
ライバルにタオルを投げた生みの親
反対の言える野党で生き延びる
場数踏んだライバル半歩先を行く
神か仏の所為にしておく赤い糸

吹田市　大谷篤子

断捨離をすればするほど寂しい日
ときめきを思い出させる茜雲
ロスばかりゆっくり書けと叱られる
とっときのワインで乾杯スーパームーン
よく笑うピエロを心に住まわせる

吹田市　木下敏子

紅足して元気な顔をしています
自信など無いが仕方無く歌う
簡単に人は言うけど難しい
好きな事して秋の日の短か過ぎ
ひと房の葡萄無口にしてしまい

吹田市　須磨活恵

贅沢は出来ぬが少し旬を食べ
健康で秋には秋の実を食べて
十二桁長すぎないかマイナンバー
見栄張らず野に咲く花が性に合う
辻地蔵拝んでやすらぎを貰う

吹田市　野下之男

流石だねやる時はさっと自衛隊
台風も日本に挨拶忘れない
天国の夢を見たいが出てこない
初恋の話は妻に言いそびれ
カラスから見詰められては片付ける

高石市　浅野房子

塔まつり思い乍らの医者通い
プライドのかけらも無いが意地はある
朝夕の温度差十度とはきびし
乱暴な男意外にもてている
最後には運命論でけりが付き

高槻市　井上照子

渋滞でここがまんのするところ
バーベルを上げて女も筋肉美
無気味ですロボット返事するなんて
サングラス外して話しませんか
ある猫の一生人の役果す

高槻市　指宿千枝子

体力の衰えゆるり知る傘寿
八十路坂ゆるり参ろう僕の旅
ゆるゆると生きる幸せ土いじる
人間の森で迷ったお猿さん
野いちごを探した森が懐かしい

高槻市　片山　かずお

蟻の列二割は何もしていない
心配されてしたらアカンが増えて古希
いいライバルが居たのでついてきた力
幼子の内緒話がこそばゆい
アキアカネ追って気づいた空の青

高槻市　島田　千鶴子

アングルを転換見えてきたチャンス
甘い声胸にさざ波立てて行く
余生とや素顔のままで生きていく
できるなら翼あげたい拉致家族
ほっこりと日溜り抱え眠る猫

高槻市　初代　正彦

また一つこっそり失せている記憶
こんがりの焼き芋亡母と半分こ
引き際のきっかけ探る作業服
お別れのけじめもつけた盆休み
ゴミ箱の勿体ないが目に余る

高槻市　杉本　義昭

子の世話にならぬ覚悟のジム通い
腹割って話せる友がいる余生
我慢した言葉がぽろり落ちて冬
願い事色を選んで鶴を折る
階段は右足からと決めている

高槻市　富田　美義

井戸端も今じゃスマホが肩代わり
ランクとは貧富とルビを振っておく
無学ゆえ汗の種類でカバーする
お墓まで引っ越しポチが騒がしい
生きるには秘密感謝とお蔭さま

高槻市　富田　保子

美しく老いて微笑み敬老会
汗だくの秋味母のこころ来る
いい気持飲めない酒を飲んでいる
無垢な子がスマホで学ぶ社会学
今の世に何か言いたい菊人形

高槻市　原　洋志

千切れ雲流れて俺も未完成
喧騒をひとまとめして陽が沈む
夕映えの裸木は今日の終止形
五感みな広げ明日の風を待つ
坂道の多い都会で苦戦する

高槻市　安田　忠子

古寺の階段登りつめて秋
忘れ物二階へ上がり下りばかり
古文書の講義を受けて畏まる
銀行でおしゃれ褒められ預金する
落語家の扇子で話すほんまもん

豊中市　池田純子

おかえりの声が待ってる秋祭り
いただきます声を揃えて朝ご飯
ルーティーン熟なせばきっとあるゴール
じぞうさま秋のお供え嬉しそう
どこまでも笑顔の君について行く

豊中市　江見見清

ＳＬにまず石炭の話から
言い訳はしない生まれつき無口
先例が大事と悩む祝い金
正義感あるはずだけど黙る
赤鉛筆が耳でいらいらする予想

豊中市　松尾美智代

朝五時の空気がピンと張ってくる
和食の美戴きましたお皿の絵
語り芸私の心鷲掴み
まだ空気にはなれぬ時どき喧嘩する
裏を掻く才能もなくご飯炊く

豊中市　松村里江

血縁のうすい我が家に初曾孫
結び目はかたく約束守りたい
蝶結びほどいてお口汚しにと
ずけずけと言う嫁ですが頼り甲斐
ウツでしょか何をするのもおっくうで

豊中市　水野黒兎

昭和とは蛇の目の傘の若い母
待ちぼうけつぼみのままの花時計
行かぬけどパリは晴れとかここは雨
再会にまず面影を探り合う
春秋を重ねた顔の羅漢さま

富田林市　片岡智恵子

亡母はすてきなライバルだった追いつけず
常連は決った席でアメリカン
月欠けて満ちてゆっくり老いてゆく
五色豆はんなり京の彩をもつ
いきさつはすべて聞いてるうちの犬

富田林市　関よしみ

いい笑顔滾らせている玉の汗
絵手紙の秋のたわわが届けられ
天平の美人に逢える里の秋
木の実たち車座で楽しく混ざる
水琴蜜古い記憶が跳ねて秋

富田林市　中井アキ

傍に居るだけで幸せいろになる
愛情も水もじっとはしてくれず
縄とびは無理だが青い空がある
忙しい嫁の優しいＥメール
八十五まさかまさかの表彰状

富田林市　中村　惠

仕舞い湯に明日の力を養おう
逆風に耐えて歪な青リンゴ
切り岸の女あくまで妥協せず
紙栞はらり一人の秋夜長
小商いに徹する低い低い腰

富田林市　肥山一文

お好み焼通いつづけてグルメ通
三ツ星の料理長から教えられ
子も孫もまるい輪になり鍋つつく
我が子よりペットを抱いて散歩する
いつの世も狡猾な奴生き残る

富田林市　山野寿之

足し算は得手でも引き算は苦手
朝市に化粧は要らぬ素の野菜
手を出さず側で我慢をするも愛
場違いの香水の是非山ガール
友が逝きワンマンカーの縄電車

寝屋川市　冨山ルイ子

イベルメクチン命に光当てられる
JPSパーキンソンに光を
エイズにも光が当たり死なずすむ
大根の間引き菜飯で秋を食べ
海老鯛になってしまった贈り物

寝屋川市　平松かすみ

兄ちゃんと駆けた棚田は藪になり
ご先祖に居ないが目差す白寿まで
天秤にかけられ五十八年目
亡き姑の教え今ではありがとう
羽衣で行ってみたいな宇宙基地

羽曳野市　安芸田泰子

流れ星未だ老残の願いごと
ダイエットをいたぶりに来る秋の天
平成のさつま芋には飢えがない
散歩道案内役の赤とんぼ
すすき原風に逆らうことはなし

羽曳野市　宇都宮ちづる

見事だがいつも通りの菊花展
ガラガラの医院に不安湧いてくる
寺詣で遥か見上げる八百段
公園に大人の遊具老いも増え
全没に献盃明日に切り替える

羽曳野市　徳山みつこ

責任へ首ひっこめたまま五輪
鍵は財布はひとり芝居の泣き笑い
この家がいいひとりでも不便でも
句報刷り上がり夕日にありがとう
熱いお茶山から冬が降りてくる

羽曳野市　永田章司

断捨離が出来ず手狭と戦中派
屈辱の降格名刺出し渋る
他人には推し量らせぬ胸の内
いい人を味方にしたが頼りない
開いた口閉じる間もない世相です

羽曳野市　藤原大子

曖昧な言葉で距離をおく癖が
近頃は元気なうちが口癖に
欲妬みちょっぴり持って艶を出す
取り繕うそばで冷や汗かかす孫
沈黙にさせた言葉を省みる

羽曳野市　三好専平

戦争はさらに戦争ひきおこす
戦争は思想の自由許さない
勝つための極意は戦争しないこと
天皇陛下のために戦争できません
命令に従わぬ者死刑なり

羽曳野市　吉村久仁雄

満員の電車でつのる孤独感
連山を映し休耕田静か
与党席陶器でできた首並ぶ
古い血が騒いでデモの後につく
正論で鍛え抜かれた石頭

東大阪市　北村賢子

丁寧に日々を紡いでいる余生
油断した風邪にとことんいじめられ
お互いに相手居ない日家に居る
天高くノーベル賞と新諸閣
意識して背筋を伸ばす老いの坂

東大阪市　佐々木満作

万葉の歌集に学ぶわびとさび
マニュアルの通りにせぬと疎まれる
風を知るとなりの芝生よく栄える
満月を見ると気になる娘の安否
責任感母夜鍋して愚痴言わず

枚方市　海老池洋

凡凡で終る夕日にしてしまう
負けて勝つ禅問答を解きつづけ
町中の特ダネひそと立ち話
逆さまと誰も気づかぬ三色旗
仏心になれぬが鬼心にもなれぬ

枚方市　小林わこ

嵐来る前に身辺整理したいもの
運がないやっぱりご飯炊いている
母の指知っているのは美味い柿
長電話今日の予定が狂い出す
ほろ酔いのワインであなた許せそう

枚方市　伊達郁夫

ルノワール乙女心が散歩する
プライドの繕いばかりして暮れる
許すよと父の返事は目を閉じる
絵ハガキに孫の体温載せてくる
雨しとど深追いなんかするものか

枚方市　丹後屋　肇

スローライフ生者必滅噛みしめて
チュンチュンの声で目覚めるワンダフル
後の祭り悔しがってる多数決
考古学者麦藁帽子放さない
席空いてトナリに坐る赤い糸

枚方市　寺川弘一

疑えば天気予報もきりが無い
青い鳥餌がわからずまだ飼えぬ
滅多なことで落ちては来ないシャンデリア
起きて来たのに無言電話である深夜
目立ちたいから逆光の位置に立つ

枚方市　二宮紫鳳

夕焼けがウオークの二人熱くする
コスモスを活けて食卓動き出す
国なまり距離を縮める超美人
健やかな年を重ねる口達者
同病で話が弾む待ち時間

枚方市　二宮山久

あの人の後姿に歩を早め
若い娘の胸のふくらみ気にかかり
あの走者さすがに速い親譲り
やりとげて達成したい趣味続け
さすがなるやりくり上手年の功

藤井寺市　伊藤アヤ子

八十歳まだ直らない国訛り
胃袋を満した赤子すぐねむる
あなたより一日でも長く生きねばと
一人前スポーツウェア着て弾む
草むらに姿見せない虫の声

藤井寺市　太田扶美代

穂が揺れてドサリと秋がやってきた
ついておいでと言わんばかりに揚げ雲雀
実をつけぬ花にも言い分はあった
冗談を言い合い軽い鬱を消す
何かやれそうそんな気がする余白

藤井寺市　鴨谷瑠美子

白セーターも黒セーターもひとを恋う
すぐ開く嬉しがり屋のてのひらよ
勇気を倍にしても無口に壁がある
すれ違う話ホントに寒い日だ
やり直し出来るだろうか目を洗う

藤井寺市　鈴木　いさお

甲斐性は無いが律義な父でした
粗衣粗食母は質素な人でした
花買って来たのと妻は嬉しそう
おじいさんどうぞと席を譲られた
達者でいたかと富有柿が届く

藤井寺市　津田　シルク

キリリと眉描いて戦士となる女傑
赤い糸からんだままで娑婆に咲き
定量を守れぬ左党の医者通い
不覚にも見抜けなかった子の悩み
口出しはやめる昭和はもう昔

藤井寺市　増井　ヨシ枝

93歳「ほのか」ちゃんとはまた粋な
首かしげ甘え上手になった孫
虫の音も消えて祭の大太鼓
花達の私語を聞いてる朝の庭
爺ちゃんの膝が大好きボクの椅子

藤井寺市　若松　雅枝

秋晴れの小道に石の道標
蟹ツアー出発までのお楽しみ
ブランコ揺れてそろそろ山に秋の彩
冷暖房不用の今が有難い
控え目な母で家中仲が良い

藤井寺市　吉田　喜代子

古傷は七十年を過してなを
来年の予約聞いてる花の種
彼岸花プランターからこんにちは
長寿国こんなに患者多いとは
しみじみと満月仰ぐ我が居る

松原市　森松　まつお

さわやかな目覚めとやらに憧れる
ハローウィン今日はカボチャを食べる日か
羊羹を頂き玉露買いに行く
OB会食べ放題は遠慮する
阪神のファンぼつぼつやめようか

箕面市　酒井　紀華

丸テーブルに家族がそろう昭和の灯
天寿にはゆらりと墓が降りてくる
ふるい日記に恋の足跡二つ三つ
ペンギンの歩幅に合わす老いの坂
アルバムのあなたが宝千の風

箕面市　広島　巴子

虹見た日夢で子や孫ドレミファソ
かぐや姫気分で月の迎え待つ
湿布薬はり合い夫婦凸と凹
妖怪をやっつける孫宇宙人
ぶらり旅友達一人増えました

八尾市　高杉千歩

小春日にノーベル賞とマイナンバー
よう動く脳で私を眠らせぬ
いつまでのいのち中トロ欠かさない
自重して独り気儘よ月冴える
大阪を元気にしたいのは同じ

八尾市　宮崎シマ子

病む父が探していたのは亡母だろか
子の恋も稲も稔って天高し
秋の一日彼に電話がしたくなる
十二月予約の旅があと一つ
パヒプペホお婆も女の夢がある

八尾市　村上ミツ子

株価左右した福山の結婚
わたしには何も関係ない話
返せないお金はぜったいに借りぬ
マイナンバーまたもストレスたまりそう
普段から散歩コースに避難場所

八尾市　山根妙子

万灯会ゆらり彼岸の道しるべ
千歳にて鮭の溯上に拍手する
片付けの手を止めて読む古日記
検印がかすかに残る亡父の便
種蒔いた母の実りを受けて秋

神戸市　上田和宏

朝刊を取りに出るのが日課です
この夏はとかげやもりが庭に来ず
いい季節読経の声が子守歌
誕生日生命線のどのあたり
世渡りにニコニコ寡黙修行中

神戸市　奥澤洋次郎

山開いた希望の街に過疎の風
地図にない道も踏み分け古稀の席
父さんはもう居りません床柱
母さんがママに変って小家族
孤立格差淋しさを増す秋の風

神戸市　白川淑子

翳りゆく人生の午后ゴッホの黄
母の歳越えるゆらゆら白日傘
ぼんやりと暗いところでする化粧
豊作のおこぼれ雀カラスにも
ほどほどは無い不器用な私の手

神戸市　能勢利子

流されず自分生きると決めた古稀
勇気あれば一人でふらり空の旅
二キロ増えバスは乗るなとシニアパス
美容院年金前はガッラガラ
ドアバタンここに居るぞとおじいさん

深呼吸帰省子の気迫満ちている
墓参りすんで親子で食事する
熱中症孫も私も医者通い
建前と本音を守る脳活だ
炎天下球児の汗にある大志

神戸市　福原悦子

しあわせを一ツ探して床に着く
輝ける未来へ繋ぐ膝手術
次の色さがす白紙になった恋
ぶらり来た滝のしぶきに清められ
まびき菜のおいしさ悔いは残さない

神戸市　松井文香

フィクションと知りつつ涙するドラマ
痛む脚痺れも住みつき今日寒露
わたしなりの物差しに変え傘寿生く
風もないのに秋明菊が揺れている
鉛筆と消しゴムの仲考える

神戸市　山口美穂

受け方で良くも悪くもなるニュース
長生きのつまりは長期納税者
サシの目の広いわたしは楽天家
無駄遣い余命だけにはしたくない
陽と闇のギャップで影は生きている

明石市　糀谷和郎

のぞみ通りになり過ぎるのもコワイ
突然のさよならだけはしたくない
お役目を終えたか皿が割れました
スパイスを効かせ窮地を切り抜ける
百歳を生きる私をふと思う

芦屋市　黒田能子

喋るだけ喋って母は大往生
大都会土を探しているモグラ
雨の日はのんびりネットでショッピング
予報士に外出着までチェックされ
指切りをしたら仲間にされていた

芦屋市　竹山千賀子

よく遊ぶ人は仕事もよく出来る
あきらめずパン屋はパンを今日も焼く
ニューファッション育メンパパの抱っこひも
音もなくドンドン迫る物忘れ
坂道を無事に越えれば明日が見え

尼崎市　市坪武臣

燃え尽きたようだが種火残してる
わだかまり溶けてさらさら午後のお茶
レシートはやっぱり貰うべきだった
傘畳み天寿に託す日日を生く
シャネル着るひとはシャネルになっていく

尼崎市　加川靖鬼

尼崎市　長浜美籠

変わりなく励ましくれるトースター
ハイタッチ声は出さない目が温い
すらすらと事が運んだ菊日和
チャンネルを競った頃が懐かしい
おはようと手品のようにバラが咲く

尼崎市　春城年代

スタンドを消すとはっきり胸の内
焦がした鍋に責められている二三日
少年のつぶらな瞳負けないで
仕舞湯で楽しいきょうの羽根ひろげ
あたたかさ知った指からねむくなる

尼崎市　藤井宏造

割り箸がスパッと割れて飯うまし
一人鍋あっと言う間に終わっちゃう
膝閉じて座ってほしいミニの女
活躍をそっと見守るサユリスト
夕焼けを背にいそいそと縄のれん

尼崎市　藤岡りこ

自分は自分他人と比べるから虚し
田園に観光客を呼ぶ案山子
反抗期過ぎて心の窓開く
喜寿にもある未来明日の風に乗る
試食コーナー知人に会って買った見栄

加西市　金川宣子

見方変え違うあなたに新鮮味
死ぬ時はポックリ逝くと足慣らし
強面の妻にはエステ通わせる
古本にひとひら挟む恋見つけ
老いた母スプーンで食べる熟し柿

川西市　大坪一徳

身の丈に合った暮しは心地良い
褒められる生き方するとくたびれる
幸福論自分は自分他人は他人
居酒屋で亡き友偲ぶ家族葬
乗り物に乗ってるだけで腹が減る

川西市　山口不動

秋たわわノーベル賞に日本人
呼びかけが関所のような赤い羽根
ふるさとは祭きんもくせい薫る
バアバ作運動会のお弁当
彼岸では酒存分に飲んでるや

篠山市　酒井健二

トラウマを消すのは時間だけですか
体験は戦後に生まれ忘れない
五百羅漢厳しい顔の像もいる
食足って住まい服まで言うまいか
ポジティブな貴方まさかのウツですか

篠山市　酒井真由

封印をといてふわりと逢うている
まっすぐなひとの怒りをうけとめる
思い出のかたちレコードプレーヤー
にっこりと蹴とばす恋の相関図
長かった夏が終わりを告げるとき

三田市　足立つな子

傷ついて人情味ある苦労人
すけずけと飾り気のない暖かき者
酷暑去り自然の風に安らぎを
味祭り右党左党も丹波黒
賑やかな世代を偲ぶ義姉ひとり

三田市　石原歳子

親友の昔変わらぬ情が好き
お彼岸の講話を聴きに寺参り
新幹線のホームでやさし人と会う
イタリアのテナー日本の歌うたう
声おさえイタリアの歌うたいます

三田市　上垣キヨミ

物理学荒れた三面塗り替える
蟠り消えて二人に雨後の虹
ケータイを探すどこかで鳴っている
少子化を嘆くブランコ独り言
沈む陽に明日も元気で会いましょう

三田市　久保田千代

新米に秋刀魚があれば天高し
彼岸花見とれて行けば父の墓
千の風吹いているのに墓まいり
墓前にて手を合わせてる私居る
血を分けた姉妹あまりに遠くいる

三田市　野口晶子

ゆるやかな悦び続くはずの老い
化石にも銀河に祈った恋がある
三歳のママ威張り出すおままごと
伸びのびと育った息子ひょろ長い
ネジ巻かぬ針は止まったまま平和

三田市　福田好文

ブランドをまとうと街へ出たくなる
作品の割に立派なペンネーム
おばさんは見知らぬ人とすぐ喋る
スッピンも慣れればさほど怖くない
日めくりと一升瓶はすぐに減る

三田市　堀正和

どこへ行った公園にいた赤トンボ
事件事故ここにも居たか日本人
髭までもスローテンポで伸びてくる
決めましたパソコン一日一時間
勝と言う名をつけられた子も古希か

宝塚市　田中章子

車窓には秋が広がり乗り越した
片羽が翔ぼうとするとすぐ折れる
ばあちゃんとの同居が実る茶の作法
ルーティーンが変わるけつまずいてから
読み聞かせ文学少女育てます

西宮市　秋元てる

譲られてにっこり座り喜ばれ
騙される事も時には悪くない
ばあちゃんの「この間ね」は終戦時
期待する数字出るまで血圧計
下り坂は楽だと思うて居た迂闊

西宮市　足立茂

大物の名刺が一人歩きする
波立てずひたすら僕の風を待つ
車座の一升瓶が策を練る
面接官にズケズケ言って落とされる
生き字引がヤル気失うＩＴ化

西宮市　片山忠

へとへとに成るほど広い遊園地
右寄りも左寄りでも聞く熟女
お早うを妻と自然に交わせない
もののけも一緒に交じる終電車
ひまな日に祭壇用を選っておく

西宮市　亀岡哲子

ワンワンへハイと返事をして目覚め
誰かさんと喋る楽しみ医者通い
あねいもと個性極まり高齢化
ひっそりの街をだんじり走り抜け
汗にじむ古いお札が見当らぬ

西宮市　西口いわゑ

りんご剥くふと思い出す亡母の指
玉手箱譲られ開けるのが怖い
大切に今を生きてる花すすき
れんげタンポポ幸せくれた首かざり
彼岸花すっくと天にもの申す

西宮市　福島弘子

安保法曼珠沙華まで立ち上がる
着地点風にまかせる竹トンボ
赤トンボ仲間に入れて墓参り
手探りのスイッチ今朝は間に合った
耳鳴りの耳にも涼し虫の声

西宮市　牧渕富喜子

虫すだく足踏みしている暇はない
あなたから私に変わる書類書く
このままでいい筈がない影長し
くさり目十二の輪から始めるマイショール
隅ずみに遺していった温い風

西脇市　七反田　順子

かまきりが一宿一飯舞い込んだ
手際よく柿むく夫の自負みたり
新米の栗ご飯です仏様
収穫祭苦労の汗を知る稲穂
古典落語お経のように聞いている

姫路市　古川　奮水

リズム良し凝視を誘う大道芸
年寄りの笑顔も並ぶ海遊館
スポーツの実況放送昼夜見る
二日酔い大風呂敷が破れだす
福知ヶ原すすきが光るフルムーン

奈良市　阿部　紀子

修学旅行夫婦岩だけ覚えてる
石切神社祖母の平癒の百度石
あやめ池お化け屋敷を飛び出した
伊勢神宮静寂の中静々と
始めて食べた鮑ステーキ志摩ホテル

奈良市　大久保　眞澄

官邸の進軍ラッパ孤独なり
上品な口からこぼれ出るイケズ
とんがった人の猫背を見てしまう
無色だからなお罪深い放射能
ポックリ死そんな卑怯なことをして

奈良市　加門　萌子

そんな時臨時ニュースのノーベル賞
見る程に聞く程に知る偉人性
日本は秋を楽しむ平和有り
満月の夜師匠が二人黄泉に立つ
無に還る土にかえるも近くなる

奈良市　辻内　げんえい

樹も虫も異常気象に迷ってる
洪水も地震噴火もみな日本
いい夫婦妻の演技に勝てません
品定めを中途半端にネット買い
かくれんぼ小さな声の「まーだだよ」

奈良市　米田　恭昌

不揃いの芋も親子の自信作
地場野菜陽の匂いさせ誇らしげ
口裏の頼りにならぬ芝居下手
余生まだ上り下りの坂ばかり
懐古談話すぢいぢの目が若い

生駒市　飛永　ふりこ

白髪の品位そこはか匂います
熱燗に悔しさぽろりとろけ出す
全没をピーチクもがく腑甲斐無さ
昭和ふと背番号3口ずさむ
同じなら呑んでしゃべって明日の覇気

橿原市　居谷真理子

ぐっすりと眠る仏壇ある部屋で
虫の音で洗う噂を聞いた耳
今日逢おう僕は明日を信じない
人恋しヒャリコヒャラリコ笛を吹く
新しい私は私の中に居た

奈良県　安福和夫

喜寿迎えわが人生は佳境入り
古き良き時代の回顧よりも今
利害ない人付き合いで生き返る
川柳のお蔭で視野に広がりが
妻と解くクロスワードが楽しみに

奈良県　谷川憲

生きてきた道に未練を埋めてある
老犬にきつくはないか内視鏡
試合後の飲み会楽し草野球
欠席の言い訳いつも変えている
ノーベル賞謙虚な弁にじんと来る

奈良県　中原比呂志

消しゴムが助っ人自分史にフィクション
溶け込んでいるが変えない自分色
物忘ればかりで消えたロスタイム
節税をします免許証返納
修正をすれば無罪となる帳簿

奈良県　渡辺富子

仰ぎ見る日時計付けた子の新居
喜寿祝う一族集う子の新居
にっこりと横に座っているまさか
踏み迷う老いの樹海へ虹が出る
空しさのすき間にしのび込むポエム

和歌山市　磯部義雄

古着着て一役買っている案山子
深呼吸すれば豊かな秋の空
巨大化で生徒崩れるピラミッド
満天の星の数ほど泣いた恋
誕生日飲んで帰れば待つ鬼面

和歌山市　上田紀子

あちこちで種蒔き実り期待する
辛酸を嘗めて振り出しへと戻る
哲学も秋の夜長も眠たいね
夕焼けがこの世の汚れ消して行く
男気が邪魔で世間を狭く住む

和歌山市　楠見章子

車間距離蕾のままの恋ひとつ
体力の無さを悟った足の裏
面影が優しいだけの里になる
女子会の予定腰痛もう忘れ
長らえてご近所さんが有り難い

和歌山市　坂部紀久子

バスに乗り行く当てのある有難さ
大型連休何も変わらぬ一日で
想定内足腰へきた八十路坂
痛いとこちくりと突いてくるメール
田舎道おじぎする穂に励まされ

和歌山市　武本碧

一生はあっという間の玉手箱
きっかけは一つ違えたボタン穴
スケジュール総嘗めにして来たメール
水面下パントマイムが騒がしい
オペ無事に済んでくつろぐアメリカン

和歌山市　玉置当代

あれこれと迷い一日棒に振る
収穫の秋だリンゴを丸噛り
何もかもあなた任せで生きてます
大風呂敷広げて畳むことできず
あの言葉まだ鳩尾にひっかかる

和歌山市　土屋起世子

輝いて孫懐妊を告げに来た
尽すことやめて自分を取り戻す
青空に迷路の出口教えられ
レシートやチラシの裏が備忘帳
ハロウィーン魔女や悪魔が来て楽し

和歌山市　福井菜摘

私を鍛えてくれた向い風
積み上げた汗が輝く歳になり
三角も四角も丸くする器
触れ合えば分かち合う日がきっと来る
小吉でいい伸びやかに今を生き

和歌山市　福本英子

秋晴れを待ち侘びている別れ
サヨナラと書いた手紙が舞い戻る
余命まで計算ずくでよく遊ぶ
仮面いつ外そうか鍋煮える
亡夫との戦さ綺麗な夢景色

和歌山市　堀冨美子

目線変えソフトな地図を描いて行く
災害へふと私を置き換える
五年振りクラスメートと老い比べ
最後かも知れぬひと日の絵が弾む
スケジュールまだ私を見放さず

和歌山市　松尾和香

国体へ参加の孫の晴れ姿
始発電車野球応援ひとり旅
一点の重さ九回同点に
九回裏並ぶゲームに盛り上がる
一期一会応援の輪に泣き笑い

岩出市　藤原ほのか

ギャップにもめげず階段上りきる
アルバムに秘めた思いはセピア色
精一杯生きたあなたを忘れない
平成のイメージ壊す安保法
あるがままイメージ通り擦り抜ける

海南市　小谷小雪

便箋のおおきにの四字転び出る
ありがとうをざっくり束ね持ち歩く
同じ時同じ土俵に居る至福
山道を灯ともし誘う曼珠沙華
北に生きるどの人の目もあったかい

海南市　堂上泰女

喫茶店で逢うた気分の長電話
三猿になれば生きてる気がしない
陽のあたる方へ転がってく息子
何かして上げたくなった孫素直
ジャンケンで負けても次へ準備する

紀の川市　宇野幹子

羊水の中で命が開花する
二番手の走者に風があたたかい
米を研ぐ冬の匂いのする蛇口
診察券ふえても笑顔持ち歩く
永訣の柩へ蝶がもつれとぶ

紀の川市　北山絹子

新聞を逆からめくる癖がある
無口です妻が言葉を足している
そろそろと油切れしてきた夫婦
悪友の別れ話へ同意する
いつの間に他人になっていた二人

紀の川市　楠原富香

逆らった母に詫びつつする介護
トンネルを抜ければやってくる明日
脇役に徹し続いた夫婦旅
子が巣立ち孤独がドアをノックする
年金が生きる不安を和らげる

田辺市　岡本昇

長い目で見てやっている孫二浪
軍服の遺影不戦の先に立つ
ちょっと待って只今塗装工事中
苦労から逃げない母の太い腕
行き当りばったり後期高齢者

橋本市　石田隆彦

年賀状も断捨離させて頂きます
現実を見つめ過ぎると愚痴が出る
苦手です空気の洩れるさしすせそ
地球の号泣ですよゲリラ雨
過疎の地を守り続ける石地蔵

鳥取市　有沢せつ子

人の句の上手さを声に出して読む
やはり歳掃除の速度落ちてきた
惜しみなく着ようスーツが古くなる
孫二人鳥取産の秋送る
朝ドラを一日二回見て飽きず

鳥取市　池澤大鯰

八岐大蛇同床異夢のなれのはて
頭数揃えていればそれで良し
出世頭この程度の俺持ち上げる
頭割り押しつけられる負担額
ヘボ頭かしげるポーズ癖になり

鳥取市　加藤茶人

不自然さどこか漂う若作り
脳トレに昔の事は良く覚え
引き算の暮らし年金少し貯め
ともかくも他人の印税気にかかり
虫が食うその後人が食う青菜

鳥取市　岸本孝子

奥の手の賞味期限が切れていた
夢を盛る皿は小さい方にする
叶うなら私自然死望みます
ＤＮＡ今更たどり何とする
貧乏なころの暮らしをなつかしむ

鳥取市　倉益一瑤

人が好きいつでもドアは開けたまま
子守唄渇いた脳に聴かせよう
七転びした跡がある父の背な
荒波を潜ってとてもいい顔に
少年の激しさ脱皮中だろう

鳥取市　鈴木一弘

低姿勢一歩下がって三歩前
石の上十年かけて句を刻み
原爆の平和利用は原発で
不整脈傘寿のつかれ噛みしめる
歯の治療すくない夢を噛むために

鳥取市　谷口回春子

カチンコチンと妻の説教音がする
古傷が語る想い出セピア色
ゆらりゆらりと平和遠のく風が吹く
老眼をかけても見えぬ妻の愛
雨上がり借りた軒下そっと出る

鳥取市　永原昌鼓

手抜きして現役主婦と言い兼ねる
汚染水飲んだか鯉の背も曲がり
現役の主婦でチラシとにらめっこ
米寿への坂道助走欠かさずに
三回忌遺品の整理まだ出来ぬ

鳥取市　中村金祥

この身体幸せ太りかも知れぬ
マドンナの孫の自慢に興ざめた
知恵比べ貧乏神としています
花も実も根っこの力自慢する
まぜくった後で後悔するでない

鳥取市　夏目一粋

放たれた子犬いきなり逃避行
腕時計忘れ腹時計で過ごす
心配の種を持ち込む一通話
五輪まで達者で回れ夫婦独楽
平和には賞味期限を付けないで

鳥取市　西川和子

御神輿と祭囃子と人波と
賑いの中で向うの岸に辿り着く
手を借りてやっと一歩が前に出る
地味に生きまだ大海を知らぬまま
八十年踊り続けてまだ未熟

鳥取市　春木圭一郎

忘れまい支えてくれる人たちを
失敗を大きな声で笑えるか
ふところが深く決して偉ぶらぬ
好奇心分からないこと聞く度量
人の話を素直にいつも受け取める

鳥取市　平尾菜美

挨拶の手前苦い茶飲んで置く
勝敗を読んでる旗が翻る
センサーのタッチ火花がまたたかぬ
晩学のやる気ちらちら熱を出す
涼しさが身に染む秋の寺まいり

鳥取市　前田楓花

人混みで描いた地図がたためない
よろしくと軽くでかける休みの日
もめごとはジョークで済ませアホになる
コントロール出来ない風が吹いてくる
お風呂なら泣き笑いしていいのです

鳥取市　森山盛桜

フライングしそう待ち遠しい明日
うるう秒くらいは愛がずれて行く
そば啜る音立食いは皆無口
何という白旗元気よく上がる
真円になって面白味が消えた

鳥取市　山下凱柳

ドキドキし川柳塔のページ繰る
作り事に本音半々五七五
真正面から議論をしてよ安保法
閉会をしてから本音まくし立て
老いた脳虫干しにして喝入れる

後期高齢でも傷はすぐ治る
また一つ歳とったズボンは伸びた
移り香にゆらりゆらりと遠廻り
慰めか共鳴かどっちで寝たの
盛り込んだ母の宅配歪なり

鳥取市　吉田孔美子

いつか来るその時が今試練です
歩の私寄り添う夫へ只感謝
あと何年牛を描きたい年賀状
野の花の幸せ床の間におわす
意味もなく気の合う仲間すぐ集う

鳥取市　吉田弘子

奥の手はとうに期限が切れていた
星が降る夜はふたりの星まつり
奥座敷 一見さんはお断わり
ドラマより今の私が面白い
逃げ道に仮面がひとつ落ちていた

鳥取市　両川無限

東京五輪老害ボスで滞る
老人ホーム終の棲処が命取り
防犯カメラ今日は私が写ってる
飲料パックエコの御礼が書いてある
真子さまが帰国逆襲はじまるか

倉吉市　猪川由美子

あさが来たボリューム上げて耳すます
生きる道悠ゆう学ぶ川柳塔
わたくしを捨てられなくて美容院
夏の服仕舞ってよいか気象庁
この歳になったら皆んなこんなもん

倉吉市　山中康子

淋しさがゆらりしずかにやって来た
ハンバーグ回転寿しの新メニュー
病院は待つのが仕事やっと知る
コンビニに負けておばさん店閉める
我慢せず途中退場クラシック

米子市　後藤宏之

ギブアップで手にした平和放さない
消えた虹意地で再び掴み取る
君のことば胸に灯火つけてくれ
どこへ行く若者たちの長い足
釣り自慢山ほど背負い魚来る

米子市　後藤美恵子

曲折と挫折に一味唐辛子
歩調とれ前へ進めと号令が
奴から湯豆腐になり僕の秋
常備薬一升瓶に詰めてある
控え目にした翌日は元をとる

米子市　竹村紀の治

米子市　中原章子

涼しさに余生が少し間延びする
節節が気温低下を察知する
過信してこけてはじめて思い知る
健診に合わせ体調整える
新米に水控え目と書き添える

米子市　成田雨奇

前立腺肥大の次で待つ不運
晩酌二合肝臓検査すると医師
城山に上った記憶抱いている
星見ればなんと小さい人間界
ゴミ箱を逆さに振ってあきらめる

米子市　吉田陽子

エコバッグ一人さげてるレジの列
張りあっている妹思い姉思い
半分こ引き分け板についてきた
事故処理もマニュアル通り畳まれる
時々は詫び状になる日記帳

鳥取県　石谷美恵子

息災に感謝敬老会の帰途
歳相応のおしゃれで弾む敬老会
台風の夜語り明かした三姉妹
言い過ぎて悔やんでいますお月さま
そっと抱いて下さい私骨そしょう症

鳥取県　岩崎和子

秋冷に猫の温みにいやされる
ふんわりの枕八十路の町祝い
今夜また祝い枕で夢を見る
庭の草もっさり生えて秋となる
灯油缶並ぶと秋も深くなる

鳥取県　斉尾くにこ

宝だが近所の愛が息苦し
ものたりなさが少し残った二人きり
指先までも美しい佳子さまの手話
燃えていた気持ちが徐々に薄茶いろ
ウインクをしている満月の夜空

鳥取県　竹信照彦

秋日和一人畑で草を引く
蒔いた種やはり応えて出る双葉
菜園は趣味野菜作りが楽し
赤字でも作る菜園だけは無事
少子化対策お国のためという

鳥取県　鳥越鬼一

秋日和柿栗秋刀魚君も好き
榎の実かじれば苦し少年の日
オーイと言えばハーイと応える頼もしさ
頂いた新米もったいないがすぐ食べる
気障りなニュースあふれるメディアです

夕焼けに心も染まり温かい
メンバーに好敵手いて励まれる
外面は自分色横に置いておく
仏壇から温かい風が吹いてくる
平凡な手相平凡で仕合わせ

鳥取県　西谷悦子

諦らめるいや夕焼けにまだ未練
思考する老いと若さの日暮れどき
終活の記事が目につく老い二人
釣銭を追求しない領収書
ＣＤの軍歌売れずに僕が買う

鳥取県　松川行男

趣味をもつ今からだって遅くない
その話今聞いたのに出てこない
誕生日忘れていても歳をとる
前向きに暮して悔のない私
咲くときはみんな自分の色で咲く

鳥取県　山下節子

交差点人が流れる用を持つ
引退で白地ばかりのカレンダー
太鼓橋覗いた水面顔が笑み
きみの側手を持ち座るそれだけよ
外来日褒めてもらった自己管理

松江市　小川注湖

日の入りが早くて影が短かくて
実りの秋に重すぎる雨が降る
コンビニが奪う昭和のなんでも屋
やっと今歩幅が合ってここに居る
夕茜明日はきっと飛び立とう

松江市　藤井寿代

スマホから見上げてごらん風は秋
胡瓜もみ姑から継いだ甘酢味
旧友に会える楽しみ秋祭り
里は秋ゆらり祭りの旗揺れて
絶版の古書を見つけたネット上

松江市　松本知恵子

引っぱらないで私真面目に生きてるの
泣きごとは言わぬつもりが惚けたかな
赤信号だらけの体へっちゃらさ
川柳の仲間と分かる人間味
税金上がるが川柳は止めぬ

松江市　松本文子

神在す出雲駅伝晴れわたる
栗ご飯遺影と秋の香にひたる
許されてストンと落ちた蟠り
芽を伸ばす母の得意な褒め言葉
金棒が重たい鬼に茶を淹れる

出雲市　伊藤玲子

柿の木が裸になって見える空
美しい花の名前を二度も聞く
闘病の友に小さな傘になる
生きている証句帳がふえてくる
人の死を数えた指に秋が来る

出雲市　岸　桂子

ひとりではおしい名月孫をよぶ
秋の天詩人が集う花の街
間伐材芸術となり山おりる
米袋愛し大きなにぎりめし
罪ひとつ詫びるわたしの白い数珠

出雲市　小白金　房子

ギャップ無く今日も明日も陽が昇る
へそくりの諭吉も揺れる五割引
目も耳も歯も古くなるハート燃え
凧あげに心も空に舞いあがる
楽しみの後の財布は軽くなる

出雲市　多久和　敬子

ときどきは痛む昭和の古い傷
余生今私に潜む好奇心
グローバルそんなニュースも見せる過疎
良い人と言われたままで消えた人
暗黙の了解もあり良い仲間

出雲市　竹　治　ちかし

老後破産人権尊重どの辺り
まだ生きる米寿の空をにらんでる
低気圧おやじの脳ににているぞ
芯も実も着けず胴ばかりのびている
茶どころの出雲のおちゃで古式生き

出雲市　富田　蘭水

伝説と神話で作る町おこし
町おこし伝説の地にひとり住む
清流に神話伝説信じない
高齢者限界集落知恵はなし
現代の落武者だろうホームレス

雲南市　松本　昌

政治家を稼業にしては困ります
病んでふと母の記憶がよみがえり
よくしゃべる妻に戻ってほっとする
物忘れ思い出すのが遅いだけ
もう少しゆっくり生きてみようかな

広島市　岸本　清

おかわりっ夕餉和ます孫と居る
迷惑をかけていいよね子に孫に
お隣も一緒に老いて来た仲間
赤トンボ秋の終りを賑やかす
マイナンバー周知の前の特殊詐欺

竹原市　石原　淑子

メガネ生活見えすぎても困る
間引き菜の旨さよ夫よありがとう
すってんころり若くないよと娘に言われ
山には山の思いがあって風が凪ぐ
四季めぐる待合室の片隅に

竹原市　岩本笑子

青い空子等の歓声吸い込んだ
キノコ豊作一度はお目にかかりたい
音信不通風の便りを待っている
許したり許されたりで秋深む
筋書きは解って見入る里神楽

府中市　藤岡ヒデコ

終活へ考えましょう遺句遺影
痛み止めなんか効かない胸の傷
継続が力になっていない僕
妻傘寿あと十年は居て欲しい
外遊でまたない袖を振る総理

宇部市　平田実男

嫁姑程よく孫の座る位置
廃校にペンペン草が生い茂る
思い出に魔法がかかり虹の彩
紙の舟スマホの波が押し寄せる
老夫婦たまにさざ波立つ暮し

東かがわ市　川﨑ひかり

生き上手尻尾上手に振っている
ロボットさん優しく介護しておくれ
開運のお守り持っていたけれど
枯葉舞うふと人生を重ね見る
ジャンボくじ当ててにんまりしてみたい

松山市　古手川光

戦中派何で賛成出来ますか
一人芝居は核反対と言ってきた
政治家の器量は媚を売りすぎる
私のリズム四分の四拍子
取り敢えず磨いていますお仏壇

大洲市　中居善信

怖いものなしの戦士が高所恐怖症
ストレス発散友と気楽な旅に出て
友の腕借り国宝の松江城
天守から見る宍道湖の秋景色
回復の証しステッキ置き忘れ

西予市　黒田茂代

風呂敷に包んで秋が届く幸
秋霖がぞくっと冬を連れてくる
窓際のポスト寡黙な生き字引
ひとつずつ川に流してきた痛み
天辺の風に聞きたい事がある

高知市　小川てるみ

唐津市　坂本蜂朗

新米と秋刀魚に理性奪われる
子供らと妻はスクラム敵わない
腹の中発酵してる自己嫌悪
傷跡に包帯すればまた目立つ
忘れんとすれば煮詰り出す恨み

唐津市　山口高明

来賓は時間励行成さらない
年金じゃ介護施設もはいれない
病床の妻の笑顔よ七分粥
貌見れば虐めて見たく成る男
流行のようにコンビニ襲われる

熊本県　岩切康子

連休は近場の散歩曼珠沙華
倦怠期一つ退いたら丸くなる
レストラン別なメニューの夫婦仲
店屋物主婦の味方よ有難い
仕業鈍る神経笑うことなかれ

沖縄県　森山文切

回り道知らぬ近道なお知らぬ
手抜きする度ずり落ちてくる眼鏡
湿り気があるのがちょうどいい笑顔
ベテランのポットゆるりとお湯を吐く
緊張を教えてくれる噛み吃り

札幌市　小沢淳

五輪まで元気でいれる目途を立て
一族をガン肺病がもて遊ぶ
個性派を束ねるために酒がいる
安保法民の答えは来年と
実行支配されて黙っていられるか

弘前市　浅田隆樹

言い訳は気象予報士上手いです
閑静な住宅犬がよく吠える
ウェルカムいつも不在の玄関に
タメ口も耳に可笑しい孫ならば
雪国に何日あるのだろう秋

弘前市　稲見則彦

雨の日はせめて積んでる本を手に
南天の赤が誘った迷い道
ゴーグルは台所でも必需品
砂時計酷暑かえせば猛吹雪
さてここは日本国かと観光地

弘前市　岡本花匠

スーパームーン玄孫誕生愛燦燦
弘前城曳屋体験人気呼び
彼岸花赤い気炎の活貰い
実生柿こどもら採ってわらべ歌
野の花と親しく話す万歩計

弘前市　今　愁女

テロは怖いが自然災害まだ怖い
数という武器を集めて政
再稼働経済界の熾(おこ)りかも
マイナンバータンス預金に切り替える
ねぶた笛去った後から秋忍び

弘前市　須郷井蛙

深夜国会体力凄いなと思う
子供から花丸もらうチラシずし
女子会で女ストレス置いてくる
毎日の元気をもらう孫ヤンチャ
ノロノロの散歩は犬に叱られる

弘前市　髙瀬霜石

新幹線なみです老いてゆく速度
寝返りを打って悪魔を退治する
黒光りしてきましたよぼくの数珠
たっぷりのお経お布施が多すぎる
四次元の世界あの世のことだろう

弘前市　髙橋洋子

ロボットに地震の予知も期待する
専業主婦言うほどプロではありませぬ
雑穀米戦後を忘れて今美食
介護パンツ亡母の残りを取って置く
血縁が途絶えて故郷(さと)の味気無さ

青森県　松山芳生

なんの願いもない絵馬に影がない
一人居を支える応援歌が疼く
どの星を明日の住処にしようかな
残り時間を日割り計算して生きる
骨拾う涙はお別れのかたち

さいたま市　星野育子

残念な野球賭博とミスジャッジ
味方か敵か人工知能家電
振りかざす正義がネットを横行
権限は主張で責任は外方
戦争を知らない子等よどうなるか

東京都　川本真理子

柿一つ置き　テーブルに風が吹く
オシャレだな風色のコート着ている
ミニカーを集めた少女大人へと
みんなある　泣きながら歩くような日
青い鳥まだその辺にいるでしょう

東京都　まえで　とよこ

秋風へもういちど咲く金魚草
けさの潮はるかなチリの津波かな
さようなら　ぬくもりのこる孫のハグ
有刺鉄線やっとひらいたすきまあり
抱かれて国境こえる赤ん坊

横浜市　小野　句多留

廃棄されネットが拾うエンプレス
古民家にセールをさせる村興し
マイナンバー食わず嫌いを決めておく
常備薬がんじがらめの余命表
総合病院紹介状の回り道

横浜市　菊地　政勝

パスポート手にした妻が蝶になる
決断へ妻の助言を待っている
迷い児に百面相が忙しい
御近所が今日も元気という雨戸
お見舞の梯子元気を置いてくる

富山市　島　ひかる

北陸に旨い物あり十二月
集合時間十分前でビリになる
ハザードマップ一人住いも印される
御嶽山姿を変えて人を呼ぶ
高千穂の旅で神話にのめり込む

可児市　板山　まみ子

秋冷に少しはオシャレする気分
腕よりも天気のせいにされる菊
そのうちは実現しないものとする
整頓の下手な二人でさがし物
イケメンと噂のゴリラ思案顔

犬山市　金子　美千代

長所とも思う短所に目をつぶり
それなりに努力してますピンコロリ
長生きが怖いと思わせる政治
全幅の信頼置いているたまご
徘徊の子らに門限死語なのか

犬山市　関本　かつ子

新米も今年限りと里の声
痩せるのにお金をかけている平和
謙虚さがにじむノーベル賞の弁
咲かせるかしぼむか古希の分岐点
赤ちゃんのバッタをちりとりで運び

愛知県　早川　遡行

今からでも遅くはないスクワット
分別でまた叱られたゴミ袋
最善を尽くしてもあるミステイク
懐かしい歌へ涙が止まらない
捨てられた儘築百年の民家

小島蘭幸川柳句集『再　会 II』
頒価　千円（送料共）
ご希望の方は川柳塔事務所
TEL 06－6779－3490まで

川柳塔の川柳讃歌 ㉜

木津川　計

埋められぬ溝を見つめて嫁姑

大　島　ともこ

天野忠さんの詩「首吊り」をウロ覚えで書く。「うちの嫁があれしてもろてはいきまへん／これしてもろてもあきまへん言わはりまっさかい／そんなイケズばっかり言うならわて首くくって死ぬかもしれへんえと言うたら／へえそうどすか。そんならそうおしやしたらよろしおすがな…」。その夜、ほんまに首吊ってる夢を見る「埋められぬ溝」を挟む嫁姑の詩だった。右の句がともこさんだとしたら僕は辛い。なべて息子の結婚は祈るばかり。

シニアの部礼儀正しく負けて来た

富　田　保　子

右の天野さんの詩の嫁姑は口論に及んでいる。誰が聞いても無教養で賢くない嫁だ。そんなバカと口論しても非常識も暴論も自覚できない相手だから疲れるだけ。無駄な口論を「非学者論に負けず」という。狂言「宗論」でアドが「ありもせぬ物をあると思うて喰ふは、むざい餓鬼ではないか」シテ「非学者論に負けずと云ふはおぬしが事じゃ」と呆れる。だからともこさん、保子さんに倣い「礼儀正しく負け」、礼儀知らずにアッと言わせたら。

行き先を聞かれ婚活だと応え

加　島　由　一

一番短い挨拶は津軽弁の「どさ?」「ゆさ」である。「どこへ行く?」「風呂に行く」意だ。普通「どこ行きまんねん?」と聞かれて「ちょっとそこまで」のやりとりだが、「婚活でんねん」と言われると「ええー!?」となろう。しかし、何がおかしかろう。シニアの就活があれば婚活もあっていいではないか。「古稀には古稀の燃ゆるものありルージュ引く」と詠んだ女人もいるのだ。

由一さん、女人や若者に負けてたまるか。

お迎えは傘ではなくて乗用車

池　澤　大　鯰

昔の懐しい風景である。北原白秋の「アメフリ」を読む。「アメアメ　フレフレ、カアサン　ガ　ジャノメ　デ　オムカイ　ウレシイナ。ピッチピッチ　チャップチャップ　ランランラン」、大正十四年の作詞だった。既に蛇の目は姿を消し、乗用車が現れる、のはこの場面だけではない。「駅前のスポーツジムに通う人　車で来てランニングす」（小島敦）と朝日歌壇（15・11・8）で詠まれた。文明は情を失わせ、体力まで衰えさせる。

引き際がよかったからと拍手され

肥　山　一　文

拍手は起らぬが、引き際だろうと納得されたのが私どもの季刊『上方芸能』だ。来年五月に出す二〇〇号で終刊すると各紙が一斉に伝えて、ええーっ!?という反響になった。その号で創刊以来四十八年。三十三歳だった私は八十歳になった。新しいものへの興味を覚えなくなったら現代はもはや語り得ない。

やるだけのことをやりおおしたのは一文さんでもあったろう。拍手されてよかったなあ。

平均寿命超えて合格した気分

丹後屋　肇

あらゆる健康長寿法は四十代五十代のためにあると思うようになったのも私が平均寿命に届いたからだ。男ならなんとか八十歳まで生きたい思いが健康長寿の術を生み出したのではないか。だから「合格した気分」と肇さんには思える。おめでとう。

で私は、ここまで来られたらあとはおまけ。今さら塩分控え目、酒も少々などと思わず、好きなようにが私の流儀だが、さて肇さんは。

（『上方芸能』発行人）

自選集

三兄弟　塔のかたちになって笑む
東京日帰り妻が勿体無いと言う
カラオケでびっくりさせてやりますか
おふくろから電話　元気になりました
多忙でも痩せぬ絶好調でも痩せぬ

小島蘭幸

人間を丸出しして太い筆
スーパーで柿は柿色主張する
豊作の汗をいたわる子の版画
握手するV監督の手が厚い
八十の絵皿水色ばかり溶く

斉藤劦

素のままで失礼します無精髭
梨や栗アケビもくれる飲み仲間
パワフルに生きて迷惑かけている
ライバルがハードルを上げほくそ笑む
心技体合わずに脚立から落ちる

新家完司

届けたい人がいるので栗御飯
痛い腹えぐり出しそなマイナンバー
三ヶ日逃避予約の老姉妹
60年通った顧客逝った秋
後期高齢オロオロさせる電子音

津守柳伸

百姓の何を置いても今日の汗
ばあちゃんの郷土食から波に乗り
三球三振先ずは無難に波に乗り
元気なが何より大正のクラス会
これぞ旅どじょうすくいに迎えられ

遠山可住

ベランダにつるべ落とした闇がくる
秋の香をふわりしのばせ袖だたみ
まだ使いこなせぬ夫のさしすせそ
すぐ眠る習性雑念も眠らせる
送り仮名気分次第でつけ替える

都倉求芽

合掌をすると何も怖くない
乱世を見送っている曼珠沙華
何となく無駄がたのしい日本晴れ
人並みに大根の種蒔いておく
珈琲にミルクが溶ける春隣

土橋螢

スランプにひもといてみる武玉川
ときどきは死んだふりする処世術
鳩尾のもやもや言わぬ方が華
息上がる日もたまにある喜寿の坂
終りなき戦いわたし対私

西出楓楽

スキャンダルももちろんニュースよく見ます
ローカルのニュースに彼と彼が出た
ニュースには味を読み手がつけるもの
本年の十大ニュースへ私の眼
山盛りのニュース歴史という鏡

仁部四郎

定年後二十数年あっと過ぎ
外国人に囲まれ映える天主閣
背筋ぐらいしゃんと伸ばせと影法師
老いて今未知の世界を楽しまん
数え切れぬ人の情けに生かされる

前たもつ

意外にも人の心を吸う和紙よ
家出るとせかせか歩く人になる
老いの道厳しく進む時刻表
両の手を合わせる仏との時間
ひとりずつ出てゆき本家なくなった

政岡日枝子

私を叱る主治医が頼もしい
お変りはございませんか処方箋
またも血を見たかさぶたを剥いで
狂い咲きとは花に失礼ではないか
標的にされてた頃が華だった

三宅保州

一本の苗から王者のなる森へ
節電と節水をして今日暮れる
守るためそれともかくすため無口
世の中は広くて狭いまく噂
水百選ぽとりぽとりという見せ場

宮西弥生

杖を使えば辿れるほどの下り坂
迷う辻にはちちははの焚火跡
舟で渡ればどうにか漕げるほどの波
頼りない舵もみちびく澪標
うっすらだけど小道になった足のあと

小道

八木千代

エンドレスだろう汚職と談合よ
破調句のような生き様しかできぬ
解凍のマグロ故郷の海を恋い
復興へけじめを付ける春よ来い
放射能にゆれても故郷稲が熟れ

両川洋々

太陽の近くで秋刀魚焼いている
サンマ不漁メダカ心配しているぜ
オリンピック済めばぼちぼち遺書をかく
十二月八日じゃが芋食べました
十二月征ってくるぞと勇ましく

板尾岳人

親のうっかり子供しっかり見つめてる
大事大事としまい忘れる悪いくせ
やさしさに弱い涙をもてあます
満開の梅もかなしみ抱いている
時々は自分にも言うありがとう

奥田みつ子

例えばの話が上手い喉仏
嬉しいね一たす一が二になった
ページ繰るごとに主役が入れ替わる
なんでそうなるのか僕もわからない
アイラブユーなんて男の嘘ですよ

川上大輪

アヴェマリア歌うと何故か気が晴れる
冬木立油断するなと言いたそう
潮騒へ別れた人の訃報聞く
開戦の記念日あの日若かった
いい年であったと告げる除夜の鐘

小西雄々

第四回 卑弥呼の里誌上川柳大会

兼題と選者（各題２句）

「潮」	森中 惠美子 選
「残」	大西 泰世 選
「間」	木本 朱夏 選
「起」	樋口 由紀子 選
「耳」	赤松 ますみ 選

投句用紙 専用用紙(コピー可)またはA4大用紙
参加費 1,000円（切手不可）発表誌呈
締　切 **平成28年1月15日(金)消印有効**
投句先 〒842-0103
佐賀県神埼郡吉野ケ里町大曲2426-2
卑弥呼の里川柳会　真島久美子
TEL・FAX 0952-52-1061
賞 各題特選１句・有田焼　一万円相当
各題佳作５句・有田焼　五千円相当
（その他サプライズ賞あり）
※ 男女を問わずたくさんのご参加をお待ちしています

第36回 ときせん賞作品募集

作　品 雑詠２句（未発表作品）
選　者 大野　風柳　森中惠美子
小島　蘭幸　徳永　政二
平山　繁夫
応募締切 **1月31日（日）当日消印有効**
選句方法 無記名清記の上、選句。１句毎にその合計点（平抜２点、五客３点、三才４点）で順位を決めます。
発表賞 時の川柳誌　４月号誌上
ときせん賞１名・準ときせん賞２名
佳作７名
応募方法 便箋大用紙に作品　２句
郵便番号・住所・氏名・電話番号及び所属柳社を明記してください
応募料 １０００円（定額小為替）切手はご遠慮ください
応募先 〒675-0019 兵庫県加古川市野口町水足1160
岡田　篤 宛
時の川柳社

第34回 鳥取県没句川柳供養大会

と　き　**12月20日（日）** 午前10時開場・受付
ところ　新日本海新聞本社ビル 5階大ホール
JR鳥取駅南（駅裏）徒歩３分
会　費　２０００円（昼食・作品集呈）
精進落し　３０００円（懇親会希望者）
兼　題　「敗者復活吟」　小島　蘭幸　選
（この一年間で没になった句から２句吐）
「火のページ」　池上　英之　選
「胸キュン」　長島　敏子　選
「浄　　土」　目賀　和子　選
「渋　　々」　藤原　鬼桜　選
「罪　一　つ」　坂本とも湖　選
「棘（トゲ）」　河原　清流　選
「色　　々」　秋里千枝子　選
席題なし　各題とも２句吐
投句締切　**11時半厳守**
欠席投句　１０００円（切手可・作品集呈・11月末日締切）
投句先　〒689-0202　鳥取市美萩野2-171-3
中村　金祥　宛
電話　0857-59-1056
主　催　**川柳ふうもん吟社**

第６回 高田寄生木賞

選　者
樋口由紀子（兵庫県）　木本　朱夏（和歌山県）
渡辺　隆夫（神奈川県）　梅崎　流青（福岡県）
野沢　省悟（青森県）
作　品　２句　2015年に作句されたもの
「B5判用紙使用」（既発表・未発表問いません。時事・雑詠・題詠・印象吟・サラ川等、また他の賞を受賞作品でも可）
※ 投句されました作品は氏名入りで、全句発表誌に掲載します
会　費　１０００円（発表誌込み）
（現金または郵便振替「川柳触光舎」02240－8－82005）
締　切　**2016年1月31日**
投句先　〒038-0004　青森市富田2丁目7-43
野沢方　川柳触光舎
大　賞　１名　川上三太郎句集『孤独地蔵』
（昭和38年４月15日刊、500部限定の三太郎最後の句集。革張りで重厚な装丁）
特選賞（各選者特選）　**秀句賞**（各選者秀句）
発　表　「触光」47号（2016年６月）

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

ボーナスを他人が貰う十二月
父の齢こえて寂しい春の酒
西成の飲み屋ででかい話なり
鬼遊忌のことなど妻と話し合う
群衆の一人一人はお人好し
戦争の好きな奴らを敵にする
ヒロシマの天ふかくする赤とんぼ
弟よ「戦争展」でまだ会えぬ
クニマモルナンジシンミンタマニナレ
路郎忌を待つ一人なり師を識らず
妻とふたり今日あるいのち花の下
鬼の目をさます八月十五日
めぐりきて夏なおくらき原爆忌
啄木のように手を見る暇もなし
八月の仏に水を忘れるな
掃除機のように切符を吸いとられ
年金で軽いいのちを温める

川上大輪選

畦道に淋しがり屋の曼殊沙華
泣き真似もお世辞笑いも超得意
噛み合せ緩くて意地が零れ出す
マヨネーズ入れて目先を変えてみる
ややこしい話にかけるトロロ汁
あと二分待てば黄門様が来る

大阪市　平井　美智子

飛ぶ夢は見ない明日の米を研ぐ
この人と居ると呼吸が楽になる
恋をする力お月様きれい
失敗談聞いて益々好きになる
道徳に目を瞑りたい好奇心
青空へ手を差し入れて柿を捥ぐ

大阪市　田中　ゆみ子

しつけ糸ほどいてからの風の色
抽斗の中に許せぬ過去がある
漂白をされて素顔にもどる秋

瀬戸内市　東　槇　ますみ

妻の顔消してウフフと魔女になる
僕の背もライバルの背もまるくなる
4Bで夢中になれる明日を追う

大阪市　髙杉　力

来る方を向いてみんなでバスを待ち
誘惑を振り切り家で缶ビール
機械より手焼きが美味いと限らない
受けるまで止めないつもりオヤジギャグ
タクシーで話しかけたが命取り
ゴルフとはどうも飛距離じゃないらしい

篠山市　佐々木　勇

軽妙な笛とはやしは秋の色
私より真面目なんです洗濯機
コンチキチン笑顔は秋の風物詩
老夫婦互いに寄ってくる会話
新聞が私の命遠い耳
戦などしないと誓い七十年

ひと言を控え同居の輪に和む
新品の靴よりなれた軽い靴
今できることを重ねて描く夢
子育ての夢中な頃が花でした
清貧の財布もゆるむ義捐金
赤信号なんどかあった泣き笑い

岡山市　伊藤寿子

淋しくて奇数になってしまいそう
細胞は分裂自由過ぎる明日
放置しているメールから静電気
どう選ぶイミテーションの言葉達
失敗をまだ繰り返す途中です
ラッキーを一つ素直に受け入れる

佐賀県　真島久美子

山もみじまだ見ぬ夢を揺り起こす
兄の樹がすべての枝を地に落とす
意味不明頷きながら考える
訂正印まだまだ挑む最後尾
控え目を通せば気楽陽は西に
そろそろと思うこれからとも思う

岡山市　藤成操江

茹で加減未だ知らない鉄の鍋
節々の痛みに溜まる放射能
音程のズレてる妻の鳩ポッポ

弘前市　吉川ひとし

幸せの種が発芽の前離婚
泡沫の恋が溢れている施設
夜泣きする蝶々の癖を見抜けない

瀬戸内市　宮宅比佐恵

写経して命のリズムととのえる
老いてなお消えぬ昭和の荷を背負う
朱をたして自画像少し温める
ブランコを上手に漕いできれいごと
面影を抱いて寂しい祭り酒
追い風は要らぬ私は下り坂

倉吉市　中村毅

ヒガンバナ君はほんとに律義者
笑い皺増やしてみんな寄席を出る
お好きにと言われてやる気萎えてくる
肩書きはないがプライド少し持ち
一億の中に私も入るのか
聞き上手に腹の底まで洗われる

横浜市　川島良子

スケジュール埋めて悲鳴を上げている
丸顔と面長　息は合っている
妥協点みつけて今日も生きている
クッションの役割らしい現在地
世の流れマイナンバーが走り出す
笑顔から涙へ孫の運動会

一筋の風秋を知る老いの肌
柿ぶどう　とうとう種が無くなった
何も遺せないよと子に孫に言う
近くでも良かった温泉にひたる
平成の子が伝説を知りたがり

京都市　櫻崎篤子

今年の夏頑張ったんだ柿みかん
父ちゃんの植えたおいもだ大きいぞ
結びの神たった二つのおむすびよ
二人三脚結び心地はグーだった
夫とは身振り手振りで用が足る

大阪市　柴本ばっは

思い出と遊ぶ我が家は万華鏡
美意識が迷う前頭葉の鬱
むなしい日ライバル意識だけ残り
行く行かぬコインで決める怠惰な日
雑草のごとくはびこる委員会

大阪府　神野千恵子

二重跳び出来たと曾孫ドヤ顔で
ふる里はただ風が吹く生家跡
強がりなコスモス雨に顔を上げ
たわむれでよいと造花は蝶を待つ
倖せの温度差知ってからうつろ

大阪市　横山里子

魂をさらけ出してるゴミ置き場
修飾語剥がせば見えて来る誠
ほいほいとおだてに乗ってしまう歳
自慢する仕方に見えるお人柄
平凡な幸せ望む朝のパン

池田市　上山堅坊

NOと言う勇気も無くて回り道
あの方もやっぱりなったお婆さん
捜し物している内に又ご飯
少しずつ私の命洩れだした
人生超特急もう戻れない

河内長野市　穂口正子

返すあてあればあなたに借りません
ガンコ親父も母の前では借りた猫
能登めぐり妻の化粧は輪島ぬり
女房に野性がもどる特売日
押し売りに妻の元気が前に出る

寝屋川市　岡本勲

自覚せぬままに出ている自分色
喜びに悲しみに飲む酒の色
防災訓練ちらちら笑顔もれている
天災から見れば人智はまだ赤子
人民の嫌う戦を国がする

高槻市　鳥居宏

大地震噴火大雨次はなに
美容剤あのモデルだけ効くみたい
景色より人を観に行く行楽日
孫よりもやっと優しくされだした
ただいまと妻の顔色うかがって

高槻市　三谷白黒

平穏をたしかめ合って受話器置く
敬老の日煩悩熱く語り合う
人間の抱える悪とにらめっこ
漱石がばあさんと呼ぶ五十代
煩悩の跡形もなしお骨上げ

豊中市　荒巻夢

海ほどに深くはないが愛してる
縺れたよ記憶の糸が辿れない
色眼鏡掛けてマスクの君は誰
やはり似る老いた自分に母を見る
ふと見れば剃り残してるヒゲ一本

豊中市　貝塚正子

葛城に唇ほどの陽が上る
温度計ばかり気になる暑い部屋
長生きをした勲章の笑い皺
体力が無くて細細土弄り
誕生日寝ずに待ってる娘のメール

富田林市　小出修三

渋滞のニュース横目に昼寝する
にっこりと笑顔ひとつで和む席
散歩前犬も一緒にストレッチ
若者の眉にくっきり固い意志
ポケットに秘密ひとつを忍ばせて

箕面市　大浦初音

ふるさとは今住んでいるここがいい
故郷も次々と減る知った顔
決心の鈍らぬうちが潮時か
凡人もかつぎ上げれば有頂天
したたか者と言われ鏡を見直した

堺市　羽田野洋介

奥座敷亡父の威厳がまだ残る
奥ゆかし文から見えるお人柄
白寿へとドラマチックな夢描く
菊花展一句頂くお茶の席
スーパームーン世界平和へ手を合わす

神戸市　玄番美恵子

抗った過去の私にほかし入れ
耳半分ふさいで聞いているニュース
外食後家でお茶漬食べ直す
お互いに倒れてしまう過多の礼
認知症進ませている愚痴批判

神戸市　冨永恭子

国民のNOはムンクの叫びです
受賞作ブームが去ってから読書
僕は牡羊座妻は射手座ギャフン
関白を辞して天下は妻の手に
球場に舞う風船の挫折感

神戸市　細川花門

墓参り拝んだ後の気持善さ
ゴキブリが出ると張り切る妻の腕
腹黒か序でに検査してほしい
異常なしその一言を待っていた
古稀過ぎて冒険心が細くなり

小野市　藤原泰宏

不思議ですあなたの前で泣けました
ためらっていました船にのることも
弁解はせずにしっかり私ほめてやる
ていねいに紡ぐ小さな物語
ゆっくりとおやすみ続きまたあした

三田市　上田ひとみ

古稀越えりゃよっこらせいで一休み
休日は風に吹かれて舞ってみる
秋晴れだ休みにしたい月曜日
九条も歯止めにならぬ時が来た
反抗期イヤしか言わんうちの孫

三田市　九村義徳

乱獲で痩せて小さくなるサンマ
墓を建て住職居ない寺となり
大皿に残る一切れ視線合い
イケメンとイクメンゴリラ人気呼び
方言が旅の心を和ませる

三田市　多田雅尚

通院が仕事となった古希歩く
剪定は夫の仕事と思ってた
ジンクスを信じる癖がまたでてる
夏菜園自信がついて冬野菜
食の秋旬に誘われたいこ腹

三田市　辻開子

老人ホーム明日の自分を思い知る
平和ボケ覚ましてくれるあれやこれ
思うようにならないものと世を拗ねる
スーパームーン得した顔で眺めてる
認知症他人事ではないのです

宝塚市　太田としお

コスモスに白いブラウス風になる
秋くさを引いて語らう遠い日々
忘却の彼方に思うひとがあり
父の背の厳しさにある温か味
甘辛の味をかみしめ生きている

和歌山市　北原昭枝

和歌山市　平田元三

読点の御蔭で軽い一休み
一文字に衆目集め走る筆
芝刈って庭の手入れの取りとする
パト多忙昼はスピード夜は飲酒
脇役の人気で取った主役の座

紀の川市　山東日出男

気楽そうに見えて犬にもある悩み
年齢を重ね頑固になって行く
灼熱の砂漠にも命の鼓動
婆ちゃんの口は大へん便利です
おばちゃんの証しくっきり輪ゴムあと

田辺市　大峠可動

雑踏と流れて素顔が溶けてゆく
脳天も五臓も荷物また背負う
見解の相違で凡夫無に返る
潮満ちて引いて人生七彩に
晩秋の脳天で苦悶がまだ消えず

鳥取市　大前安子

独り見る水平線はなお遠く
あんな坂こんな坂越え話題増す
ありあまる星の一つと会話する
ヤッホーのひびきは澄んで帰って来
赤い靴破れるほどに散歩する

鳥取市　田中天翔

今もってりんごの気持ち分からない
笑うつぼ違う夫婦で五十年
溝埋める努力してますまだ夫婦
百歳まで背筋伸ばして歩みたい
大丈夫まだ誕生日言えてます

倉吉市　岡崎美知江

迷彩服見れば背中が寒くなる
家計簿がひやひや角が生えそうだ
人生は波乱万丈ロスだらけ
貯めすぎた愚痴大暴走あわて出す
目かくしの手のぬくもりはやさしすぎ

倉吉市　堀かずこ

生きていりゃいろいろあるが負けません
にっこりと笑顔が私若くする
生返事頭の中が留守になる
ひと言の心づかいが和ませる
秋風が散歩しようと背をおす

米子市　見山温子

うたた寝に猛暑恋しい肌寒さ
異常気象野菜の高値気にかかる
雨が降るぼんやりテレビ見て過ごす
物価高老いの楽しみ消えていく
革茸飯匂いだけでも御裾分け

空元気だろうと前を見て歩く
竹割ったようなお人でウマが合い
明日会う話題鞄に詰めておく
誤解され易い返事をしてしまい
指切りが出来ぬ小指が淋しそう

松江市　武島千代枝

人生のうねりにまかせ生きて来た
子に残す雑木林が懐かしい
人生のうねりに任せよう余生
返り咲き庭のつつじが何語る
苗床の楽しみ老いの朝が来る

島根県　福間左余

行間からため息洩れる母の文
吉備団子ぐらいで子分などならぬ
アングルを変えれば私イイオンナ
石焼いてポッケに入れてくれた母
誤字ばかりカタカナばかりの母の文

岡山市　工藤千代子

胸の火を少し静める秋の風
井戸端もマイナンバーの風が吹く
間を置けば浮んだ言葉消えている
虎の子をでんぐり返しして探す
除虫剤を生まれ変れと言うて撒く

岡山県　田中恵

拗ねて甘えておんなはいつも縮れ麺
目薬をさしたの泣いてなんかない
パンチ穴あらぬ噂も綴り終え
こだわりは見えぬところに置いてある
出し惜しみすまい笑顔のありったけ

岡山市　永見心咲

かくれんぼするたび邪魔になるシッポ
ひと言で崩れる積み上げた小石
多数決にそっと擦り寄る妥協癖
言い訳のための布石を打っておく
強がりも使い果たした枯れすすき

三原市　鴨田昭紀

大丈夫よわたくしだってお婆さん
声と声忘れてません継ぐ糸
20年も昔でしたね遅い恋
やさしさへわたしの未来変えた君
川柳は続けなさいよ君の声

三次市　伊藤寿子

味気ない話に酒の助け船
さしせまる話に水を少しだけ
忘れてた話に辻褄が合わぬ
よろこんだ話に裏がついている
おしまいの話蛇足のおまけつき

広島県　日谷寛

宇部市　高山清子

アレソレコレで話通じる老い二人
ちっぽけな嘘が眠れぬ夜にする
賀状予約打診をされよ秋彼岸
切り札がポケットにある生返事
完璧な言葉に欲しい温かみ

山口市　中前幸子

人間模様描いて駅は眠らない
ふる里はあの日のままの静止画に
満ち足りた日の真ん中に薔薇一輪
曲がり角からふいにのっぺらぼうの風
ひょいと降り立つユトリロの街角で

山口市　増田めだか

正直な人であの人騙せない
一言の波紋人生狂いだす
本調子術後の散歩杖が友
妻の角何があったか長い夜
調子よく友を誉めてる下心

松山市　神野きっこ

お弁当母のレシピを真似てみる
人間を俯瞰しながら鳴くカラス
こうもりを真似て私もぶら下がる
子の自立感謝してます給料日
へそくりが平均額を下回る

今治市　渡邊伊津志

風向きが変わったらしい丸い声
薄れかけた記憶の中に持つ希望
泣く力笑いに代えて今日がある
涙目が笑い過ぎとはつゆ知らず
優しさという妙薬がある風がある

大洲市　花岡順子

どの道を行っても坂が多すぎる
磨いてもわたしちっとも光らない
残り物の花火で夏を締めくくる
我慢した分爆発がすごかった
新幹線は夢のまた夢バスがない

愛媛県　西田美恵子

これしきの利息に税が抜き取られ
テレビ見て泣く日笑う日腹立つ日
あんパンのような女でホッとする
結び目を直し直して老夫婦
川柳バカ愛車ナンバー五七五

福岡県　本田さくら

阿蘇噴火修学旅行ふとよぎる
わたくしの失敗笑う昼の月
道添の花々どれも誇らしげ
時間気にしない国へとちょっとだけ
タオル干す先にキョトンと青蛙

白鳥の初鳴き日本へご挨拶
日本へ遊びにシベリア寒気団
老いて見えたこと若くて見えたこと
木枯らしが遊ぶ空缶転がして
重いの布団いいえあの約束

登別市　小林碧水

二日酔い疼く証しは生きている
蒙古斑それはやっぱり片思い
笑顔みせ心の傷は皺の数
裏切った胸の奥からずきずきと
拾うひろう唯ひたすらに落リンゴ

弘前市　髙森一呑

出勤日ボクを仕事の貌にする
生きる智慧どの轍にも有りそうだ
あっさりと鬼になったりなられたり
子だくさん賢くなった母の指
生きじょうず揺れた辺りを保存する

男鹿市　伊藤のぶよし

クラス会毎回同じメンバーで
段々と近づいてくる子の背丈
いい時は続かないとはわかってる
酒やめて身体が軽くなったかも
ラッキーを呼びこむために掃除しよ

東京都　髙岡弥生

総理には聞こえなかったデモの声
ゆっくりでいいと何度も言い聞かせ
美人過ぎ隣の席は遠慮する
目印の看板消えた過疎の町
すき間から入った鬼が出て行かぬ

八王子市　川名洋子

大丈夫自分に言って聞かせてる
足早の世の中ついて行けません
忘れ物しそうで後ろ振り返る
つい口が夫の家事の邪魔をする
行く先は病院だけどおしゃれして

横浜市　巖田かず枝

家でなら舐めちゃう皿の団子たれ
いざとなるとパーッと金を使えない
国際結婚親も語学のお勉強
ノーベル賞内助の功も称えられ
内助不足だったか賞に遠くいる

横浜市　長島亜希子

支持率の低下気にせぬファンファーレ
破れ鍋に綴じ蓋という嵌り役
奥の手をいくつも持っている千手
ピカソ展妻が美人に見えてくる
寸銅を姿美人にする和服

豊橋市　藤田千休

冷や奴出番を譲る湯豆腐に
一人旅一期一会の隣の座
食膳で秋刀魚とおろしタッグ組む
ヨーイドンみんな一等徒競走

大阪市　磯島福貴子

ノーベル賞やさしいとり方教えます
和がらしの賞味期限を省みず
一生の汚れ目につき目が霞む
鋏立て蟹は何でも知っている

大阪市　梅里南天

ノーベル賞土の中から掘り当てた
人生をうすうす知った80歳
敗戦日今から見れば良き日なり
鬼二匹酒酌み交す紅葉山

大阪市　大治重信

祖母からの教え私の宝物
孫たちとととろと遊ぶ夢の中
古い帯懐かしさこめ再利用
好きな物さっさと買えぬ物価高

大阪市　田中廣子

カラオケで四時間粘る婆仲間
寄っといで仲良くしよう婆仲間
悩み事無い知恵絞り婆仲間
横のご主人優しい人は顔じゃない

大阪市　中島栄子

子の旅立ち我が人生も改まる
ばあちゃんの噂話で知る近所
秋風に心の傷が疼き出す
ノーベル賞暗い世相に灯をともす

大阪市　平賀国和

十五夜のビッグムーン秋に酔う
折り鶴で平和来るなら夜鍋して
年老いて生きる道まで細くなる
人生も組ひもの様にからんでる

大阪市　前川善之

観光を目玉にしたい地方都市
違憲です今でもさけぶあきらめぬ
ルーティンが流行りだすかな五郎丸
PKOいらんお世話にならないか

大阪市　松田聰

もう見栄は張っておれない杖だのみ
亡き夫の携帯だけが側にいる
ハルカスに登り思うは建設費
携帯の十一桁は覚えてる

大阪市　宮村満寿恵

老人会民謡ばかり大はやり
金品に心の自由しばられる
聞く時は立場に立つとよくわかる
その昔接待酒でふらふらに

大阪市　吉田知之

空気読み席を離れるうちのタマ
イケメン医師ドキドキさせる聴診器
秋風が猛暑だったを忘れさす
一万歩歩いた今日を癒す風呂

泉大津市　助川和美

観音の御手の一つはぼくのもの
オトーサンよう聞きやと教えられ
あれよりはおれがましだと老い具合
今日ひとひ何とか泣かずに生きました

交野市　田岡久幸

嘘ひとつつけない人で肩が凝る
ようように歩幅の合ってフルムーン
ゆっくりと庭で行楽老いの幸
行楽の地もニイハオで埋ってる

河内長野市　森田ひろこ

似てる人見つけておかし羅漢寺
薬待つ待合室に菊匂う
バスツアー見知らぬ人と縁が出来
恥かくよ大きい事を言ってたら

寝屋川市　大同美江

夫に辛く自分に甘い暮らしぶり
ローカル線旅を楽しむシニア割
商店のおまけ嬉しいジャンボくじ
じいちゃんは豆台風のおもり役

豊中市　荒木郁子

JOC出足つまずくおもてなし
信号にあと何秒と急かされる
寿司のネタ低い評価にタコ怒る
いいですなタレントギャラで旅に出る

豊中市　上出修

今年また虎は眠りに付いたよう
良い気候サンドイッチのようにある
感謝してそれでも叩くへらず口
人の世は壺の中かなゆっくりと

豊中市　源田啓生

好き嫌い辞書から消した古稀の今
道行けば蒲公英の綿案内する
秋刀魚焼く晩飯待てずかぶり付く
ときめきを友と競った通学路

羽曳野市　磯本洋一

白内障電柱三度ぶちあたり
勇気出し両眼手術決めました
目が見える感謝をしつつ生きている
三本の矢的はどこにあるのかな

羽曳野市　仲谷真一

寒い朝胃の腑に染みる御御御付
婆さんやもうやめないか無言劇
今平和の危機というのによく眠る
比べないガンバラないが極意とか

羽曳野市　中川ひろ介

胃も怒る店主も怒る食べ放題
早朝の鳩も鴉も地を歩く
傘も杖と言う年頃になりました
どの党もみんな良い事ばかり言う

羽曳野市　安本美喜

名月も私も一緒輝いて
家族葬　お別れをしたかったのに
長電話用事忘れて何だっけ
金運をトイレ磨いて期待する

東大阪市　織田登子

嫌な事忘れて励む趣味の道
再発行何処へ置いたかもう忘れ
今飲んだ薬忘れて人に聞き
最近は整理整とん娘にまかせ

枚方市　河田洋子

正論を吐くストレート相手打つ
人生の中途半端で金まみれ
特価品半端値引きで売れに売れ
晩秋に冷える体をワイン様

枚方市　坂本ミヨノ

国力も国土も民も衰退中
一票の重み知ったか若者よ
無責任恥の文化が地に落ちた
いつからか責任取らぬ権力者

枚方市　松原保

サングラスマスクで隠す超美人
よくしゃべる何が本音かわからない
ところでと言って会話の腰を折る
老齢化次回は中止クラス会

箕面市　寺井柳童

こんにちは聞こえる方の耳に言う
石段へ膝がため息紅葉寺
断捨離を逃げるおまけの皿小鉢
湯たんぽを買って私の冬仕度

箕面市　中山春代

裏表ない人生の味気なさ
歩の裏は金と分っているけれど
わたしにも面子があると鼻眼鏡
台風よ来るな腰痛また疼く

八尾市　田邊浩三

金婚式五〇年振り手を繋ぐ
七転八倒私の人生譜
ロスタイム趣味三昧で使い切る
私の体に残る刀疵

八尾市　前田紀雄

運動会パパは脚立でカメラマン
運動会我が子を探すカメラマン
カマキリとテニスコートで戯れる
一人夜は一人麻雀目が冴える

八尾市　山川寧

家の中ひとりぼっちが二人いる
どれにしよとうとう店で独り言
友人に隣家のゴーヤ自慢する
さかのぼる記憶が遠くなりすぎて

堺市　山﨑早苗

あきらめぬ気力でつくる五七五
古希の坂心はいつも始発駅
逆境で培われてる人間味
そのままのあなたでいいと夢を追う

堺市　大和峯二

バッテラ鮨大阪弁がよう弾む
なんぼでも来ますよってと嵐攻め
黙秘する前頭葉の物忘れ
苛苛と失せ物さがす小半時

大阪府　高木道子

掃除ロボ任せておける部屋作り
裸木に淋しそうです柿三つ
テレビ料理唾飲み込んで我慢する
秋草に生きた証の蝉の殻

大阪府　西川冷子

途切れつつ祭音頭を運ぶ風
透きとおる日ざしやさしい秋ざくら
捨てきれぬ服を取り出し更衣
句に遊ぶ残るもみじと散る紅葉

大阪府　畑中節子

少し衣着せた言葉に癒される
畑一つあるから命輝ける
気合入れ怠けごころに鞭入れる
不都合は口でカバーの仕事ぶり

大阪府　小栢こずえ

その昔妻も天使で今は何
挑戦は家族の支えあればこそ
孫参上ドラマ始まる三世代
筋力を鍛えて老後軽やかに

神戸市　井上忠貞

仏壇を鼻唄まじり掃除する
信じると不安の影が鬩ぎ合い
老いてなお浮つき態度直らない
この人と決めたあの頃若かった

神戸市　興水弘

朝ウォーク白い満月歩を奪う
認知症医者はさらりと言い渡す
玄関でまた忘れたと靴を脱ぐ
傘寿過ぎ消費期限が見え隠れ

神戸市　近藤勝正

パソコンもスマホも出来ず辞書を引く
白黒の狭間の中で丸く生き
ときめいた人と暮して早や傘寿
やわらかいキャベツの芯にある秘密

神戸市　山根弘子

尼崎市　清水久美子

きんぴらの胡麻にぎくしゃくする入れ歯
慣れた手で膏薬を貼る風呂上がり
8桁の約手握ってふところ手
トラキチが来季のボスを予想する

伊丹市　平井富夫

みのる秋三段腹が邪魔になり
壁ドンはパンツとズボン履く時よ
酔っぱらい自宅前ではシャキッとし
直ぐ動く返事も素直介護ロボ

川西市　日野岡和之

赤ちゃんのにぎにぎに住む青い鳥
天使語を交わす母子の無言劇
負けて勝つ耐えて汗して人間味
天地人繋がりを断つ原発禍

篠山市　永井かほる

聞き違いトンチンカンで怒られる
怒られて育った昔の多姉妹
残り世は憎まれないよう生きていく
蝗見た子供の頃の思い出に

三田市　今西廣子

古稀の道語学留学駅前で
生臭き魚と私酒に酔う
オムライスいっぱい食べた創案者
のん気者亀かて汗はかいている

三田市　東内美智子

天平の木沓の音の東大寺
入れ歯外したその口もとに負けました
おかしいぞ水と油じゃなかったか
端っこに黙って座るタイプです

三田市　宗福清司

後期とはもうすぐですと言っている
顔見ればやる気の有無が分かります
加工したデジカメ画像これ写真
テクニックはつぎはぎだらけマイゴルフ

宝塚市　丸山孔一

青々と故郷の香りすだち来る
パソコンに話し患者に向かぬ医者
パソコンがフリーズしたと妻が呼ぶ
どの歌詞も中途半端でラララララ

西宮市　株元玲子

地道にコツコツをわが心情とし
わが人生まだ続きそう細い道
わたしだって悩みあるけど笑っている
マイナンバー手ぐすね引いて待っている

三木市　山口久子

祖母九十五体不自由口達者
手足痛爪だけ元気のびて行く
わが友は上手に人と付き合って
大家族に囲まれくらす幸福者

南あわじ市　萩原狸月

ゆっくりがだんだん早くなる老化
うれしさは今年も聴けた除夜の鐘
カレーにも福神漬派らっきょう派
ハラハラとにこにこと見る初歩き

奈良市　尾畑なを江

苦労した言わぬ本当の苦労人
分け入れば収穫もある秋の山
時間あるけれどヤル気が出て来ない
庭の柿鳥にも少し分けてやり

奈良市　髙橋敬子

ブランド品出かける場所をつくらせる
インターホン無くても耳に門の声
裏表上下斜めもあるお人
竿にシャツ干して気付いた鱗雲

奈良市　髙橋仁志

眠られず消したテレビをまたつける
燈を消して明かりに和む万灯会
皺を消ししばらくするとまた皺が
着替えたらまた気温変化する

香芝市　山下純子

妖精に会いたくなって入る森
私の地図どこにあるのか宝島
せせらぎにすべてを流し露天風呂
旅立った子供の部屋で無事祈る

岩出市　村中悦男

九十年生きて少しは人を知る
ゆらゆらとゆれて九条はどこへ行く
辞典にルーペ心豊かに一行詩
ここですよ栞私を呼んでいる

鳥取市　奥田由美

手作りのケーキが泣かしたガンコ爺
家族の和壊してすすむ遺産分け
郷土紙を土産にもらうフルムーン
嗜みがうすれ聞き方ストレート

鳥取市　近藤秋星

閻魔大王賞が貰えるあの老婆
あの男敵か味方かわからない
砂丘にも四季折々の顔がある
正月が超特急でやって来る

鳥取市　坂本とも湖

九条の平和がヤバイから吠える
紅少し指して冬眠から目覚め
被災地の天使は弱音吐きません
神様の余所見その間に森が荒れ

鳥取市　髙原かおる

ガタガタと戸の開け閉めにコツがいる
足腰がガタガタ老いて口達者
節水と言いつつ蛇口しめ忘れ
横着と言われ体を休めてる

手を合わす孫見て心耕され　鳥取市　棚田　大

汚れても心の汚染しちゃならぬ
台風の目俺をにらんで喝入れる
戦争の体験聞いて飲み忘れ　鳥取市　津村律子

生きるのも親孝行の務めです
蛙鳴く雨が降るよと亡母の声
咲き誇る凌霄花亡祖母を見る
木の葉舞ういずれ真似して飾りたい　倉吉市　田中紀美恵

ペット呼ぶ好きな昔の彼氏の名
人間が好きのまんまで旅立とう
加齢ですどの医者からもああいやだ
おーいおい貴方私の名呼んでよ　境港市　中井虎尾

風にゆれ楽しく遊ぶ萩の花
美人とは心優しい女の事
反対派安保の陰の戦さ読む
自民党復党ゆるし数補強　米子市　生田和之

秋夜長湯割り水割り思案する
マイペース仮病も使い切り抜ける
検閲のようにチラシを読みふける
可愛いが時に小憎い孫と住む

世に生まれよくぞここまで健康で　米子市　池岡たけし

あがる藍濃い色深め秋謡う
宝物どこへ隠せば独り占め
年重ね人間らしく見えはじめ　米子市　田村周子

子が宝金はなくても明日がある
古いもの匂いからして懐かしい
秋夜長眠れないのが困りもの
結婚式洋装でいこう手間いらず　米子市　永井三津子

両隣り秋も酣(たけなわ)秋刀魚焼く
時忘れ眺める山の秋化粧
今日もまた会えない亡夫の墓洗う
亡夫に会え嬉し泣きした夢の中　米子市　野川宣子

古株の押しで纏まるとなり組
お宝はまめに働くこの体
車より怖い我が家の段段が
しゃなりしゃなり歩く姿が危なげだ　鳥取県　飯野菖子

父母を糧に生きます八十路坂
あの時の親の言葉が生きていた
脳トレに今日も歩いた一万歩
誘うなよ天国逝きはまだ早い

大声で喋り悲しみ消している
癒しとはビール一本飲んで寝る
傘寿来て後拾年に期待する
夫婦連れ見ると嫉妬も少し湧く

鳥取県　下田茂登子

吹きたまる慕情はらはら秋の天
深みゆく秋へわたしは無抵抗
無事な日は月もきれいに冴えて見え
控え目な態度で風を確かめる

鳥取県　田口清帆

ごみ箱に入るわけではないあの世
冷たいハートだな屋根は立派だが
あの世へは感謝の心持ち帰る
大宇宙君に出逢えたこと感謝

松江市　相見柳歩

ふる里の恵み柿栗きのこ味
秋晴れがうきうきさせて誘い出す
核家族昔話が出来ぬ夜
生きて来た杖は子供の笑顔なり

松江市　山根邦代

ライフワークみんなの力借りたいな
ジェラシーにひるんで少し強くなる
パラダイス生きてるうちに迎えたい
七回忌母に感謝のお念仏

出雲市　黒目英男

ママの愚痴パパは寝た振りしています
ばらばらと廃寺の庭へ振る銀杏
じいちゃんはないしょ話は聞こえない
長生きで運命線の八合目

雲南市　菅田かつ子

卒寿前まだ足も立ち口も立ち
足跡は真っ直ぐだけど凹凸で
不足など言わず心で日日感謝
やさしい倅夫婦に孫が居てくれる

安来市　原煩悩児

風向きは関係なしに好きな場所
連休が続くとお金飛んでゆく
元気です元気ですよと薬飲む
弁当を作った頃は光ってた

岡山市　前田恵美子

あなたへの愛に夢中なフライパン
勾配を少し緩めて上がる恋
空白に少し愛憎入れて春
目の前の愛に瞬きすらできぬ

笠岡市　藤井智史

靴ひもを解けぬように縫いつける
すいすいとトンボのナビよ何処へ行く
面倒と思う基準が皆違う
伸びた枝切って青色風通る

玉野市　片岡富子

黄蝶の戯れ児等を重ねみる
返信の欠が重たい菊日和
異常気象愚痴は言わない彼岸花
我慢する恐怖是か否か救急車

岡山県　池田たか子

魚釣は短気を治す特効薬
コンビニを梯子して読む週刊誌
プレゼント迷った時は旅行券
妻のナビ車のナビとよく違う

尾道市　小畑宣之

青空を掃いてアートの秋の雲
新しい自分見つける試着室
ぬるま湯へ今日がゆっくりほどけだす
靴選びそんなこんなで買いそびれ

竹原市　若年幸子

敬老日こうしちゃ居れぬ気もするが
六十年添うと思わず恋した日
金が来る道をどこかで絶たれてる
家系図を書かにゃ解らぬ間柄

竹原市　土井輝恵

秋刀魚焼く男独りの詩に耽る
心配を酒で薄めてうまく生き
アポなしの客に干柿一つ出し
誤解とけ今夜の月と酒を酌む

福山市　藤後卓也

土竜道通せんぼする沈丁花
弟の手はズッシリと稲穂満ち
じょうびたき元気な顔を見せてくれ
この冬はきっと寒さがこたえそう

竹原市　六田半徳

マイナンバー秘かに吠える秘密主義
煌々とスーパームーン稲の上
どうしてもウサギに見えぬお月さま
マイナンバー影のように付いてくる

防府市　坂本加代

しがらみを捨てれば伸びる無精ひげ
ついて来る影が私をそそのかす
ふるさとの川に私を遊ばせる
抜糸するときの痛みが心地よい

松山市　栗田忠士

養殖魚未来信じて一直線
糸をはくカイコは桑を忘れない
青虫よ君のしあわせ変身後
いつからか体内むずむず虫になる

高知市　三谷松太郎

締切りの投句を終えた安ど感
深読みが出来なかったと悔いひとつ
亡夫がいたらと思うことたまにある
子に感謝今日も良いことありました

北九州市　小松紀子

金出せば庭の草取り早く終え
レストラン茶のみで終るひとり者
秋場所も小兵力士を応援し
退院もやはり息子に迎えられ

佐賀市　清水園實

コスモスが沈む心を爽やかに
若者に可愛がられるおばあちゃん
テレビ見て体に良いはすぐ実行
ボケてても心のかよう友がいる

唐津市　吉冨節子

パリの花机に香り出すロマン
涅槃像臍から噴火してる阿蘇
自然体程良い距離にある男女
わが胸に晩節穢さない祈り

熊本市　杉野羅天

老い深め心もとないもの忘れ
庭の木々もとは鉢植えその名残り
汗が出て作業半ばで脱ぎ捨てる
予定よりはかどり明日は休みとす

唐津市　岩﨑實

網張って小虫待ってる蜘蛛の知恵
垣根越しとなりのゴーヤが黄ばんでる
痛いとこ年と平行進みます
減量し食欲の秋どうしよう

山鹿市　前田幸子

靖国はやめてじじいの墓参り
身内ごと公私混同してないか
少子化は一夫多妻で食い止める
まんなかで道をゆずらぬエライ野良

山鹿市　三谷直男

風の盆願い虚しく水浸し
目隠しの手の隙間から見る芝生
皿ばかり大きく見える秋さんま
初夢は初孫抱いた婆の顔

山鹿市　米加田恭代

たそがれ時酒と泣きたいあつかんで
老いらくの恋っていくつからですか
今朝もまた心の化粧おこたらず
あっさりと黒子に徹しすりぬける

山鹿市　柳田白沙

カラオケに媚びられてちと歌手気分
忘れたいのに子が目覚めさす誕生日
古希過ぎて人の儚さやっと知る
本気だからもろに怒りを投げかける

シドニー　坂上のり子

故郷へ土産元気な身体だけ
傘の中紫の月忍び込む
ススキの穂プラチナ色のシャツを着て
手の平のメモを見ながらする介護

札幌市　斉藤宏子

ありがたくドッサリ秋のお裾分け　札幌市　富永恵子

百年誌記憶の川が甦る
しぐれ空二重の虹とずぶ濡れて
歩きたい心が汗を溜めている　塩竈市　木田比呂朗

カルテから残存価値の注意受け
飲み会も年相応に減りました
無印は主義だと言うが負け惜しみ
右脳錆びオーバーホールしたい日々　つくば市　嶋本喬

暗闇にバスを降りれば虫時雨
起きて見つ寝て見つスマホ奴隷だな
一周忌遺産分けたら他人様
ついに来た席を譲られモゴモゴと　伊勢原市　小田幸子

いつの間にセミの声から虫の声
ワンワンと警告バアバ出てはダメ
新築の家に夢置き妻は逝く
新築のここがあなたの夢の場所　佐渡市　高野不二

死ぬ迄のつき合いマイナンバーが来る
急用に杖を忘れて走り出し
肩書きが謝る役も上手くなり
通販の葉書一晩考える

年重ねちぎり画いとし子宝物　静岡市　渡辺芳子

押し車ツエが頼りの同窓会
同窓会重ねたあかし顔のシワ
皆違う自分の人生いとおしく　江南市　脇田雅美

日雇いに食いぶちつなぎ並ぶ朝
分かり切ったことを言わせるインタビュー
差し向かい酔っぱらうのも先が勝ち
おでん食べクラシック聴き酔いしれる　倉敷市　安東モモ

一挙手をじっと見ているうちの犬
電話機が重たい話持って来る
ねむい目をしばたきながら話聞く　寝屋川市　守家尚世

平等に母の心は子を想う
海外は遺言書いて夫婦旅　（前月分）松山市　近藤修二

満月の欠けたところにある未来
円満の秘訣妻には逆らわぬ
すきま風時にはスリルちょっと見せ
もったいない過剰サービス罪ですよ　（前月分）鳥取市　坂本とも湖

別居してゆっくり燃やす残り火よ
ゴミ箱へ捨てたい過去が手に残り
姑の毒気いまだに抜け切らぬ
しんどいから賢い嫁と同居せぬ

新川柳鑑賞 (46)

麻生　路郎

電化してみたが坐って飯を食べ

（多久志）

台所風景をごく平易に詠んだ句であるが、なんだか、自分たちの生活が常にムジュンだらけで尻こそばゆさを感じたのである。そう思うて振りかえると畳の上に椅子をならべて事務をとっているのもおかしく「電化してみたが」の上八の措字がピタリと来る句である。

火吹竹何も忘れた顔で吹き

（八　穂）

火吹竹と云うものは都会ではもう忘れ勝ちであるがかまどで飯を炊くには必ず一ト役買っていた台どころ用具の一つである。今でも農家の台所などにはころがっている。昔のどどいつや端唄の中には色っぽい役割りさえしていたものである。火を吹いて火力を強化するのに用いる用具で、至極単純で素朴な感じのものだ。かまどの下がけぶると、頬をふくらませて、息の続くかぎり吹くので、それこそ何も彼も忘れた顔となるのである。

面白い写生句である。

一山にされる胡瓜のどれもすね

（芳　泉）

あまり出来栄えのいゝ胡瓜でないことは、いずれは八百屋の店先で一山幾らで売られる品なのである。そんな品だけに、どれを見ても、すねていて満足な形をしてはいないと云うのである。この句は擬人法による諷刺句である。人間も一山扱いにされるような人間は、どっかにすねたところを持っているからである。単なる写生句でないことは「すね」の二字が表している。

すき焼の健啖体制整える

（夜　湖）

「体制整える」はいかにも大げさな云い方であるが、そこが誇張法の面白味である。日常の茶飯事でも表現技巧によって、この句のように句を生かすことが出来るものである。

利用価値尻尾をつけたエビフライ

（万　古）

海老フライからシッポが出ていると云うだけであるが、なかなかユーモラスな句である。尻尾が出ていて、たしかにエビの存在を示し、エビの大きさをそれとなく示しているところに、料理人の技巧が思わされたのである。それに利用価値という硬い用語を駆使して一段とユーモラスな味を出していると思う。

出刃包丁らしくボタボタ水が垂れ

（水　客）

一体料理人というものは水使いの荒いものであるが、出刃を使うような場合には特にザァザァと水を使う。出刃包丁は一寸見ただけでも随分とぶきみなものであるが、その出刃包丁からボタボタ水が垂れるさまは血の滴りのような物凄い感じをうける。この句は感覚的な写生句である。

自転車の見える角度でそばを食べ

（芳　仙）

うっかりとしていると、自転車は出先でよく盗まれるものである。この句の場合、セールスマンに限ったわけではないが、たびたびとられた経験があるので、軽食をとっていても、自転車から眼を離さないのである。写生句の妙味がこんなところにもあることを知らねばならない。スル〳〵スル〳〵とそばを喰べる音をさせながらも、チラッチラッと横眼を使っているユーモラスな情景が眼に見えるようだ。

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

恋遠し海は木霊を返さない
カンガルーの袋はテレビ見るによし
病み上がりうどんの鉢の重すぎる
将棋指す父遊んでる顔でなし
オリオンに見下ろされてる初詣
両親の期待通りは背丈だけ
明日落ちる木の実同士のさんざめき
機関車に貴婦人ありき恋をせり
機関士が機関車降りるときの顔
ほほ笑んでいる紀子さんの鼻の汗
敗けて勝つことも大切共白髪
台風にこけしの棚はしずかなり
金よりも銀　ゴーイングマイウェイ
夫用妻用とありカレンダー
うどん好き　そば好き譲ろうとしない
プリンスの恋　美しく父子二代

水鳥へ鶴のつがいは身じろがず
ひいばあさまからの指輪と譲られる
晴着着て出たがやっぱり立話
風さんがやさしい雲の親子連れ
見舞客土筆を摘んで来てくれる
蛙の降らす雨やら　龍の降らす雨
雨垂れへ　錦を飾ること誓う
口癖に言ってたことが遺書となり
若社長頭が切れて肚がない
ひまわりのリズムコスモスのリズム
梅田から来て新宿の混み具合
配られて毛生え薬の試供品
大穴は十三日の金曜日
ふんぎりの一番おそいお金持ち
普茶料理　子供はじっとしていない
花一杯友いっぱいでさびしい日
達人の笛名人が聞いている
中華料理のテーブル前にした器量
喝采に代えて頷くばかりなり

誹風柳多留一二篇研究 30

山田昭夫・石川道子
小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男
清　博美

239　**雪の朝角田川からいひたてる**

山田　雪で吉原に居続けしての朝帰りの亭主。言い訳をするのに、女房の当たりを和らげるために、先ず隅田川の雪景色の素晴らしかったことから話始める。そんな事で騙される女房じゃあるまいに。

雪の朝女房の角かのきにはへ　天四礼2
雪の朝女房ハいつを持ッて打ッ　一〇29

小栗　言い立てるは、とりあげていう。りゆうにしていう。問題にする（「江」）。

「雪の朝」を朝帰りとして、言訳をする光景とすると、「角田川」はどういう理由になるのだろうか。「雪景色」の説明が役に立つとは思えぬのだが……。

柳雨「吉原志」では、雪が降ってきたので、吉原へ行くともてるという句が並んでいる中に採句してある。「雪の朝」が気になるが、角田川の雪景色のすばらしさなどを言い立てて出かける理由にしている、という方が落着く気もする。

細井　雪見に出かけたいので――もちろんかこつけだが――いろいろ並べ立てる。

伊吹　「朝」だから礎賛。帰りの隅田川から女房を前にした時のために、言い訳の練習をしているのか？あるいは亭主が帰ってくるまで待てず、隅田川まで迎えに行って文句をいう女房なのか？

清　柳雨氏の配列に賛としておく。

240　**しいのみでさかへ茶の木ておわるも**

山田　源頼政は、

人しれず大内山のやまもりは
木がくれてのみ月をみるかな

この歌によって昇殿ゆるされ、正下四位にてしばらくありしが、三位を心にかけつゝ、

のぼるべきたよりなき身は木のもとに
しゐをひろひて世をわたるかな

さてこそ三位はしたりけれ（『平家物語』巻第四・鵺）

椎の哥から這上る源三位　一六二30

しかし晩年になって、高倉宮を奉じて平家追討の兵を上げ、宇治川の合戦で敗れ、宇治の平等院の扇の芝で自刃するという結末となる。

埋木の花さく事もなかりしに
身のなるはてぞかなしかりける

これを最後の詞にて、太刀のさきを腹につきたて、うつぶさまにつらぬかってぞうせられける（同・宮御最期）。

うもれ木の花ハ扇の上ェへちり　別中33

宇治は茶所だから、それで「茶の木で終わるなり」と表現。

清　賛。

241　**あこを剃る内見る文を引ッたくり**

山田　遊女からの手紙。

ふミか来ていやすと髪結床コでいゝ　明六智4

という句かあるように、髪結床を中継所とする場合があったようだ。その文を、本人が「顎を剃るうち」そこに集っていた誰かが見ているので、その「文を引ったくり」。

清　賛。

242　**ふられ客うねめの宮で夜をあかし**

山田　采女宮は「奈良の猿沢の池の畔にある祠。帝寵の衰えたのを嘆き、猿沢の池に投身した采女を祀った。また、この祠は後ろ向きに建てられいるところから転じて、尻を向けることなどのたとえにいう」（『日国』）。句意は説明するまでもあるまい。

ふる事を采女の宮と木辻町　二六32

―水辻町は奈良の遊女町。彼の地では「振ることを采女の宮」という意。

清　賛。

243　**目をふいて杉本左兵衛めしにつき**

山田　杉本左兵衛は楠正成が雇った泣き男。後に正成が足利尊氏と戦った時、計略で正成が戦死したと大層に泣いて、足利方を欺いたと言われる。主題句は、左兵衛は正成にお目見えの時、泣いて見せて合格、その涙を拭って飯に付いたというのだ。江戸時代には雇うことが決まると食事が与えられ、それを食べることにより正式に決まったが、南北朝の時代ではどうだったのだろうか。

今とむらいか出るやうに左兵衛泣　一五16

清　賛。

244　**扨ハおれゆへけがすかとていしゆいひ**

石川　略解では美人局（浄瑠璃『ひらがな盛衰記』の梅枝に対する影季の言葉から）の句としているが、間男の句としても間が抜けていておかしい。女房は不貞を働いたのだが、それを見つけた亭主はちょっと間抜けのお人よし。女房は俺ゆえに美人局をやったと納得している。

五両つゝていしゆに三度取て遣り　安二天2

小栗　賛。文句取だけの句だから、如何様にも解釈できる。石川説、たしかに可笑しい。

細井　「奥の客に身を任せ騙しなば、二百両や三百両の金は自由。扨はおれ故身を汚すか。夫の難儀にや換へらぬ……」と、口ずさんでみたくなる浄瑠璃『ひらがな盛衰記』の台詞をそのまま句にしたのではないかと、おもわれます。勿論礎解を否定するものではありません。

清　賛。但し、「女房は俺ゆえに美人局」とすると、第三の男を設定しなければならず、話が複雑にる。

245　**さじきから首のありたけ下女のぼし**

石川　芝居見物の下女。後ろの席から一生懸命舞台を見ている。

さじきから下女かま首をほつたてる　安二鶏2

清　賛。

246　**仲国ハ中くやぼでないおとこ**

石川　源仲国は、高倉天皇の使いとして、清盛に憎まれ嵯峨に隠れ棲んだ小督を探しに行き、宮中に連れ帰った。小督の弾く琴の音を聞き分け、それにあわせて横笛を吹き彼女を探し当てたという粋な男である。

やれ爰にうしやあかるわと笛をふき　明四智7

清　賛。

英語 de Senryu ㊽

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim HORNE

生活を　顔に出すなと　いふてたに
you said to me before,
not to show the real life
on your face

ふと目をやれば煙突にけむりなし
looking at the sky
no smoke
from the chimney

---

said say（言う）の過去形　*before* 以前　前に　*show* 見せる
real life 現実の暮らし　*look at* ～を見上げる　*sky* 空　*smoke* 煙　*chimney* 煙突

～リバーウィローのため息～ R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳⑫

ブライスは著書の *SENRYU*（北星堂書店 1949）で、女性、子供、母親、父親、妻、夫、姑に続いて *Other Relations*（その他の人間関係）を 32 句翻訳しています。内訳は古川柳が 18 句、現代川柳が 14 句です。今回紹介する川柳は今の時代にはそぐわない事象です。しかしこの本の出版が 1949 年（S24）で、日本が講和条約の調印も行っていない戦後 4 年目のことです。その時代性を考えれば、ブライスの選句も納得できます。この時期にブライスは英語圏の人々に日本人の生活意識を紹介しようと努力しました。この古川柳は、けっこう厳しい内容ですが、川柳独特の穿ちの効いた小気味よさで笑いを誘います。さらにブライスの英訳にも工夫がこらされています。

持参金嫁なけなしの鼻にかけ　（古）
(The bride / Hangs her dowry / On what nose she has.)

英訳の意味は、（花嫁は自分の有るか無きかの鼻に持参金を掛けている）です。ブライスは「花嫁はさほどきれいではなく鼻ぺちゃだが、持ってきた持参金の額を夫に自慢する。日本語では自慢することを（鼻に掛けると）云う。この川柳の主眼点は鼻に掛けるである。」と説明しています。一般的に英語では鼻にかけたり、自慢することを *boast* と言いますが、ブライスは掛けるにあたる *hang* を使っています。川柳の（鼻に掛け）の意味を、自慢する（*boast*）よりも鼻に掛ける（*hang*）の方を強調したのでしょう。掛かりそうにもない鼻に持参金を掛けていると英訳しているところが、ブライス流の洒落といえるでしょう。

参考文献：*R.H.Blyth, SENRYU*（北星堂書店 1949）p.104.

高野山川柳塔碑合祀報告

十一月七日に第二十七回目の合祀法要を実施致しました。

秋冷の候、高野山は雨模様も懸念されましたが、幸いにも少々の粉糠雨程度で済み、無事法要を営むことが出来ました。

合祀対象者は後記の七名様で、そのうち大阪市の神夏磯様のご遺族一名並びに永田様ご遺族二名そして田中様のご親族として坂上淳司様のご参加を頂きました。

法要参加の方々

川柳塔社からは新家理事長、板尾相談役、西出相談役、古今堂常任理事他七名の参加で総勢十一名での法要となりました。

法要に先立ち新家理事長から遠路のご参列の御礼と故人への哀悼を述べられました。読経の後、お坊様からは二十七回途切れることなく、このようにお参り頂くことを故人も、きっと喜ばれているとのお話を頂きました。厳かな中にも温まる思いの溢れた合祀でありました。

法要後の直会は西出相談役の献杯に始まり歓談と故人様を偲ぶ話題で終始し、和やかな中で散会を迎えました。

また、神夏磯家のご遺族様、永田家のご遺族石原様、そして田中家ご遺族様から合祀に際しご芳志を賜りましたことを報告させていただきます。

〈島田誠一記〉

合祀対象者

山本　蛙城　様（泉佐野市）
神夏磯典子　様（大阪市）
永田　俊子　様（熊本市）
近藤　佳子　様（鳥取市）
深田　倶久　様（鳥取市）
田中　笑風　様（木津市）
田辺　鹿太　様（尼崎市）

喪中につき年末年始のご挨拶を遠慮させて頂きます

平成27年12月

〒581-0867
八尾市山本町5－4－6
内海幸生

喪中につき年末年始のご挨拶を遠慮させて頂きます

平成27年12月

〒558-0041
大阪市住吉区南住吉3-16-18-206
鶴田遠野

愛染帖

新家　完司　選

（投句　274名）

いけ好かぬものだ私という男
（評）自分に満足してしまうと進化は止まる。卑下し過ぎると自信を失くす。「半分好きで、半分嫌い」ぐらいがベストではないか。
松江市　石橋　芳山

おとがめもなく散らかした部屋にいる
（評）散らかしていても誰からも叱られない部屋。いわば独立王国。しかし、程度を超すとボケた思われるので、たまには片付けを。
奈良市　大久保眞澄

0120からの電話は取りません
（評）相手の番号が表示される電話機。0120で始まるフリーダイヤルはたいがい勧誘とかセールス。取らなくても支障なし。
紀の川市　辻内　次根

飴ちゃんの届く範囲がお友達
（評）オバチャンの強力な武器「飴ちゃん」。断る無謀な者などおらず、貰ったら皆お友達。キビダンゴより民主的な飴ちゃん仲間。
箕面市　中山　春代

ふとん干し若妻風に空を見る
（評）布団を干すのに絶好の快晴！　爽やかな気分は分かるが、さて、「若妻風」とは？新婚当時のことを思い出したのかも…。
東京都　川本真理子

バス停のベンチで休む一万歩
（評）歩幅にもよるが、一万歩は6～7㎞。所要時間は一時間半ほど。無理をせず休むのはいいが、バスが来る時間帯は避けたい。
広島市　岸本　清

おまわりがおまわりさんに捕まった
（評）警察官は全国で28万人ほどとのこと。それだけおれば出来の悪いのも混じっているだろうが…。最近は不祥事が多すぎる。
羽曳野市　徳山みつこ

秋の日の座敷に亡母とふたり居る
（評）静かな秋の日のひととき、座敷に端座してお茶をいただく。母がいたときと少しも変らず、背を丸めた母の姿が見える。
唐津市　山口　高明

敵近し護り手薄な日本海
（評）そのように警鐘を鳴らされると不安になるが、この長大な海岸線をどのようにして護るのか。やはり「外交」しかあるまい。
防府市　坂本　加代

徴兵はマイナンバーでメールかな
（評）これもまた恐ろしい「行き過ぎた警鐘」だと思いたいが、マイナンバーがそのように使われる危険性無きにしもあらず。
つくば市　嶋本　喬

これ以上の無口はいない古本屋
大阪市　谷口　義

他人事のように見ている他人事
京都市　都倉　求芽

太陽の裏側話題にもならぬ
正月の写真を秋にくれた孫
神戸市　松井　文香

断捨離も順調つぎは体脂肪
やわらかい乳房は母である誇り
高槻市　原　洋志

カラフルなチラシ丸めて万華鏡
我が余生妻が糸引く奴凧
鳥取市　田中　天翔

塔まつり句箋の文字が踊ります
ギャップある雅号が重くのしかかり
大阪市　髙杉　力

ハッスルもファイトも今や死語となり
出来心でしたと言えぬプロポーズ
西宮市　緒方美津子

芋に新聞鯛焼きにかんぶくろ
ジャンボくじ大金持ちは並ばない
香南市　桑名　孝雄

飲み食い歌う元は充分とれている
ライバルもみんな戦力外らしい
豊中市　池田　純子

分からないときはスマホに聞いてみる

岡山市　永見　心咲
先客は今年も猿で栗少し

海南市　小谷　小雪
不規則なころがり方もいいね栗

弘前市　高森　一呑
デジタルの湖で筏を漕いでいる

鳥取市　福西　茶子
股割りもテッポウもして今日も無事

沖縄県　森山　文切
得点の多くは運で挙げました

橿原市　居谷真理子
吉本のくどさを楽しめる歳に

枚方市　海老池　洋
保育所の頃からあねご肌だった

河内長野市　山岡冨美子
見ることのないまま過ぎた僕の背な

京都市　高島　啓子
値切ったら罰あたりそう仏具店

堺市　加島　由一
和菓子屋も本屋も消えてケアハウス

鳥取県　斉尾くにこ
タッチパネルばかりで指紋消えそうだ

三原市　鴨田　昭紀
牛の耳マイナンバーを付けている

河内長野市　谷　久美子
地下にある本屋は息が詰まりそう

羽曳野市　中川ひろ介
クラス会で帰省しました地蔵様

藤井寺市　増井ヨシ枝
満天の星おじいちゃんおばあちゃん

神戸市　細川　花門
通夜でしてほしい小さなエピソード

三田市　上田ひとみ
本心は話せず嘘も話せない

鳥取市　倉益　一瑤
合コンで探す四ツ葉のクローバー

弘前市　高瀬　霜石
衣替えしても似合った服が無い

佐賀県　真島久美子
ハルカスより通天閣が似合う街

三田市　村田　博
借り物競争校長先生借りてくる

枚方市　安土　理恵
食ったこと忘れてたのでまた喰った

橿原市　居谷真理子
外見でタフな女と誤解され

堺市　矢倉　五月
まだ君を忘れていない日記帳

倉吉市　牧野　芳光
キッチンは私の陣地タクト振る

宝塚市　田中　章子
盆の客どっと寂しさ置いてゆき

唐津市　仁部　四郎
ニンニクにりんご　それでも短命県

長岡京市　山田　葉子
エンディングノートてなんや　遺書かいな

枚方市　寺川　弘一
可能性だけは握っているのだが

八尾市　高杉　千歩
近道が無いから近道を作る

鳥取市　岸本　宏章
御神輿を担ぐ若い衆皆白髪

瀬戸内市　宮宅比佐恵
秋祭り餅拾いすぎ御裾分け

堺市　大隅　克博
裾上げテープ脚も縮んできたようだ

紀の川市　宇野　幹子
愛想笑い夫にだけはできません

交野市　田岡　久幸
大阪のオバチャン端数まず値切る

堺市　奥　時雄
爺様のヤケに張り切る草刈機

え～っもうお節料理の展示会

失言と本音コインの裏表

どうしょどうしょ手を借りまくり乗り越える

天の声聞いた話は信じない

進化する街年寄りにも優し

区別なら出来る英語とフランス語

怠けてはないです老いただけのこと

徳を積むどころか不徳積んでいる

トーストが焦げるくらいの嫉妬心

良夜かな芝居のように犬が吠え

早過ぎる秋にこんがらがる衣類

年寄りが増えたと嘆くお年寄り

冴えるのは晩酌後の五七五　札幌市　三浦　強一

朝三時寝床の中で五七五　弘前市　今　愁女

抜けません在庫いっぱい五七五　大阪市　江島谷勝弘

まつり済み心機一転五七五　大阪市　榎本　舞夢

全没も佳吟も共に帰る道　米子市　成田　雨奇

なぜ没だ親の欲目ということか　倉吉市　中村　毅

全没の疲れ引き摺るきのう今日　岡山市　藤成　操江

屑籠から拾い没句のリサイクル　明石市　糀谷　和郎

川柳に夢中ビールの泡が消え　富田林市　小出　修三

職退いてなぜかお酒が強くなる　江南市　脇田　雅美

子と嫁と儂で一本五百CC　安来市　原　煩悩児

息子との距離は焼酎で埋める　藤井寺市　鈴木いさお

ふるさとの銘酒は酔いが早いこと　尼崎市　春城　年代

酒癖の良さで今宵もまた飲める　米子市　生田　和之

酒好きな夫の側に猫もいる　紀の川市　北山　絹子

居酒屋がスープの冷めぬ距離にある　松原市　森松まつお

堅物も酒が好きなら付き合える　米子市　後藤美恵子

人間が好き饅頭も酒も好き　羽曳野市　吉村久仁雄

口裏を合わせるための四合瓶　弘前市　稲見　則彦

酔うほどに威勢よくなる国訛り　和歌山市　平田　元三

誰よりも酒が大事にしてくれる　米子市　竹村紀の治

飛び入りで「鐘の鳴る丘」胸あつく　八尾市　山根　妙子

星影のワルツで酔うた手が温い　大阪市　若本　安代

胃カメラを飲むため鼻毛抜いて行く　岡山市　丹下　凱夫

集中力欠けて通らぬ針の穴　和歌山市　福井　菜摘

置かれたら動く事ない核のゴミ　弘前市　吉川ひとし

楽しい日がたまにあるから頑張れる　鳥取市　岸本　孝子

捨てようか持って死ねないのに迷う　尼崎市　山田　耕治

大家族洗濯干しは僕の役　鳥取県　竹信　照彦

撫でられた髪だサッパリ切り落とす　大阪市　栃尾　奏子

旅終えて旅友とまた旅プラン　西予市　黒田　茂代

島に来る神様仏様の医者　茨木市　藤井　正雄

割り勘は遠慮下さいレジの前　宝塚市　太田としお

「ごめんなさい」と言っては食べる肉魚　鳥取市　前田　楓花

入門書までは揃えた趣味ばかり　四条畷市　吉岡　修

嫋やかな字で書いてある請求書　大阪市　平井美智子

クリスチャンだけど愛読歓異抄　堺　市　澤井　敏治

母と妻女の顔も持っている　八王子市　川名　洋子

BSで世界漫遊しています　大阪府　籾山　隆盛

親四人看取り老後に姉を看る　京都市　櫻﨑　篤子

参ったと言わず我慢で古稀歩む　堺　市　大和　峯二

肩書きを光らす人の側いかぬ　倉吉市　岡﨑美知江

唐津市　岩﨑　實
もがいても泣いても致死率一〇〇％

寝屋川市　平松かすみ
お姫様だっこいつかはロボットに

小野市　藤原　泰宏
心臓に負担なること聞き流す

笠岡市　藤井　智史
永久歯揃い新人類笑う

三田市　上垣キヨミ
婚礼はあるが葬儀は無いホテル

姫路市　古川　奮水
TPP五円硬貨の絵が曇る

岡山県　田中　恵
道の駅母似の人の飯を買う

大阪市　井丸　昌紀
負け試合も阪神電車儲けてる

鳥取市　永原　昌鼓
レシートにバッチリ見える暮らしぶり

三田市　九村　義徳
手の甲にメモし看護師真似てみる

大阪市　笠嶋　惠美
脳トレに毛筆で書く字が笑う

河内長野市　松岡　篤
日記帳残され遺族困ってる

三田市　久保田千代
案山子にもご苦労願い稲実る

鳥取市　近藤　秋星
春の叙勲も秋の叙勲も素通りに

東大阪市　北村　賢子
しみじみとさざ波寄せてくるお肌

高槻市　初代　正彦
膝交えたらギャップがすっと消えました

唐津市　吉冨　節子
多種病気持ってはいるが生きている

大阪市　宇都満知子
四十年この手に馴染む中華鍋

枚方市　松原　保
人間に生まれたことで嘘もつく

米子市　中原　章子
しあわせの灯に濁流が牙をむく

神戸市　近藤　勝正
朝ドラの方言少し誇張気味

河内長野市　穂口　正子
ダイエット血圧下げて皺増えた

橋本市　石田　隆彦
転がって来た運だから乗ってみる

芦屋市　竹山千賀子
燃えあがり冬へ決断する紅葉

鳥取市　夏目　一粋
ありがとう直ぐ言う孫に見習おう

三田市　今西　廣子
ユーモアを入れると空気温かい

大阪市　伏見　雅明
何にでも首突っ込んですぐ飽きる

米子市　見山　温子
留守の家蜘蛛がぐるりと糸を張る

河内長野市　黒岩　靖博
満月にもう直ぐ俺も枯れすすき

シドニー　坂上のり子
煌々と工事うるさい眠れぬ夜

青森県　松山　芳生
きのこ狩り秋をつるっと見届ける

八尾市　宮﨑シマ子
若いのに任せられない十二月

鳥取市　春木圭一郎
残り火を燃やすつもりの人に会う

大阪市　津村志華子
泥棒のようにごそごそ探し物

河内長野市　梶原　弘光
年一度男を上げる秋祭り

尼崎市　清水久美子
おいでませ言われ関サバ食べに行く

横浜市　菊地　政勝
マイナンバーさてへそくりはどうしよう

海南市　堂上　泰女
パソコンでみんな整う冬装備

川西市　山口　不動
ここぞに負ける稀勢の里タイガース

奈良市　尾畑なを江
この頃のペーパー類のヤワイこと

奈良市　辻内げんえい
彼岸花異常気象に迷わない

大阪市　大川　桃花
立て板に水途中から聞き流す

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　３６６名）

「ロス」三浦強一選

消しゴムで消せる程度のロスですむ　吹田市　大谷　篤子
文庫本栞外れて読み返す　河内長野市　藤塚　克三
あの汗は無駄でなかった花開く　和歌山市　土屋起世子
議事堂に野次のとび交うロスタイム　寝屋川市　森　茜
ロスのないことが自慢の茄子の花　和歌山市　武本　碧
刀折れ矢は尽きロスはもう出来ぬ　鳥取市　夏目　一粋
ロスタイムは長生きをして取り返す　京都市　桝本　宏子
鯛一匹無駄なくさばく太い腕　京都市　三宅　満子
売薬を飲んで治らず医者へ行く　豊中市　江見　見清
積み上げたロスが美味しく生りました　東京都　川本真理子
勝ち越してあまりに長いロスタイム　奈良市　辻内げんえい
勝利の女神決め兼ねているロスタイム　高槻市　杉本　義昭
妻のパック無駄な抵抗だと思う　奈良県　渡辺　富子
まったなしロスタイムなし介護の手　大阪府　米澤　俶子
煮込んだら味が出てくるロスタイム　松江市　石橋　芳山

「ロス」長浜美籠選

ピカピカに女を磨くロスタイム　横浜市　川島　良子
ロス行って来たとお隣さん優雅　大洲市　花岡　順子
暇なとき母は雑巾刺していた　弘前市　今　愁女
食材のロスがないようひとひねり　神戸市　冨永　恭子
勝者には長く感じるロスタイム　三田市　多田　雅尚
消しゴムで消せる程度のロスですむ　吹田市　大谷　篤子
デモにゆく無駄な時間と言わせない　登別市　小林　碧水
人生のロスに効かない訂正判　吹田市　須磨　活恵
無駄という贅沢食べている電話　大阪市　栃尾　奏子
成せば成るロスでなかった粘り腰　明石市　糀谷　和郎
見栄張った財布を笑う熨斗袋　富田林市　関　よしみ
熟カバンたまにはいいさ遠回り　八王子市　川名　洋子
ロス重ねひと皮剥けて行く私　和歌山市　堀　冨美子
生き様の真価問われるロスタイム　尼崎市　藤井　宏造
ぶきっちょでロスを承知の花を買い　雲南市　菅田かつ子

あれこれのロスを肥やしにして米寿　香南市　桑名　孝雄
道草もロスでなかった人間味　枚方市　海老池　洋
ロスばかり膝ポンの句が出てこない　八尾市　前田　紀雄
ロスタイム走り続けた褒美かも　和歌山市　松尾　和香
もう一度引いた辞書にはロスはない　唐津市　仁部　四郎
尺取虫一歩一歩にロスがない　紀の川市　宇野　幹子
国防費ロスになるのを祈りたい　四條畷市　吉岡　修
ロス重ねみえないものが見えてくる　海南市　堂上　泰女
寄り道も無駄にはしない万歩計　高槻市　初代　正彦
行列の時間がロスでないグルメ　羽曳野市　吉村久仁雄
懸命に走るロスだと言われても　鳥取市　倉益　一瑤
ロス積んで積んで滋養として生きる　西宮市　亀岡　哲子
無駄という贅沢食べている電話　大阪市　栃尾　奏子
長すぎた昼寝あわてて米を研ぐ　三田市　上田ひとみ
居酒屋の息抜きロスと思えない　鳥取市　岸本　孝子
二日酔い想定内のロスである　松原市　森松まつお
体力のロス防ぐため動かない　堺　市　羽田野洋介
夫の料理ロスも多いが目をつぶる　富田林市　中崎　深雪
骨折りの損何度も越えてきた自信　大阪市　田中ゆみ子
今日のロスきっと明日のエネルギー　香芝市　大内　朝子
家族だもの悲しみ癒えぬペットロス　大阪市　磯島福貴子
猫カフェで心を癒すペットロス　豊中市　水野　黒兎
話し好きの人に会ったが百年目　加西市　金川　宣子

ロスの無い生活できる四畳半　堺　市　澤井　敏治
バーゲンがクローゼットで眠ってる　神戸市　山口　美穂
もったいないの気持が無駄を出させない　高槻市　片山かずお
神様のくれた余生だロス出来ぬ　南あわじ市　萩原　狸月
嘘ついたロス多かろうワーゲン社　池田市　上山　堅坊
まっいいか寝てばっかりの日もあって　犬山市　金子美千代
時間と金銭むざむざ使える頃は老い　西宮市　秋元　てる
ロスをした覚えはないが預金ゼロ　大阪市　升成　好
妻のパック無駄な抵抗だと思う　奈良県　渡辺　富子
後期でも好期楽しむロスタイム　三田市　上垣キヨミ
失敗の連続ロスとは言わせない　京都市　都倉　求芽
回り道わが人生にロスはない　奈良市　米田　恭昌
ロスになる願書きちんと書いている　佐渡市　髙野　不二
履歴書の誤字と脱字でロスにされ　大阪府　桑田ゆきの
今日のロスきっと明日のエネルギー　香芝市　大内　朝子
念の為ロスを覚悟でとる念書　唐津市　仁部　四郎
売れ残る程並べねば売れぬとは　堺　市　大隅　克博
愛しいと言われる時は過ぎ去った　防府市　坂本　加代
良い勉強だったとロスを口にせず　茨木市　藤井　正雄
寄り道も無駄にはしない万歩計　高槻市　初代　正彦
タイムロスまるで気にせぬ古希になる　弘前市　稲見　則彦
絶好のチャンスにまたも時間切れ　和歌山市　福本　英子
少しのロスもない母さんのスケジュール　八尾市　宮﨑シマ子

おしゃべりに私の時間盗まれる　富田林市　中村　惠
来し方のロスを数えて眼がさえる　奈良市　加門　萌子
五輪準備時間費用もロスとなり　藤井寺市　津田シルク
無駄金が使われている年度末　羽曳野市　永田　章司
少しのロスもない母さんのスケジュール　八尾市　宮﨑シマ子
道草で見つけた満開の花野　松山市　栗田　忠士
シュレッダー仕事のロスを切り刻む　笠岡市　藤井　智史
ロスタイムしっかり生きる為にある　紀の川市　楠原　富香
冷蔵庫の奥で鎮座の期限切れ　京都市　清水　英旺
バーゲンがクローゼットで眠ってる　神戸市　山口　美穂
いつの日かロスを肥やしに立ち上がる　和歌山市　上田　紀子
無駄骨と笑った人の上に立つ　唐津市　坂本　蜂朗
3・11ぽっかり穴が開きました　弘前市　高瀬　霜石
あれだけのロスを出しても再稼働　大阪市　江島谷勝弘
敗戦から学び平和な国づくり　札幌市　小沢　淳
先の先読んだ捨石今活きる　河内長野市　坂上　淳司
青春のロス取り戻す戦中派　豊中市　上出　修
紙屑の山で競えば直木賞　倉吉市　牧野　芳光
無駄足も重ね誠意に変えてゆく　大阪市　原田すみ子

秀　句

デモにゆく無駄な時間と言わせない　登別市　小林　碧水
蛇口ポトポト愚痴ばかりロスばかり　男鹿市　伊藤のぶよし
阿吽の息仁王のポーズロスが無い　大阪市　柴本ばっは

家計簿に時々用途不明金　西予市　黒田　茂代
ロスタイム生前葬の準備する　大阪市　佐藤　忠昭
ロスのない男で親友はいない　大阪市　井丸　昌紀
ストレートな物言い胸にどんとくる　西宮市　株元　玲子
ドライブをロスと考えたら老いる　松江市　相見　柳歩
売薬を飲んで治らず医者へ行く　豊中市　江見　見清
行列の時間がロスでないグルメ　羽曳野市　吉村久仁雄
秋風に触れるしばしのロスタイム　大阪市　津守　柳伸
お役所の予算はロスも見込んでる　堺　市　村上　玄也
あれこれのロスを肥やしにして米寿　香南市　桑名　孝雄
ロスばかり続いて秋が暮れなずむ　和歌山市　北原　昭枝
回り道ロスが人間丸くした　富田林市　山野　寿之
四捨五入なんだかロスをした気分　大阪市　柴本ばっは
ロスタイム珈琲二杯のんでいる　鳥取市　土橋　螢
寝過した兎あらたな夢を持つ　神戸市　奥澤洋次郎
猫カフェで心を癒すペットロス　豊中市　水野　黒兎
整備不良の五体を癒すロスタイム　豊橋市　藤田　千休
ロスのないあなたに惜しい人間味　生駒市　飛永ふりこ
大臣の机に届く陳情書　唐津市　山口　高明

秀　句

消えてなるものか情熱掻きたてる　三田市　久保田千代
ロスという味付けがある人間味　松江市　石橋　芳山
空飛んでいます私のロスタイム　鳥取市　福西　茶子

「くすぐる」

（投句　211名）

黒田　茂代　選

恋ごころくすぐるようないい出会い　倉吉市　山中　康子
そよ風に頬くすぐられやっと秋　豊中市　松尾美智代
里心くすぐられてはUターン　鳥取市　山下　凱柳
購入意欲くすぐる旬のコマーシャル　紀の川市　楠原　富香
ポイントにくすぐられては無駄を買う　米子市　生田　和之
レジ脇で買う気くすぐる特価品　豊中市　水野　黒兎
呼び込みじょうず閉店セールくり返す　男鹿市　伊藤のぶよし
三十分以内無料のコマーシャル　三田市　北野　哲男
くすぐりを入れて聞き出す社の人事　犬山市　関本かつ子
札束にくすぐられると弱い雑魚　鳥取市　岸本　宏章
おだてには弱い男で攻めやすい　香南市　桑名　孝雄
あなただけくすぐる声に負けちまう　大洲市　花岡　順子
くすぐるとおっちょこちょいは舞い上がる　河内長野市　梶原　弘光
くすぐったら待ってたようにマイク持つ　四條畷市　吉岡　修
ちょい悪のオトコに急所くすぐられ　八幡市　今井万紗子
寂聴のくすぐるような法話術　東大阪市　佐々木満作
旅雑誌海外版に誘われる　三田市　堀　正和
くすぐっておんな心をわしづかみ　富田林市　肥山　一文
リップサービスわかっていても心地いい　長岡京市　山田　葉子
自尊心くすぐる合いの手が憎い　和歌山市　武本　碧
くすぐる右脳左脳がまた動く　今治市　渡邊伊津志
妖怪がくすぐる子等の好奇心　明石市　糀谷　和郎
誉め殺しこんな手もある許されよ　宝塚市　太田としお
褒められて下りるはしごが見当らぬ　海南市　小谷　小雪
わたくしの急所くすぐる5カラット　尼崎市　清水久美子
くすぐられ良い夢みてたのはわたし　横浜市　川島　良子
ピリ辛のくすぐる効かす五七五　松山市　栗田　忠士
くすぐったぐらいで機嫌直さない　藤井寺市　太田扶美代
くすぐられ路傍の石が光り出す　大阪市　若本　安代
くすぐればまだまだ老いが背伸びする　高知市　小川てるみ
くすぐりが効いて大目に見てくれる　堺　市　村上　玄也
くすぐりにすぐに反応する脳だ　堺　市　矢倉　五月

佳　句

くすぐられ母性本能背伸びする　唐津市　坂本　蜂朗
八十のノーベル賞にくすぐられ　八尾市　山根　妙子
苦虫を噛んでわらいをこらえてる　弘前市　稲見　則彦
勘違いくすぐったいが言い出せぬ　藤井寺市　若松　雅枝
くすぐると男はすぐに走り出す　大洲市　中居　善信

人

自尊心くすぐりやすい場所にある　東京都　川本真理子

地

聞く耳をちゃんと持ってるから大人　弘前市　髙瀬　霜石

天

くすぐると笑う仕掛けになっている　紀の川市　辻内　次根

軸

くすぐりに弱い女ですぐこける

「日曜日」

（投句　212名）

小沢　淳　選

感性が錆び出す暗い日曜日　沖縄県　森山　文切
日曜日鉄砲玉に化ける妻　鳥取市　福西　茶子
育メンパパゆっくり出来ぬ日曜日　奈良市　加門　萌子
日曜を待って夫をこき使う　岡山市　永見　心咲
投句済むその日ばかりは日曜日　堺　市　内藤　憲彦
高い混む日曜避けて旅をする　三田市　村田　博
老父母の首長くなる日曜日　京都市　桝本　宏子
錦秋に日曜画家の筆の冴え　生駒市　飛永ふりこ
毎日が日曜日ならどうしよう　熊本市　杉野　羅天
孫が来てリズム狂わす日曜日　三田市　福田　好文
単身は手持無沙汰の日曜日　富田林市　山野　寿之
日曜が書き入れ時と小商い　河内長野市　坂上　淳司
ストレスを甲羅干しする日曜日　和歌山市　武本　碧
日曜日お出かけねだるペアルック　奈良県　渡辺　富子
日曜日いつも通りに腹がへる　三田市　九村　義徳
企業戦士がパパに戻った日曜日　三原市　鴨田　昭紀
日曜は外食 食器の休息日　青森県　松山　芳生
育児ママの辞書になかった日曜日　札幌市　斉藤　宏子
秋晴れに日曜画家のベレー帽　紀の川市　辻内　次根
日曜もせわしく動く介護の手　和歌山市　福井　菜摘

日曜の自給目当てに出るパート　犬山市　金子美千代
日曜も休むことないインスリン　横浜市　菊地　政勝
イベントへ翼をつける日曜日　弘前市　福士　慕情
新聞をまた読む雨の日曜日　橿原市　居谷真理子
日曜の息子待ってるコンバイン　大阪市　田中ゆみ子
日曜の散歩は違う顔と会う　出雲市　竹治ちかし
日曜の朝あれもせよこれもせよ　佐渡市　髙野　不二
ストレスが一番溜まる日曜日　松山市　神野きっこ
日曜は句と格闘をしています　海南市　堂上　泰女
家事育児まかされました日曜日　大阪市　柴本ばっは
腹減って起きてきました日曜日　西予市　黒田　茂代
妻の留守これぞほんとの日曜日　つくば市　嶋本　喬

佳　句

日曜日やっと人間らしくなる　倉吉市　岡﨑美知江
毎日が日曜になる認知症　宝塚市　太田としお
子に託びる日曜のない自営業　南あわじ市　萩原　狸月
単身に家族を思う日曜日　札幌市　富永　恵子
ご用達の飲み屋が開かぬ日曜日　香南市　桑名　孝雄

人

今日はいい日曜だった爪楊枝　弘前市　髙瀬　霜石

地

落ち武者になって日曜日が終わる　佐賀県　真島久美子

天

鍵っ子が母を離さぬ日曜日　和歌山市　上田　紀子

軸

毎日が日曜国の明日思う

「パック」

（投句　213名）

斉尾　くにこ　選

晩酌の向うにパックしたお顔　唐津市　仁部　四郎
退職後呑む酒全て紙パック　青森市　柴田　重虎
惣菜のパック並べたひとり酒　香南市　桑名　孝雄
手抜きとは言えない味のいいパック　鳥取市　池澤　大鯰
パックされ故郷納税が熱い　三田市　村田　博
要らぬもの多い歳暮の詰合わせ　池田市　奥園　敏昭
泥パック効いてレンコン真っ白に　池田市　上山　堅坊
こんな物までパック資源のない国で　犬山市　金子美千代
小間物も綺麗に包むおもてなし　三田市　多田　雅尚
パックには納まりきれぬ次男坊　和歌山市　上田　紀子
感動を旅の終りにパッケージ　大阪市　若本　安代
老老のパックなかなか行き場ない　羽曳野市　永田　章司
パックツアーおんなじ顔にまた出会う　岡山市　永見　心咲
パックしたお顔の違いわからない　大阪市　柴本ばっは
能面の妻やがて覆面になる　紀の川市　山東日出男
送り物野心ちらほらパックされ　大阪府　桑田ゆきの
パックづめ何か足りないような気が　東京都　川本真理子
まだ誰も気づかぬ恋をパックする　大洲市　中居　善信
パックして劣等感を隠してる　鳥取市　夏目　一粋
パックした話左の耳で聞く　鳥取市　大前　安子

安物のパックのようにゆるい意志　神戸市　冨永　恭子
効くならば弛んだ脳にパックする　倉吉市　中村　毅
真空パック少し信用しています　大阪市　古今堂蕉子
ダメージを受けた心にパックする　笠岡市　藤井　智史
遺言がパックされてる貸金庫　和歌山市　福井　菜摘
パックして笑い忘れた日が過ぎる　大洲市　花岡　順子
パックしてホラー映画の主人公　佐賀県　真島久美子
時々は仮面もパックしてあげる　高槻市　島田千鶴子
日を終えた顔にお礼のパックする　出雲市　竹治ちかし
近未来真空パック生き延びる　鳥取市　田中　天翔
アメリカとワンパック化が進む鬱　堺　市　内藤　憲彦
幸せな時間をパックして咀嚼　弘前市　福士　慕情

佳　句

賞味期限無事に迎えた非常食　四條畷市　吉岡　修
友情は不滅　紙パックのお酒　弘前市　髙瀬　霜石
一日を真空パックして眠る　羽曳野市　徳山みつこ
夢いっぱい詰めて児の背のデイパック　鳥取市　福西　茶子
愛された記憶は特別にパック　橿原市　居谷真理子

人

冷凍パック　ノルウェーの鯖チリの鮭　大阪市　田中ゆみ子

地

パックした幸せを紐解く深夜　京都市　桝本　宏子

天

パックから出ると生き生きする野心　和歌山市　武本　碧

軸

感動はパック　共有できるまで

初しぐれ教室

題 ― ストレート

山口光久

外来語を使った句が多くなりました。外来語を使うと句がハイカラになり、上手く表現できたと思う人も多いようです。

でも、本当の意味を理解して使われているか疑いたくなる事例もあります。文化庁は分り難い外来語は避けるよう呼びかけています。

「キャンセル」や「メリット」は殆どの人が理解していますが、「イノベーション」や「スキル」さらに「コンセンサス」「プライオリティー」など、あまり耳にしません。一般的に認知度が低い言葉は避けましょう。

【添削】

原 ストレートで敗けた相手が強過ぎた　秋　星

勝負事はアクシデントがない限り、強い方が勝つのです。単なる説明に終わっています。自分の気持を表現しましょう。

添 ストレートで負けた相手を褒めてやる

原 発言後しまったと思う顔出てる　尚　世

中八になっています。「顔出てる」は顔に出ている、でしょうが、助詞を省くと別な意味になります。

添 言い過ぎてあっしまったと顔に出る

原 直球で返してくるのは第一子　(高)弥　生

中八です。「返してくる」が、何を返すのかが分かればいいのですが。

添 ストレートに意見を交わすのは長子

原 ストレート投げたつもりが放物線　喬

下六になり、据わりが悪く、リズムも悪いようです。

添 直球が放物線を描く歳

原 ストレートに言えず悔しいほめ殺し　(高)道　子

「ほめ殺し」が良くないです。悔しい気持を素直に表現したら。

添 ストレートに言えずじだんだ踏んでいる

原 ストレート心にひびくプロポーズ　栄　子

上、中、下がばらばらな感じがします。順序を入れ替えてみましょう。

添 プロポーズ心に沁みるストレート

原 ストレートな話し通じる友がいる　(田)廣　子

「話し通じる」ではまとも過ぎます。

添 ストレートに嫌味を聞いてくれる友

原 その異見ストレートすぎやんわりと　登　子

添 ストレートすぎる異見の遠回し

原 正論を吐くストレート相手打つ　ミヨノ

下五が分り難いです。句の良し悪しは、下五が決め手と言われています。

添 ストレートに正論吐いて胸を張る。

原 まじめ過ぎたまにはカーブ言うてみて　清　司

「まじめ過ぎ」が冗長。下五が引っ掛る。カーブを投げてみて、ではどうでしょう。

添 単調を避けてたまには変化球

原 ストレートでない人生味がある　国　和

添 ストレートだけの人生味気ない

原 ストレート記憶の穴へ真しぐら　(富)恵　子

添 いやですね健忘症が真っしぐら

原 同体にストレートなる裁き待つ　勝　治

添 同体へ審判員の目が光る

原 ストレート口に出さない仲人さん　満寿恵

仲人さんは縁談を纏めるために、相手を褒め過大評価して伝えていたそうです。

添 仲人口ストレートには話さない

原 ストレート真っ向勝負男なら　英　男

添 ストレートで真っ向勝負押し通す

原 ストレート孫との会話目もすんで　開　子

添 ストレートな孫との会話曇りなく

原 ストレートばかりに胃などふくれ面　安　子

添 ストレートばかりで臓器不満顔

原 ここのままじゃストレート敗け策を練る　寧
添 このままじゃストレート負け策を練る
原 ストレートに言えばいいのに勿体を　(高)敬　子
添 ストレートに言わず勿体ぶっている
原 真っ直ぐに意見して来る友好きだ　紀美恵
添 ストレートに意見するのは無二の友
原 ストレートに世間渡ればい、のにね　(山)久　子
添 ストレートに世間渡れば鬼は出ぬ
原 直球が過ぎて失敗プロポーズ　由　美
添 直球で押して失敗プロポーズ

【少しの修正でよくなる句】

原 ストレートな言葉も人を傷つける　(見)温　子
添 ストレートな言葉が人を傷つける
原 まっすぐな言葉が刺さる嫁姑　ひろこ
添 ストレートな言葉が刺さる嫁姑
原 ストレートに言われて気づくにぶい人　忠　貞
添 ストレートに言われて気づく鈍な人
原 ストレート言っていい事悪い事　律　子
添 ストレートに言っていい事悪い事
原 ストレートだけじゃ夫を攻めあぐね　敏　昭
添 ストレートだけじゃ夫を攻めあぐむ
原 ストレート決められついて来たひと世　ゆかり
添 ストレート決められついて来た至福
原 ストレート彼方好きよで狼狽す　洋　一
添 ストレートにあなた好きよに狼狽える

【入選句】

思いやる気持ちはいつもストレート　重　利
ストレートに入り卒業ちと遅れ　亜希子
真っ直ぐな物言い出世妨げる　義　徳
直言は耳に痛いが心地よい　勝　正
直球を投げて青春ど真ん中　(前)洋　子
ストレート友の一言身にささる　(山)弘　子
ストレートにものを言っては悔やんでる　天　翔
辛口の直球受けて深い傷　(斉)宏　子
ストレートに言ったばかりに仲たがい　ひろ介
説教はずばり本論から入る　元　三
カーブ良しストレート良し日々平和　(今)廣　子
ストレートな父の生き様立派すぎ　福貴子
ストレートに「好き」と言われりゃ決めたのに　孔　一
表現がストレートすぎきらわれた　モ　モ
真っ直ぐに生きた証が背にある　忠　士
オイアンタそんな会話の老い二人　紀　雄
ストレートすぎて心が痛みます　きっこ
これでいいの曲らず来たね私達　(東)美智子
人間が正直だから裏読めず　泰　宏
率直に言うから角が立ってくる　(花)順　子
ストレートに伸びた胡瓜は嫁に行き　(畑)節　子
ストレートに言えば良いのに子の無心　こずえ
小さな指が真っ直ぐ昼の月を指す　のり子
ストレートそれでもピンとこない君　ゆかり
直球にひらりひらりと身をかわす　加　代

【佳句】

直球に慣れると読めぬ言い回し　心　咲
ストレート勝負を避けている奥手　智　史
ストレートに言って世間を狭くする　和　之
地球の怒り直球で責めてくる　(川)洋　子
好きですと正面突破したハート　狸　月

【今月の推せん句】

本心を素直に言えず石を蹴る　山下　純子

本心を素直に言えぬもどかしさ、そこいらの物でも蹴飛ばしたい気持でしょう。

ストレートだったあの日のアイラブユー　北原　昭枝

愛の告白なら、やっぱりストレートがいい。アイラブユーを連発したくなる心境。

正直な意見をラップする会議　吉川ひとし

正論はとかく嫌われるもの。特に、会議では黙殺されがちです。

【私の句】

ストレート勝負でいつもどじを踏む

平成二十七年度初歩教室年間賞

大根の白さに迷いふっ切れる　和歌山市　北原　昭枝
すいすいといかぬ浮世の立ち泳ぎ　八王子市　川名　洋子
ただいまの弁当箱は舐めたよう　南あわじ市　萩原　狸月

川柳塔鑑賞

同人吟　中居善信

―11月号から

吠えるのはやめて噛みつくことにする

高瀬霜石

原発反対を叫んで吠えた事もある。勿論戦争反対は言うに及ばずである。

敵があまりにも遠い所にいるものだから吠えるだけになるのだが、手に届く所なら僕も噛みつく。吠えただけで終わったのだが、安保法反対のデモを見てホッとしている。まだ日本に良心があると。

定位置にハサミがあってホッとする

木本朱夏

人間加齢とともに物忘れが増える事は仕方ない。僕の妻は目が不自由だから物の置き場所は同じとこに決めている。決められた場所に決められた物がある、それなら忘れる事はない。

この句はそれを言っているのではない、政治であれ普段の生活であれ、今までどおりの暮らしのリズムが変わらない方がホッとすると言っている様に聞こえる。

今はもう紫煙にロマンなどは無い

森山盛桜

古い映画を見ていると、やたらと煙草を吸うシーンに出会う。それを演じる俳優も女優もなんともいえぬムードを持っていた。鬼平がキセルでのむ煙草も見事である。吉田茂の葉巻も絵になった。

その煙草は社会悪として葬り去られた。癌になるリスクをお医者はくどくどと説く。本当は僕も煙草を吸いたいのだが、ガンやってからは辛抱をしている。

スローボールしか投げられません

三好専平

これは人間の生きざまであろう。勿論加齢による力の衰えを指してはいるが。

人間の生きざまと見るほうが絵になる、人それぞれに性格の違いがある。人それぞれに生きざまの違いがある。スローボールしか投げられない穏やかな性格の持ち主ならば人望があろう。

口数は少ないけれどお喋りだ

谷口義

口数の多い妻と住んでいると、また同じ事を言っていると聞き流す、ときどきそれに気づいた妻が聞いてくれないとむくれる。口数の多い女も言っていい事、言ってはならない事との判別はしてる。

無口な男が言ってならない事を漏らす。

実篤と向き合うあったかい部屋だ

吉田陽子

村上春樹さんがノーベル賞を受賞出来るのか日本中が固唾を飲んでニュースを見ていた。結果はベラルーシのアレクシエービッチさんに決まった。チェルノブイリ原発事故で被害を受けた人々の証言を集めたノンフィクションだったと言う。それはどうあれ、僕は若いころ実篤を読みふけった。あの作家の持っている暖かさは例えようのないムードがある。実篤の本が沢山ある部屋なのであろう。

核ゼロはそんなに無理なことですか

岩佐ダン吉

愛媛の伊方原発も再稼働の方向で決着しそうだ。勿論出来レースではあった。原発も原爆も負の遺産ではある。

歩を一ついつも握って離さない

川端　一歩

一時期将棋に凝った事がある、田舎初段と言われていた。詰め将棋の二級なら解けた、一級は解けなかった。将棋を指した人は皆知っている事だが、攻められたとき歩一枚あれば何とか凌げる。だから一歩さんは何時も歩を一枚持ち歩く。歩の無い将棋は負け将棋と言うじゃないか。

十歳の少女に戻る終戦日

指宿　千枝子

終戦日には何時も思う、学校の上のお宮の庭で聞いた玉音、七歳の僕に理解の出来る言葉では無かった。先生はみんな泣いていた。だが結果的には負けてよかったと思っている。総理がどう言おうと、侵略に間違いないのだから。

淋しくて鬼の笑顔について行く

安芸田　泰子

コンビニの鬼の笑顔について行った少女、地下街の鬼の笑顔を信じた男の子、笑われるか。人と人との繋がりの薄れた社会、そうだろう、僕たちの少年時代には人を騙すなんてのは一番の恥だった。振り込め詐欺に合うのは淋しい人なんだよ、きっと。

ネックレス一つ残して娘に譲る

若松　雅枝

加齢とともに欲も薄れる、物事に執着心が薄れる。タンスの背広見ながら思うんだ、もう着ることもない服かも知れないと。だれか合う人があればあげるのにと。お葬式のネックレス一つあれば事足るからみんな娘に譲られた。

いい里だ子等が泣いてる笑ってる

糀谷　和郎

昔、七十戸の村にクラスメートが二五人いた。過疎化が進み現在は四〇戸のむらになって子供の声もニワトリの声も聞こえない。TPPで又むらが痩せる。政治の不作だとは思う。子が泣いているのも笑っているのも夢なんだよ。希望なんだよ。

喧嘩にも程を知ってた昭和の子

谷川　憲

刺した、殺した、苛めたのとニュースになる。子供の言動に暖かさが見えない、自分中心の社会しか目にない子供。

僕たちの少年時代には芋一つさえ分け合って食べた。仮に取っ組み合いの喧嘩をしても怪我はさせない掟があった。

両親のいない故郷の柿の木よ

古久保　和子

両親が居なくても兄が居ればいい。法事には帰れる。義姉だけになると尚更疎遠になる。帰郷した妹がぽつりと言った。

「大きな柿の木だと子供のころ思っていたんだが、そんなには大きくないんだね」と。

野良猫の方が綺麗に見えてくる

牧野　芳光

猫も人間も同じ飯を食っていた昔。犬も同じだった、ウンチもシッコも外でするもの、これが普通だった。鈴付けて着物を纏った猫なんて絵にもならない。芳光さんはそう思ってる。

失言は取り消せば済む永田町

平田　実男

先の安保法の審議に総理や大臣が失言や解釈の違いを何度も取り消した。数は力が罷り通るおかしなとこだ。

意地が無くなった元気も無くなった

古手川　光

光君、笑ってしまった、同い年だから良く分かる。昔は意地でも妥協しなかった。ならば任せておけと、元気があった。光君歳だよ歳、だがまだ死ねん、まだ死ねん。

水煙抄鑑賞

—11月号から

渡辺富子

幸せは秋刀魚を二匹焼いている

中山春代

猛暑の続いた夏、やっと秋風が吹き、秋刀魚の季節。ジュージューと焼く秋刀魚を夫と食べる幸せ、最高ですね。秋刀魚二匹がこころに滲みる。

じっくりと口説いた人が側にいる

小出修三

会った瞬間ビビッときてこの人に決めた。これはとても危険。じっくりと何度も何度も口説き結ばれた二人は、ゆるぎない愛で結ばれていることでしょう。

葬式の帰り明日のパンを買う

平井美智子

親しい人の葬儀に参列し、悲しみに涙する。命のはかなさに打ちのめされる。それでも生きている私は、明日のためのパンを買う。ペーソスを誘う。

夜があけたらなかったことにするつもり

田中ゆみ子

何があったのでしょう。いろいろ想像力をかき立てる。明けない夜はないのだと、他人は軽く言ってもそう簡単ではない。なかったことになるなんて。

一本の鉛筆がある夢がある

田中恵

美空ひばりの歌に「一本のえんぴつ」という反戦歌がある。鉛筆は心のひだに寄り添い、喜怒哀楽を発言してくれる。限りなく広がる夢に寄り添いながら。

いろいろありましたので分骨で

三谷松太郎

「あの世まで一緒なんてこりごりだわ」と奥さんが言うのをよく聞く。御主人から望まれるとはショックです。百人寄れば百人のいろいろがあるのですね。

内緒ですいつに咲くかは君次第

柳田白沙

誰もが自分色の花を咲かせて生きている。妖艶な香りを放つ大輪のバラ。控え目に咲く野の花。私が咲くのは、何色でどんな香りを放つかはみんな内緒。君次第で咲くのは確かなんです。若いなあ。

私より真面目なんです洗濯機

佐々木勇

全自動の洗濯機が故障した。給水、洗濯、乾燥の流れが指定通りに動くはずがネジ一本でアウト。私なら少しごまかして動けるのに。本当に真面目なんです。

アメひとつ上げて隣と出た会話

坂上のり子

大阪のおばちゃんの必需品は、アメです。アメひとつで会話も弾み、仲良くなれる。でもシドニーでもアメですか。最高の親善大使になれるアメに乾杯。

喧騒の街でひとりのにぎり飯

藤後卓也

我武者羅に働き、やっと悠悠自適を謳歌している。そんな時ふと昔が恋しくなる。せかせかと行き交う街で、妻の作ったにぎり飯にかぶりつく。

素晴しい彩を背負ってゆく夕陽

大峠可動

人生の黄昏を夕陽に重ね、スケールの大きさを感じる。命をかけて頑張ったことが、脳裏をかすめる。そのもろもろが素晴しい彩を放って、夕陽と合体していく。充実した人生に感謝しながら。

60 発表誌を楽しむ（1）

第三回の「春の川柳塔まつり誌上大会」は、今年二月二十日締め切りで、その結果は五月号に掲載されました。

応募されていた皆さんは、「さて、私の句は?」と、期待を込めて五月号を開かれたことでしょう。そして、自分の名前と作品を見つけたときの嬉しさは格別。大会で選者の披講を聴くのとはまた違った感激があります。しかし、何ページ捲っても出てこなかったときはガッカリで、他の人の入選作を見る気まで失せてしまうかもしれません。

しかし、応募料を払っているのに入選作に目を通さないのは勿体ないことです。何ヵ月後でも結構ですから、諸作品とゆっくり向き合ってください。作品に目を通すときは誰の選に対しても先入観を持たず、公平無私であること。チェック用の鉛筆を持つとより集中力が増します。

読みはじめるのは、平抜の最初からでも、いちばん後ろの秀吟からでもかまいません。要するに、読み飛ばさないように、一句ずつ丁寧に読んでゆきます。

そして、「これは凄い!」とか「いいな!」と感じた句の頭に◎とか○印。「つまらない」と思った句には×印、「分からない」句には?とか、自分流に印を付けながら読み進めます。もちろん、何も感じないものには印を付けません。

このように、その時に感じたことを簡単な印で残す作業は作品に向き合う力を増してくれます。楽しみながら、無意識のうちに選句力を養っているということでしょう。

先ほど「つまらないと思った句には×印」と述べました。入選作の中にそのような作品が混じっていてはいけないのですが、ベテランの選者であっても神様ではありませんから稀にはミスもあるでしょう。また、川柳観の違いによって、その良さが理解できないこともあります。そのようなことも、印を付けることによって、何年か先に再読したときに「ああ、そうだったのか!」気付かされることがあります。

冒頭で述べた誌上大会の課題「来る」は、津田暹さんと私の共選でした。その入選句の中で二人共が抜いていたのは左の10句。（チェック漏れがありましたら、お報せください）

共選で二人の選者から抜かれるのは至難のことです。改めて皆さんに拍手を送ります。課題「ポーズ」と「雑詠」でのダブル入選の句は来月号の本欄でご紹介いたします。

春はもうゼブラゾーンの辺りです　美馬りゅうこ
敵が来る花も活けたし刃も研いだ　中村　吉範
朝が来たことが嬉しい磨硝子　三浦　蒼鬼
草食獣も肉食獣も来る泉　吉崎　柳歩
ヨーデルの音符で春がやって来る　三島　淞丘
竜巻も恋も突然やって来る　橋倉久美子
ピケティも時代の潮目告げに来る　荒川　鈍甲
来るものは来るひげを剃る顔洗う　宮本彩太郎
相談はショートケーキと共に来る　山本　昌代
ノックする貧乏神のストーカー　飛永ふりこ

さて、第四回「春の川柳塔まつり誌上大会」の要項が発表されました。締め切りは来年二月二十日です。皆さん、また気合を入れてチャレンジしてください。期待しています。

『麻生路郎読本』余滴 (32)

「矢車」と路郎作品 ⑭

桒原道夫

「矢車」を川柳家以外の文人に送付していたことは、「余滴」(22)で若山牧水、(24)で相馬御風・服部嘉香について記したが、「湯の村」五八号（昭和12年4月）の「矢車回顧二三」で、荷十は次のように述べている。

〈矢車黨としての私共は新傾向の大旆を押立てた以來文壇の批判を仰ぐために、當時の文壇諸家に矢車を送呈した。今發送名簿を出して見ると、＊1抱月、孤雁、御風、天弦、夕暮、有明、牧水、哀果、啄木、白秋、露風、蘆風、嘉香其他の諸氏の名が見出される。以上の諸氏の内相馬御風氏は「豐川町より」といふ想感を、服部嘉香氏からは「短詩形の効果」といふ論文を寄稿せられてゐる。昨年本誌記念號に載つた、若山牧水氏と土岐哀果氏の論戰も畢竟矢車に關心をもたれたことに起因してゐる。當時＊2秋元蘆風氏からも近く寄稿するとの御手紙を頂いて居たが、永續刊行が出來なかつたので、遂にそれを拜見するに至らなかつたことは殘念である。〉

＊1 御風・嘉香の略歴については、「余滴」(24)で紹介した。ここでは、他の文人について簡単に記しておく。

・島村抱月（一八七一―一九一八）文芸評論家。
・戸張孤雁（一八八二―一九二七）版画家。
・片上天弦（一八八四―一九二八）文芸評論家。
・前田夕暮（一八八三―一九五一）歌人。
・蒲原有明（一八七五―一九五二）詩人。
・若山牧水（一八八五―一九二八）歌人。
・土岐哀果（一八八五―一九八〇）歌人。
・石川啄木（一八八六―一九一二）歌人。

「湯の村」七二号（昭和13年6月）の荷十「凡人居より」に、〈殊に珍しいものは「樹木と果實」といふ短歌の雜誌の照會に對して、石川啄木氏から自筆で「初號は私病氣のため土岐君一人でやつてゐるのでさうしてこの二三日何のたよりもなかつたので、お返事を出しかねてゐました」云々といふのがある〉とある。

・北原白秋（一八八五―一九四二）詩人。
・三木露風（一八八九―一九六四）詩人。
・秋元蘆風（一八七八―一九六四）詩人。

＊2 「矢車」三〇号（明治44年10月）の「編輯より」に、〈次號には秋元蘆風氏から寄稿がある筈。尚追々諸大家から寄稿を御願ひする〉とあるが、「湯の村」七二号（昭和13年6月）の荷十「凡人居より」に、〈矢車當時交渉のあつた文士秋元蘆風氏から「何か拙稿相試みお目に入れ申度存じ居候處合憎當地第六高等學校へ轉任のことと相成思ひながら意を果さず失禮いたし候」といふ葉書もでた〉とあり、三一号には間に合わなかった。そして三一号が終刊号になってしまったので、蘆風の原稿が「矢車」の誌面を飾ることはなかったのである。

筆者は、余滴(24)の相馬御風「豐川町より」で、〈川柳詩――貴兄等（筆者註―「川柳詩」は中島紫痴郎の造語なので、「貴兄」は紫痴郎を指し、紫痴郎宛てに送られた原稿であると思われる）〉と記したが、「貴兄」は、

文人に「矢車」を送付していた森井荷十であることが明らかになった。お詫びして訂正しておく。

「矢車」は三一号（明治44年11月）で廃刊したが、荷十は「湯の村」四六号（昭和11年4月）の「凡人居より」で、次のように述べている。

△矢車の廃刊の決心をした私は廃刊の已むなき事情を涙ながらに書いた記憶がある。それから私の潔癖から誌代の残りは僅かに五錢でも三錢でも返戻したので、サツパリした氣持になつたことを覺えてゐる。もう三十年に近い昔のことだが私の生涯のうちで最も忘れ得ないものだ。君（筆者註―紫痴郎のこと）も同様に思つてゐるだらうと思ふ。湯の村が矢車二世として今日發行されてゐるのは、力強い氣がする。切角御自愛なされて、柳壇の爲めに盡くして下さい。

△矢車發刊に對して諸家から賜つた書翰の二三を御覽に入れる。

矢車廃刊と諸家の通信（その一部）

覺悟はしてゐたが、廃刊の通知に接した時は暫時呆然とした。名残惜しかつた。君の精神もよく表はれてゐた。一朝一夕の文體ではなかつた。それが如何にも悲しかつた。（後畧）（淺井五葉）

「矢車」儀今度御廃刊の由小生葉柳以來唯一の樂みとせし矢車の事とて詩壇寂寞の際一入殘念に存候（後畧）（齋藤松窓）

矢車の廃刊に就ては何も言ふまい。只ひそかに來るべき運命だと思つて居た事が愈到來した丈けの話だ。

僕は矢車の廃刊した事は決して悲まない。只其吾等が遂行した努力を悲む。誠に君孤燈に端座して過去の矢車を繙き給へ。其處に吾々の血を絞つた苦しい努力がある。矢車の過去號は吾等に思ひ出の涙ならざるはないだらう。少くとも五葉と僕は泣くよ。君。（天津にて　川上生）

また、「湯の村」八二号（昭和14年4月）の「凡人居より」で、次のようにも述べている。

▲先夜陸軍記念日（筆者註―3月10日）に私設展覽會を催す計劃から所藏の日清日露戰役の錦繪其他を探した際、偶然に「矢車」の創刊のハガキと「川柳道場」が數冊と、謄寫版刷の「矢車の廃刊」の通知書が現はれたので今日は是等について語らして貰ふことにした。

▲ハガキには川柳雜誌「矢車」（毎月廿日發行一部金五錢）右は我等川柳界の機關として專ら古川柳研究を主として傍ら邪川柳を驅逐するの目的を以て發行す御賛助を仰度候とある。當時堂々たる柳誌が多數發行されている斯界に、邪川柳驅逐など、叫んだ意氣は凄じいもので懐しく思はれる。

（「川柳道場」の部分略）

▲矢車廃刊の通知には『矢車は廃刊いたしましたが、矢車が最後まで提唱した事業は是で終つたのではありません、私は諸君と共に益々短詩の爲めに又藝術の爲めに努力したいと思ふの念は常に忘れはいたしません』云々とある。今日幸に「湯の村」があつて當時の私の心持を提唱して下さるのを厚く感謝してゐる次第である。

「湯の村」四六号で荷十が述べている「廃刊の已むなき事情」とは、はたしてどのような事情だろうか。

（次回に続く）

（投句212名）

右に傾き、左に傾く、そんなヤジロベエのような今回の図柄です。

そのものズバリ、どんぐりと詠んで下さった句も多くありましたが、あれれ、これがこうなりましたか、と驚かされる句もまた沢山あって、どんどん拡がっていく空間を必死で追いかけさせて頂きました。

それでは楽しいひとときを…。

大阪市　高杉　力

今日は左派昨日は右派と飲んでいた

（評）《人類は悲しからずや左派と右派》と路郎師は詠まれたが、力氏の和気ある風情もまたよいものです。

貝塚市　石田ひろ子

過疎になるチロリン村のPR

（評）世はすべてPRの時代と言えますが、あのチロリン村でさえ過疎の波が押し寄せているとは…。

沖縄県　森山　文切

トモダチが重たくなっているんだろ

（評）カタカナで書かれた〈トモダチ〉は、かけがえの無い存在というより、仮止めで取り替えがききそうに思えます。

豊中市　水野　黒兎

芸人か作家か揺れている名乗り

（評）あまり大きな賞を取ってしまうと後々が大変ではないのかしら、なんて思うのは決して野次馬根性ではありません。

富田林市　片岡智恵子

化粧室女の私語の二つ三つ

（評）〈女の私語〉がちょっとコワイですねぇ。化粧室とか給湯室とか、ウワサ話も三つ以上はありそうに思えますが。

鳥取県　斎尾くにこ

義務と権利十八歳がゆれている

（評）だいじょうぶか十八歳、なんて叫びたくなりますが、それは自分がトシを取った証拠でしょうかねエ。

大阪市　笠嶋　恵美

めちゃくちゃに楽しく行こう冥土まで

（評）本当にこうありたいものです。大笑いしながら冥土に着けばエンマ様だって即天国へどうぞ、なんて言われそう。

藤井寺市　太田扶美代

均衡がとれなくなった自尊心

（評）自尊心は無ければつまらないし、あり過ぎても厄介。どちらに傾いてもつらいこと結構あります。

紀の川市　辻内　次根

故郷が呼んでいるから帰ろうか

（評）帰る故郷があるならよかろう、なんて言葉か歌か、むかーし聞いたように思います。望郷の念、泣かされます。

鳥取市　倉益　一瑤

オットット銭に傾いてはならぬ　高知市　小川てるみ

素敵でしょモンローウォークしているの　大阪市　藤田　武人

売れに売れ桶まで売れた金魚売り　香芝市　大内　朝子

人間の心に潜むヤジロベー　横浜市　川島　良子

ウインクにバランス崩すお父さん　堺市　矢倉　五月

また嫁の実家へ足の向く息子　大阪市　榎本　舞夢

二股の恋見つかって逃げ出した　米子市　八木　千代

可愛いのよね毒を含んだキノコほど　吹田市　須磨　活恵

どんぐりのドローン人里見学に　橿原市　居谷真理子

絶好調右脳左脳が冴えわたり　寝屋川市　森　茜

目の前にぐんぐんせまる終電車

芦屋市　黒田　能子
決着がやっとついたかＴＰＰ

西宮市　足立　茂
羽根が取れ慌てて拾うカブト虫

三田市　東内美智子
公園のシーソーの下よく御覧

松江市　石橋　芳山
お前ならどうする俺も分からんな

三田市　今西　廣子
力点を探して居ます妻と母

弘前市　髙瀬　霜石
へべレケのへべのあたりでやめにする

八尾市　高杉　千歩
欲張ってみたが二つはとても無理

大阪市　石橋　直子
片寄った食事サプリでバランスを

唐津市　仁部　四郎
東経も北緯もボクの時の運

鳥取市　山下　節子
白黒をつけたがるのが悪い癖

三田市　多田　雅尚
寅さんのように生きたい事もある

堺　市　澤井　敏治
恐いなあ核のつり橋渡るのは

和歌山市　磯部　義雄
飲み過ぎてゆらりよろける山頭火

橋本市　石田　隆彦
両袖を振っても何も出てこない

尾道市　大本　和子
釈明に追われ中間管理職

鳥取市　夏目　一粋
泣いたって好転しないから泣かぬ

四條畷市　吉岡　修
日本の平和なんだか怪しいぞ

奈良県　安福　和夫
今になり母の苦労がよく分かる

西脇市　七反田順子
もくもくと食べて歩いて迷子札

大阪市　津守　柳伸
ユニークさ競う案山子の村祭

枚方市　海老池　洋
日本の両手に少子高齢化

弘前市　稲見　則彦
人生はこんなものですおっとっと

羽曳野市　中川ひろ介
自販機のコイン転げた吹き溜り

三田市　足立つな子
胃カメラと歯の検診とこなす日々

青森県　松山　芳生
生真面目に生きた男の職探し

堺　市　遠山　唯敎
古里へこころが揺れる老いふたり

神戸市　山口　美穂
どちらでもよかった遠いとおいこと

富田林市　中村　惠
バランスを上手にとった母の采

河内長野市　大島ともこ
志す有機農業楽じゃない

三原市　鴨田　昭紀
勝ち組の方へ傾く生き上手

神戸市　能勢　利子
持てるだけ米をもらった里帰り

西宮市　緒方美津子
天高く組体操を考える

八尾市　新海　信二
別姓も愛の重さは同じだね

河内長野市　木見谷孝代
天秤棒かつぎ昭和の小商い

和歌山市　古久保和子
欲の皮に足を取られることばかり

玉野市　片岡　富子
溢れない一生分の砂時計

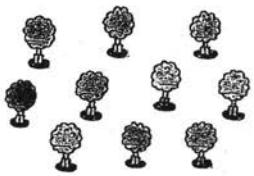
大阪市　平井美智子
天秤のこんなところに父と母

倉吉市　山中　康子
上出来も不出来もみんな私の子

神戸市　松井　文香
秋に落ち春にはきっと芽を出すぞ

河内長野市　梶原　弘光
ひょいひょいと地雷を避けて水運ぶ

２月号発表
（12月15日締切）



柳筥に２句

民族の詩歌 (41)

都都逸

三好専平

〈いやなお方の来るその朝は　77
三日前から熱が出る　75

〈惚れて通えば千里も一里　77
逢えずに帰ればまた千里　75

ぐっと趣向を変えてお座敷唄を取り上げてみたい。7775のかたちを基本とし、三味線の爪弾きと共に歌われた、江戸時代後期の、比較的新しい唄である。しかし、75調を基本とする点では、リズム的に平安時代の古今、新古今の流れを汲むものである。

江戸時代には端唄が長唄とともに流行した。天保年間（1831～）に三味線が贅沢として禁止され、約十年間庶民の間から姿を消したが、すぐに復活する（歌舞伎では認められた）。小唄は端唄から派生したもので、これが分化して、清元、常盤津、義太夫、新内となる。

都都逸坊扇（1804～1852）によって大成されたと言われる。幇間や芸者によって主として戯れ歌われたものであろうか。遊里の歌である。すこしそれるが、大阪に唯一のお茶屋が南に残っているというが、ここでは、お座敷芸を売り物にするので都都逸も歌われるのだろう。四畳半にはうってつけの歌である。

美空ひばりの『車屋さん』にも挿入されている。米山正夫作詞作曲。

〈人の恋路を邪魔する人は
窓の月さえ憎らしい

臨済宗、中興の祖と言われる白隠は、この詩形で禅の教えをわかりやすく説く。

『草取り歌』より

〈草を取るなら根をよくきりやれ
またと遺恨をはらしやる〉

遊里や仏堂にかかわらず、広く庶民の間で歌われていたと思われるが、そのサワリの部分だけを日常的に会話に挟み込んで楽しんだものと思われる。地口や駄洒落が大いに流行った時代である。封建社会のうっとおしい気分や生活をみんな紛らわせて生きてゆくほかはなかったのであろう。落語も江戸時代になって生まれた芸である。また、相手を誑かすのを「三味線を弾く」というのも、遊女のあられもない嘘から出たのだろう。

誰にでも、年をとっても、片恋というものがあって

〈恋に焦がれてなく蝉よりも
鳴かぬ蛍が身を焦がす

お邪魔さんでした。

本社 十一月句会

◇十一月六日（金）午後一時
アウィーナ大阪

深まりかけた秋が少し足踏みしている6日、十一月句会は百二十名（投句八名）の参加で開催。初参加は大阪市の舟木シゲ子さん。

今日のお話は米田恭昌氏。氏が平成十三年に二回に渡って紹介された中村天風師の健康法や、アンチエイジングの実践方法（教育と教養のすすめ—今日行く所がある、今日用事がある—）で始まったお話は、卓越した省略からなる日本の短詩文芸の魅力を絶賛した海外の文豪の言葉を例に出されて、川柳のすばらしさを再確認できたこと。「王将」の替え歌で、川柳にかける思いを薫風師に伝えることができた喜びへと広がった。

「アカシアの雨が止むとき」をこよなく愛し、雨がよく似合う薫風師のお姿（写真）を拝見して、改めて川柳塔を支えに師への思いを深く胸に刻みつつ、お話を聞き終えた。（眞澄）

月間賞は居谷真理子さん（橿原市）に輝く。

（司会—蕉子・真理子）（脇取—㈥五月・すみ子）

（受付—寿之・万紗子（清記—勝弘）

席題「溝」　山﨑武彦　選

勘当の確執埋めた呱呱の声　富子
ころがったコインが取れぬ溝の蓋　すみ子
LPの溝に生きてるビートルズ　まつお
一言が溝の深さを倍にする　英夫
愛のかけらの詰まった溝を掃除する　進
側溝に何故かつっこむ癖がある　良子
跳びこせる溝だとずっと思ってた　能子
二つ返事してから溝が深くなる　万紗子
深い溝もうこのままで行きましょう　良子
新参は溝掃除から輪に入る　憲彦
アメリカを向くと埋まらぬ基地の溝　則彦
上品なひとだ溝蓋ふみません　瑠美子
溝は浅い私だけが思っていた　美智子
レコードの溝青春の日の疼き　美智代
溝板をしっかり踏んだ跡がある　よしみ
小さい花こんな日陰の溝にさえ　真理子
人間のヘドロが詰まる溝に蓋　寿之
日中韓表面だけは埋めた溝　一歩
もう三日妻と私の無言劇　好
跳び越えてみればなんだと思う溝　能子
ダブルベッドに背中合わせの深い溝　進
妻との溝ときどき埋めにフルコース　洋
あなたとなら飛びたい溝があるのです　信子
これ位と思った溝にはまり込む　忠子
じんわりと他人になっていく溝だ　弥生
アリガトウと言えば溝など消えていく　耕治
生まれつきシャイで垣根と溝が好き　完司
握手して消える程度の溝やった　ダン吉
顔の皺溝になるほどした苦労　玄也
おつき合い溝は作らぬ主義で生き　順子
一人では越えれぬ溝を飛ぶ二人　冨美子
自分史の溝で秒針引っかかる　心平太
最後尾渡ると溝が消えていく　郁夫
選挙前すぐ溝埋まる野合癖　誠一
溝蓋を踏んで長屋の朝が来た　修
趣味ひとつ溝にはまって抜け出せず　㈥寿子

佳

隣近所シニアばかりの溝掃除　俶子
俎板の溝が知ってる母の味　宏造
美しい溝に浮いてる偽証罪　美子
夫婦の溝熱いうどんが橋渡し　シマ子
足らぬ杭溝がだんだん深くなる　妙子

人

溝埋める電話女にかけている　完次

地

あなたの罪溝板になり被ります　紀華

天

溝の底さらえて露見政活費　篤

軸

どぶ板を踏んで大阪秋の陣

兼題「手品」　栃尾　奏子　選

よく言うよタネも仕掛けも無いなんて　いさお
ロシアの一機マジックかテロなのか　半蔵門

マジシャンが戦地へ飛ばす白い鳩　留里恵
ワンツースリーきっと賢い鳩でしょう　わこ
女房はマジシャン万札ぽいと出す　英旺
乙姫の手品と思う玉手箱　洋
うさぎ出し鳩出し腹で舌を出す　英旺
あら諭吉手品の様に姿消す　哲男
手品だな古希を迎えてパパになり　篤
無くし物手品のようにぽっと出る　忠子
種明し妻の実家がお金持　としお
手品師に十九のわたしアンコール　万紗子
仲人は手品のうまい人だった　蕉子
夫婦やもん種も仕掛もありますわ　眞澄
ママのハグ手品のように不安消す　朝子
冬支度妻は手早やく衣替え　忠昭
母帰宅手品みたいな夕御飯　美籠
さしすせそ母の料理は手品です　瑠美子
縺れ糸母にかかればすぐ解ける　賀世子
ちちんぷいぷい祖母のまじない良く効いた　哲子
母さんと同じ手品をしています　耕治
土は手品師どんな色にも花咲かす　好
紅ひけばやがて私は魔女になる　良子
ビビッとくる恋のマジックかけた月　富子
胸の中手品のように君が棲む　すみ子
恋人は手品師こころ掴まれた　瑠美子
エンゲージリング手品のようにはめられた　理恵
秋風が優しく恋を実らせる　良子
手品師の斜め後ろは隙だらけ　朱夏
手品師の裏の時間を見てみたい　一歩

真実と嘘のカードを繰っている　真理子
手品師も人間だなとふと思う　則彦
手品師の指の先から降る落葉　朱夏
最高の手品苦虫笑わせた　留里恵
やりくりのネタは姑から盗む　久美子
ノーベル賞最初は誰も信じない　博
ニュートリノタネも仕掛けもありません　勝弘
佳
手品師に貸した指輪が戻らない　武彦
ハンカチひらり鬼一匹を解き放つ　賀世子
天地創造は神様のマジック　満知子
壮大な手品地球が浮いている　冨美子
秋は手品師山を錦に染めあげる　かずお
人
手品師のように回遊鮭戻る　敏治
地
蓮根の穴から妻が愛を出す　心平太
天
悩みごと食べたら消えるマジックだ　ばっは
軸
フォールインラブ秋の手品にかけられる

兼題「煙」　田中　章子　選

SLに乗りに新幹線で行く　保州
煙突が無くてもサンタちゃんと来る　キヨミ
二枚舌三枚舌で煙に巻く　准一
湯けむりの中人違いしてしまう　紀乃
湯煙に揺れる露天の月掬う　六点

湯煙にストレス吐いた二人旅　宣子
お風呂屋の煙が消えて五十年　忠子
湯煙の中へストレス溶けてゆく　いさお
秋刀魚には栄養あるぞと又秋刀魚　忠昭
隣松茸うちは秋刀魚の煙立つ　賢子
真っ直ぐな野焼きの煙秋日和　正和
古手紙焼けばピンクの煙立つ　楓楽
美しい煙で骨になりたいな　まつお
煙だけたって噂はまだらしい　六点
青空へ父の煙に迷い無し　留里恵
美しい明日を夢見ている野焼き　蘭幸
反戦の狼煙を上げている辺野古　(柿)和夫
大丈夫白い煙の出るうちは　能子
迷惑な煤煙知らん顔の国　修
硝煙の匂う両手で聖書抱く　武彦
出来るかぎりのことはしますと煙に巻く　憲彦
その先を聞きたい仏壇の煙　廣子
金よりも凜としている燻し銀　美津子
また君は言いたいことを言ったきり　ひとみ
私を焼く煙まっ黒かも知れぬ　楓楽
病院に喫煙室が今もある　宏造
物書きの紫煙がペンを走らせる　満作
まだ煙草吸ってるのかと聴診器　玄也
煙草の火借りた昭和がほろ苦い　朱夏
足してみる五十年の煙草代　ひろ介
もう少し生きます煙草美味いから　博
機関車の煙が若き日の旅情　茂
あれやこれ煙に巻きつつ老い守る　哲子

冬が来る箱根の煙静かなれ　一歩
生徒には煙たがられる鬼教師　光久
籾殻焼く煙なつかし千枚田　たもつ
そうでした煙のような人でした　義

佳

煙になるまではしっかり食べておく　宏子
煙が目にしみる程度の恋でした　見清
煙なら見える放射能は見えぬ　信子
サンマ焼く煙は郷愁に変わる　ひとみ
玉手箱あけてしまった私です

人

煙に巻く手管も妻にかなわない　賀世子

地

火葬する煙曲がっている頑固　寿之

天

線香がゆれる母さんいつも笑ってる　万紗子

軸

三度目の夫の禁煙続いてる　俶子

兼題「じわり」　立蔵信子　選

ハロウィンがじわり日本に根を下ろす　キヨミ
だんだんと右に傾く日本丸　保州
生きずらいじわりIT包囲網　英旺
平成にじわり昭和が押し出され　雅明
あの日からおかしな風が強くなる　ダン吉
埋め立てし既成事実をつくる国　宏造
信用を支える杭が歪みだす　ひろ介
持ち時間神がじわじわと減らす　扶美代
時は魔術師悲しみもじわり消す　みつ子
じわりじわじわ正直者の勝ちとなる　千枝子
じわりじわり傾く夕日ポトリ落ち　博
飲む程に方言じわり顔を出す　隆彦
じわじわ来る病じわり来る加齢　(安)和夫
あの時のボディーブロー今じわり　紀雄
TPPじわりと迫る食文化　ダン吉
元気でなたった一言沁みてくる　(柿)和夫
根回しが効いて寂しい猿芝居　克己
歳なのか法話がじわり胸に染む　ふりこ
あさはかさじわり私を責め立てる　ひとみ
じわりじわおばあちゃんです横顔も　完司
名水はじわり心の芯に効く　章子
知らぬ間に妻が指揮棒握ってる　進
好き嫌い言うて兵糧攻めにあう　五月
攻めるのはじわりで逃げるのはスルリ　憲彦
安心がじわりじわりと減る日本　正和
ドタキャンへ病気の噂じわり湧く　大輪
国民を蝕んでいく消費税　好
やんわりと言われじわりと効く苦言　すみ子
モンタンがじわり染み込む秋の午後　千代
難儀する度にじわりと生きる知恵　宏子
B面でゆるりじわりと情で生き　あきこ
終の不在がじわりと哀を展げきる　真理子
酔ったふりジワリと隙間つめてくる　柳弘
足して二で割ればじわりと効く媚薬　裕之
初めての人が馴染みの顔で来る　冨美子
てにをはが責める締切り日がじわり　じわりじわり下流老人になりそう　勝弘

佳

老化順調じわりじわりと楽しまん　たもつ
新米がじわりじわりと喋りだす　しげ子
黙秘権うどんの湯気が攻めてくる　恭昌
じわりじわりわたし好きかと聞いてみる　瑠美子
廃屋のようにじわりと朽ちてゆく　完司

人

無駄骨とじわじわわかる土踏まず　わこ

地

湧き水になるのは遥か先のこと　奏子

天

見つめると睨み返してくる活字　完次

軸

12月がじわりわたしを攻めてくる　修

兼題「安　い」　川上　大輪　選

正面の鬼は安請合いしない　保州
おばちゃんは値切らずおまけ付けさせる　(柿)和夫
安い服試着室でも迷ってる　一文
お試しはただ結局高いものを買う　能子
安っぽい二枚の舌を持つ男　完次
リストラでも給料安い僕残る　修
親切が安さ以上に光る店　黒兎
付き合いのとても上手な安い酒　扶美代
安請け合いしないでニッポンの未来　章子
爆買いをしても百均なら安い　朱夏
格安のツアーで同じ顔に会う　まつお

九条をお安く見てはいけません　朝子
安売りもおひとり様は無駄になる　妙子
派遣法命が安くなる気配　富子
大特価のパジャマ隣も干してはる　ばっは
夫には安く言っとくルイヴィトン　(柿)和夫
安く買って高くかかった修理代　美智代
安請合いしては胃薬のんでいる　扶美代
ほうれん草特価きのうも今日も買う　美智子
安酒は只酒よりも美味しいぞ　篤
百均の棚に乗せられそうになる　完司
不動産屋がワケを話さぬ安い家　茂
安すぎても女心はそっぽ向く　進
半額にしても私は売れ残る　真理子
千円の床屋は早く毛が伸びる　憲彦
安かったとシャネルにダイヤつけた妻　眞澄
リストラに遭ったおつむを叩き売る　恭昌
スーパーの値引きシールを待つ夕餉　宣子
安い服きっと泣いてる作る人　堅坊
粉もんが好きなふたりの初デート　ひとみ
ラッピング豪華にすればごまかせる　宏造
喋り過ぎ少しお安く見えてくる　准一
どなたにも無料で届く陽の恵み　蕉子
安売りを拒んで臺が立ちました　進
安上がりの店でストレス消している　美籠
安物ばかり買ってストレス溜めている　賢子
値引き品消費期限に追われだす　宣子
佳
半額になったし食べてみようかな　理恵
安い筈だ竹輪の穴がでっかいぞ　朱夏
医者坊主セット割引予約する　惠
全部なら負けると言われ全部買う　雅明
スーパーで一番偉いのはモヤシ　奏子
人
安いわけ一度洗濯してわかる　楓楽
地
安売りの玉子おはようございます　義
天
安いけど八本あったタコの足　茂
軸
お前が着るとみな安物に見えてくる

兼題「光　線」　小島蘭幸　選

小春日和神のご褒美かも知れぬ　保州
影の位置まで視野に入れ待つカメラ　五月
ペンライト振ってライブに酔っている　まつお
灯明の届かぬ闇に母を見る　進
朝の光にやる気スイッチ入れられる　恵
目に見えぬビーム私が蘇る　勝弘
光差す方へゆっくりゆっくりと　ひとみ
イルミネーション恋の闇路は照らさない　(霞)寿子
光ひとすじ私に希望くれました　わこ
不老長寿の光線僕へまっしぐら　ばっは
木漏れ日の温さは母の暖かさ　大輪
心まで映してほしいレントゲン　靖博
嘘をつく時をフラッシュ待っている　憲彦
そう言えばカーテン開けたことがない　(霞)寿子
遺されて灯台の灯の見えぬまま　みつ子
仏から出る光線がありがたい　唯教
秘密です光源氏はあなたです　紀華
恋をして発光体になるわたし　洋
LEDに替えても見えぬ約款書　哲子
あなたにも私照らした罪がある　郁夫
ウィンクのレーザー標的はあなた　奏子
冬の入口を決めたのは光線　信子
日差しある方を探している新芽　俶子
骨までも透く光線で見る宿痾　心平太
原爆一閃その瞬間も呱呱の声　敏治
発光体になっているのはきみの旗　あきこ
闇にいた彬にやっと陽が差した　いさお
木漏れ日に身がひきしまる神の杜　恭昌
逆光に助けを借りていたスリム　美籠
太陽の光が月を月にする　真理子
名残り惜し気な残照の中にいる　完司
苦も楽も貫く一筋の光　哲子
ありがたーい光線腰にあてている　美津子
竿の先秋の光の赤トンボ　黒兎
ビビビッと光線放つ薬指　惠
ステンドグラス抜けて光線膝に降る　廣子
逆光でした軍服でした訣れの背　とーな
佳
B面にスポット浴びてからの運　憲彦
光線と見まちがうケイのスマッシュ　美津子
光線を呼び込んでいるルーティーン　楓楽
しっかり老いてお日様と友達に　美子

一筋の光となったカムバック　扶美代
人
光線の加減で妻もモナ・リザに　完　司
地
ブラインド下ろして深海魚になる　恵津子
天
本を読む発光体になっている　居谷真理子
軸
好き好き光線放つといつも泣く孫よ

○

平成27年本社句会皆出席者予定
（1月～11月）（順不同）

足立　茂　油谷克己　石田隆彦　あまのとーな
市坪武臣　海老池洋　榎本舞夢　江島谷勝弘
上山堅坊　加川靖鬼　木本朱夏　榎本日の出
小島蘭幸　川端一歩　川端六点　居谷真理子
柿花和夫　亀岡哲子　黒田能子　奥田みつ子
坂　之　酒井紀華　澤井敏治　指宿千枝子
島田誠一　遠山唯教　中村　恵　太田扶美代
能勢良子　西出楓楽　藤井則彦　鴨谷瑠美子
水野黒兎　牧浦完次　松岡　篤　久保田千代
升成　好　桝本宏子　前たもつ　古今堂蕉子
村上玄也　矢倉五月　安田忠子　鈴木いさお
山口光久　山﨑武彦　山田耕治　飛永ふりこ
山田葉子　山本　進　吉岡　修　平嶋美智子
松尾美智代　山岡冨美子　（54名）

（記載漏れの方はご連絡ください）

句会燦燦

十月句会を読む　岩崎眞里子

森は宝で蟋蟀が鳴く百舌が鳴く　蘭幸

参加者三五七名！大盛会の秀句の森は、蟋蟀や百舌…あらゆる命が集い、まるで錦秋の木洩れ日浴びた忘我の一時だった。

成績は上がった後がこわいんだ　涼
天と地のギャップ人間のギャップ　(森)恵美子
夕焼けに二人は違う明日想う　盛夫
いくつもの握手ギャップを埋めていく　千代

上を目指して頑張ってきたが、天と地の間で下を見るのが恐い。でもこの森で出遇った人は皆が違う明日を目指していた。多くの作品や作者達と会い、今温かな出遇いに導かれている。

クラゲにはクラゲの骨があるのです　京
古文書が語る敗者に陽が当たる　霜石
デジタルの疲れを癒やす紙芝居　碧

祈りや志には意思という骨があり、歴史の骨は勝者と敗者が綯いあげたもの。故に奥深く、紙芝居と共に永遠に不滅なのだ。

震度3でした小さな訃報欄　鯉
すり切れるほどに涙を拭いた旗　小雪
転んでも空を味方に立ちあがる　博子
考えの古さは母の武器だろう　末男

日々揺れている心。生きている心に添う涙。涙を包み拭いてくれる旗は志。立ち上がるまで見守っている空は母。そんな母を形作っている古さは泉の如く湧き上がり、時代を越えていく。

宝石は偽物私は本物　すみ子
万華鏡ゆらりこの世を裏返す　朱夏
宝から平易なものになって行く　孔美子

本物とは、君が君で…私が私で在ること。己を見失わぬよう立ち止まって辺りを見回せば、陽炎の中でゆっくりと反転していく景色。その真ん中で日常が活き活きと輝きを放っている。

老地柳塔

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳ねやがわ（大阪）（前月号）籠島　恵子報

おとなしく妻に従う観光地　亜成
日本の秋は味覚で幕を開け　祥昭
お袋の便りに添えて栗届く　薫
パスポート捨て日本の四季を観る　一
被災地が目玉になった観光地　銀杏
特ダネを家族話題にして議論　ルイ子
どんぐりも特ダネになるランドセル　麗
かど番になって実力出し始め　博泉
勝ち負けはいらぬ心に響く句を　美智子
濁流の街に無残な青い天　賢子
最近はカメラを持たず観光地　さち子
七〇年国のかたちはかえられた　朝子
災害の爪痕寒く見る無口　洋
パン盗みうちの家族になった猫　郁夫
特ダネや給料袋が三倍に　秀雄
新曲を覚え切れずに長い風呂　高志
友好の外交忘れいかくする　義広
天空の湯にひたり見る眼下の灯　美江
燎原の火と燃え盛る民主主義　鈍甲
アメリカに言い勝つことの出来ぬまま　かすみ
煩悩を断って仏の膝枕　壽峰
渋皮煮年に一度の母の味　尚世
究極の味は真水の味と知る　仁
誘われて月見団子に口説かれる　柳弘
おばちゃんいつも飴と特ダネ持っている　弘一
白飯に卵を割ってこの美味さ　忠央
さんま焼く煙も出ない安保法　弘風
どん底へ落ちて地獄を見た皺だ　修
百日紅がやけに目につく年でした　恵子

八尾市民川柳会（大阪）土田　欣之報

シナリオは恋する度に書き換える　寿之
平和への思いをまいた秋の声　雄太
地獄極楽どちらがいいか謎のまま　耀一
人生の足跡刻む回顧録　紀雄
涙雨心に刻む名はひとつ　仁
平行線交わる前に灯る赤　高鷲
一人身の自由と不自由の狭間　慶子
今までの苦労を刻む深い皺　一文
引き際を探る覚悟が揺れている　惠
亡父の言確と心に刻んでる　清
店先で地団駄踏んでごねる孫　安男
あの人のその後は知らず喪の葉書　静子
森の精民話の風の息使い　朋子
人生の轍に刻む愛と憎　壽峰
まだ青い私のそばに居て欲しい　森子
倦怠期ああ沢庵の数珠つなぎ　欣之

川柳塔打吹（鳥取）　野口　節子報

卵生むにわとりさんは檻の中　久芽代
卵抱くように育てて人さらい　節子
難民に差し入れしたい卵焼き　照彦
卵だく梟の目にすきがない　重忠
何時の間に私の卵羽が生え　道子
電話鳴る度にひやひやするかかと　久江
ひやひやが続くいくさはもうしまい　妻子
離着陸屋根すれすれの離れ技　清
ひやひやし言葉つまらせプロポーズ　貴恵
ひやひやと間食手を出す午後三時　たけ代
断捨離を始めた妻と会わさぬ目　三津子
玄関の上にでっかいスズメ蜂　野蒜
補助輪の無い自転車の一人乗り　紀の治
脳波撮る結果まつまでひやひやだ　幹啓
ひやひやは少年Aに総理C　くにこ
叫んだら山も叫んでくれました　宣子
何の為生きて行くのか叫びたい　啓子
叫び声聞けそう大根抜いた穴　美ッ千
理不尽だ叫ぶ気力はまだあるぞ　公恵
老いるのはいやだ大声叫びたい　悦子
戦争は嫌だと叫ぶ日本中　芙美子
叫んだら相手を利する事になる　重利
バカと叫んで山の返事に大笑い　龍枝
雄叫びで山が動いた事がある　石花菜

新婚はテント一張り箸二膳　滋
テント張り音風のんでひと眠り　紀美恵
人生の渦がまいてる青テント　美知江
富士山が日本一のテント張る　芳光

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

信頼をされているから生きられる　安代
信頼をされない我が身恥ずかしい　公平
警官というて安心できまへん　としお
黙ってはいるが信頼できる瞳だ　(矢)五月
信頼に答える汗はおしみない　朝子
誉め育て叱って信頼母の愛　大輔
信頼感ふかめ一献傾ける　美籠
青い空ボクのものだと呱呱の声　たかこ
民意無視信頼できぬ安倍総理　英夫
孫が云う男同士の約束だ　舞夢
あの人がいるならもめる事はない　まつお
良い天気ですねの後が続かない　力
快晴も豪雨も窓から要介護　千歩
ヒマやなあ彼岸を過ぎたかき氷　茂
ほんとうになくなりそうな秋と春　勝弘
炎天に耐えた稲穂の実もたわわ　隆昭
難民の雨も嵐もない逃避　一歩
天候にかかわりなしに花が咲く　シマ子
楽しさも恋の悩みも聴くベンチ　直子
木のベンチ昭和の恋を語り出す　典子
待ち合わせ昔はベンチ今スマホ　守善
木陰のベンチ休めば秋が声かける　満知子
坐ったらすぐさま鳩が寄るベンチ　桃花
ベンチ立つ時につい出るどっこいしょ　敏晴
終章へ翼ください飛び足りぬ　賢子
カラコロと空缶が飛びいい天気　日の出
しゃぼん玉思い通りにとべてるか　美世子
飛んで見て地球はいつも美しい　舞蹴
パスポート持たずに悠々渡り鳥　昌紀
下駄蹴飛ばしみんな予報士昭和の子　福貴子
飛んで来た種で恵みの秋の花　妙子
ひな鳥の巣立ち促す鱗雲　志津子
飛べるだけ飛んで二人でケアハウス　芳香
カラオケは気持ち包めと言われても　満寿恵

岸和田川柳会（大阪）　佐藤　幸子報

愚図る子にタケモトピアノ聞かせます　昭
すんなりと儲けさせてはくれぬ株　益祥
その呼吸合わせる努力幾星霜　一子
合掌が優しい呼吸変えて行く　和美
良く喋る口にはりたいガムテープ　香代
息を止めしばしの静止矢を放つ　喜代志
溢れ出る清水自慢の山育ち　幸子
まだ咲かぬ花にも愚図がいるみたい　珠子
愚図な子に津波の恐怖教え込む　隆昭
愚図だからいつも時計は進めてる　大輔
まだ粘るこの汗いつか物になる　ダン吉
無料だと溢れるほどの客が来た　忠太
息とめて笑み溢れてるデスマスク　敏治
深呼吸しすぎて宙に舞い上がる　久

藤井則彦選

女傘借りて小さな波が立つ　麗
人生を圧縮すれば終電車　弘一
爺ちゃんはいつ死ぬのんと円らな目　直樹
ほんとうの自分に還るデスマスク　三千代
本音だと字余りになり一苦労　信男
点滴の背中をさする四季の歌　遊子
いつからかがんで通る妻の前　薫
消しゴムにお礼を言ったことがない　克子
セクシーな男は汗の匂いする　葉子
断捨離が進まない間に歳ひとつ　耕治

佳句地十選（11月号から）

高島啓子選

戦場の一人一人は平和好き　重利
被災地もしっかりかかる消費税　一歩
キミたちはスマホ病だと気付かない　時雄
町工場すき間を泳ぎ生き延びる　陸宏
ユダをさす指を鋭利に尖らせる　芳山
面とりをして大根は尖らせぬ　博子
消しゴムにお礼を言ったことがない　克子
出迎えの傘が楽しい雨にする　かずお
生きてるぞ時時落とす鍋のふた　淑子
クジを買うとき貧相な顔になる　芳光

溢れる湯長湯が出来ぬ不整脈　弘子
さりげなく溢れる想い抱いて逢う　ふさゑ
精一杯亀は亀なり生きている　ひろ子
胸の棘抜いて呼吸を整える　寿子
感性の溢れる人に嫉妬する　益男
大都会人が溢れていて独り　みつ江
見詰められ月下美人の深呼吸　義泰

竹原川柳会（広島）　古田　太虚報

島からでも夜の句会によく行った　静風
橋かかり島にも嫁が来ると言う　規代
造船の街も今では孤島なる　一徳
鈴の音を海にこぼして島遍路　寛
山頭火の句碑あたたかし島あたたかし　蘭幸
島なみを走る自転車若い風　幸子
青い実を抱いてどんぐり夏そよよ　淑子
青色の似合う子だった空見上げ　栄恵
後期なりもう描けない青写真　汎美
青空を期待し廻る洗濯機　慶子
天の青青のそのまま写す海　弘子
青鬼の思いやり知る物語　千代美
深呼吸心も空の青になる　比呂子
苦労をしたのか青さが消えている　輝恵
風の街青いリンゴが売れ残る　鬼焼
ぶっきらぼうに青い果実が大人びる　昭紀
記念日に誘われ友と映画観る　栄香
暴力の世界映画じゃありません　白狐
特攻の映画を孫と観る平和　敬子
映画から帰る夫婦という余韻　笑子
外デビューよちよち歩き白い靴　歩美
柏手を打てばきれいなこだまが帰る　貞子
吸って吐くこれ当り前ではないのです　厚子
野の花を一輪さして四季を見る　初音
安保法守りたいのは子どもたち　史子

南大阪川柳会　津守　柳伸報

スタンドで声からしてる松葉杖　実
身を守る杖に大きな恩がある　志華子
おしゃれで杖ついたのに席譲られた　昌紀
惚れ抜いてあなたの杖になる覚悟　郁夫
被災者の杖になりますボランティア　栄子
この国の福祉知ってる白い杖　祥昭
夕方の値下げへ粘る市場籠　シマ子
ミニスカに目尻を下げた鬼課長　恭昌
もう熱は下った乾杯をしよう　いさお
バーゲンの垂れ幕女を並ばせる　タカ子
おもてなし下がる人気の五輪です　なぎさ
若者にアタマが下がるデモの波　勝弘
プライドを下げれば世間よく見える　更紗
タイガースファンの中に居る無口　柳右子
審判に中元足らぬタイガース　和雄
野良猫も見下しているタイガース　久美子
商談もタイガースから始まって　直子
虎キチは悪女に惚れたようなもの　克己
応援は日本一のタイガース　柳伸
阪神の試合を見るなとお医者様　忠昭
念の為指紋残さぬつもりです　修
兄弟にそれぞれ残る父母の愛　国和
早すぎず遅すぎぬうち逢える人　ルイ子
疲れ取る為の一杯からハシゴ　篤
旧姓で呼び捨てされるクラス会　弘子
古稀すぎてひとり遊びを身につける　武臣
台風のこぼした水が虹となる　弘委智
後方のつもりがいつか盾になる　東風
心満ち余生を刻む砂時計　たもつ
まだ遠い目標的にして歩む　紀乃
鬼灯が綺麗な赤になって秋　一歩
一人には一人の歩幅曼珠沙華　楓楽

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

食べ放題相撲部がいく野球部も　則彦
けの汁じゃっぱ汁我家の冬の味覚なり　重虎
海を越え和食も酒も人気者　京子
現金になるまで疼く手形抱く　井蛙
シクラメン飾り真冬の部屋にする　劦
森を出た埴輪が語りかけてくる　芳生
母の海あの日の疼き忘れない　慕情
外は雪メールばかりをやっている　小とみ
湯治場で春まで遊ばせるいのち　黙人
母の癌墓の中でも疼いてる　一呑
がつがつと世継ぎのなくて鍬が泣き　花匠
日に三度文化遺産の和食愛で　風来坊
陽に焼けた夏の遺産の水着跡　美鈴
しょうがない無口な妻と春を待つ　隆樹

九官鳥がつがつ真似る国なまり　ひとし
カイロ抱き恋しい人の夢に酔う　一湖
木枯しが吹けば決心また揺らぐ　のぶよし
顔中でちちの遺産を写し出す　柳子
嘘一つ吐く度胸が痛くなる　龍馬
がつがつと貯めた金では旅立てず　初枝
つるべ井戸先祖の遺産引き上げる　呑舟
遺産放棄いくらか里へ恩返し　きよし
いつの日か津軽の空の千の風　氏加子
感じとる心ぎゅぎゅっと抱きしめる　和香子
図書館に来れば静かな人ばかり　五楽庵
講習会離れて座る夫婦仲　一花
文才は無いがメールのユニークさ　洋子
しておける時にしておく方がいい　霜石

川柳塔唐津（佐賀）　**仁部　四郎報**

お互いにこれあれそれで通じてる　節子
体重計新米サンマと協議する　蜂朗
待ち合わせ十分前に着く男　高明
安保デモ成立してもなお続く　實
ＣＭが長寿あの社の株を買う　四郎

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

エンピツで書こういつでも消せるから　和子
七日間は許してあげる蝉時雨　義雄
にぎやかな人でも逝くときはひとり　愿
賑やかな噂話がまだ続く　准一
賑やかに送ってほしいその時は　みね

毎日をどんちゃん騒ぎして生きる　美羽
羽衣の薄さへ賑やかな視線　小雪
生きてると蝉が鳴き切る短い日　昭枝
蟻んこが喋りだしたらどうしよう　当代
バスツアー乗っているのがひばりの子　絹子
中国語韓国語飛び交う車内　英夫
今が花今が花だと生きていく　夢子
好奇心生きるわたしのサプリです　ひろ子
心電図動き生きてる生きている　俶子
生き様を皺の深さが物語る　敏照
煩悩を捨てず元気に生きてます　起世子
生きるとは二度と戻らぬ旅である　ほのか
てにをはと格闘今日も生きている　義泰
炎天下実感がある生きている　次根
今日を生き明日に繋がる糸紡ぐ　千鶴
長い道生きて答えがまだ見えず　純子
上弦の月は笛吹く王子かも　保州
母が笛吹けば元気になる茶の間　あき子
草笛の視野いっぱいに空の青　章子
ほうほうと鳩笛昔話する　みつ江
拉致家族霧笛ばかりが鳴り響く　幹子
指笛に心が疼く青春譜　菜摘
童謡を口笛で吹く帰り道　幸子
妻の吹く笛に乗せられ踊らされ　富香
全身でもてなすクリオネのいのち　碧
おもてなし何が無くても先ず笑顔　よしこ
不意の客賄う妻の割烹着　昇
貧乏に耐えてもてなす冷えたお茶　美枝子

思いやる心が人の値打ちです　日出男

川柳茶ばしら（愛知）　**関本かつ子報**

走り書きらしい一筆胸を打つ　美千代
ふる里のここらに我家あった筈　百合
掃除機が追っ掛けてくる日曜日　遡行
飲める人に気を遣ってる禁酒令　雅美
私の好物だから手間をかけ　まみ子
二日程過ぎて出て来る旅疲れ　かつ子

川柳ふうもん吟社（鳥取）**夏目　一粋報**

ドナーの眼貰いウインクなど出来ぬ　洋々
沖縄が別居したいと吠えている　無限
シンデレラの夢がまんだに捨てられぬ　一瑤
爪を切るいい人に逢う二日前　善平
前向きが良いと限らぬ好戦派　茶人
揃わない意見一升ビンが要る　妻子
外からは見えぬ我が家のミシン線　野蒜
告知されても前向きの君笑顔　真智子
長生きへドナーの力などいらぬ　回春子
古稀過ぎてまんだに迷う人の道　凱柳
離婚してみんな前向き今の人　昌鼓
嫁姑別居の危機をのり越える　美佐枝
銃を持つ子等に未来はあり得ない　とも湖
結婚出来ぬ人もいるのに三回目　みゆき
だまらせる力を持っているお金　雅女
別居して分かる同居のありがたさ　圭一郎
別居と言う条件付けて嫁が来る　茂登子

消えそうな命ドナーの火が灯る　はつ江
前向きへなれぬ自分に腹が立つ　美津子
玩具の兵隊前向きばかり回れ右　栄子
待っている命必死でドナー待つ　和子
少子化で別居もできぬ核家族　薫
笑っても泣いてもやがて止まる独楽　美恵子
晩学へまんだに俺はへこたれぬ　金祥
そのうちにハグしてくれる介護ロボ　毅
前向きのつもりで横に進む蟹　清信
前向きに検討すると応えとく　蟹郎
咲くときはみんな自分の色で咲く　節子
ドナーOKしかし勇気がありません　天翔
金のある人だけドナー利用でき　清流
長生きしてドナー登録役立たぬ　振作
最期の奉仕ドナー登録すでに終え　千枝子
新しいことに挑戦喜寿傘寿　賢悟
ドナーから守ってくれよ生きてくれ　菖子
ドナーなどいらぬ天命受け入れる　一粋
（方言「まんだに」は「今だに」の意味）

川柳塔さかい（大阪）　村上　玄也報

女性専用ガラ空き僻む満員車　健吾
トラブルも一晩寝ればみな消えた　日の出
僻むより自虐で行こう胸張って　清晋
トラブルを上手に捌く諭吉さま　ひろ子
トラブルに手を叩いてる第三者　清
声帯がトラぶったのかしゃがれ声　俶子
爺ちゃんが昼夜逆転して困る　八千代
トラブルが続き褪せてくおもてなし　誠一
駄目ならば今度は逆にまわします　好
しくじった苦労話が身に染みる　さくら
トラぶった時だけちょっと聖書読む　敏治
過去形になってトラブル笑い合い　若芽
資源ない国だが頭脳未来あり　世紀子
逆縁に諸行無常がからみつく　唯教
重箱の隅にトラブル潜んでる　和夫
トラブルを嫌い誰とも付き合わぬ　月子
宿敵も苦節を越えてみんな友　憲彦
トラブルのおかげ本音が見えました　舞夢
金返せ言うて自販機蹴っ飛ばす　澄空
パソコンに言うこと聞けとどやしつけ　素頓馬
長い脚僻む視線の心地よさ　時雄
男より高い女の余命率　雅明
うつむいていただけ輪から外される　みつこ
僻みなどしない私に笑顔ある　ヨシ枝
ひねくれた胡瓜お前も嫌われる　光
あんたが入ると話たいがいわやになる　としお
入れ食いにテグスが縺れ釣果ゼロ　憲
しみったれがくれた品物皆粗品　シルク
トラブルに油を注ぐ武器輸出　永久
前頭葉に刺さった棘がまだ抜けぬ　和幸
しがらみをくぐって捜す未知の旅　安代
逆さまに見れば喜劇でさえ悲劇　扶美代
しみじみと腐れ縁やと見る寝顔　五月
功績をあげた部下への八つ当たり　玄也
僻まれるほどもぎょうさん溜めてない　天笑

高知川柳社　小川てるみ報

竹人形夏は涼しく顔合わす　哲史
合掌に不戦の誓い包み込む　陸宏
合掌の効果心が澄んでくる　てるみ
談合の闇で踊っている小鬼　三郎
身の丈に合わす器が見つからず　千恵子
照準を合わすと消えていた殺意　暖

長柳会（大阪）　辻村　ヒロ報

お人好し抵抗したい時もある　ヒロ
上司には無抵抗主義平目族　洋二
酒びたり行楽日和留守番で　もこ
好天に誘われ山へススキ見に　由夏
盲導犬歩幅合して歩いてる　輝子
アアしんど歩幅合わない孫の守　マサ
ただ呆然しゃべるちらかす爆買いす　ひろこ
見て聞いて呆れた孫の秘めた才　辰男
呆れるね凄い爆買い街を変え　明信
元彼と歩幅の相違結ばれず　靖博
無理をせず楽な歩幅で暮らしてる　幸子
ボタン一つはずし秋風胸に入れ　知津子
卒婚で歩幅を変えてみるよすが　光弘
歩幅小さい散歩の母に紅葉散る　ふみ
独りぼっちいやで歩幅合せてる　隆彦
二人三脚歩幅揃えてあと少し　孝代
愚痴言わず回り続けた母の独楽　正博
アメリカと歩幅を合わす安保法　武仁

「歩調トレ」そんな時代はもうご免　淳司
手ぶらできて食べるは飲むは暴れるは　けい子
有史以来ずっと戦争するヒト科　正美
幸せですか赤提灯の影法師　和子
歩幅合わせゆっくり解いていく心　ともこ
負けないぞ心の歩幅まだ二十歳　直樹

川柳大阪　山﨑珠生報

道の駅ああ故郷の味がある　信酔
ああ怖い車乗ったら人変わる　堅坊
空いてると乗ったら女性専用車　朝子
爽やかな風に変身するペダル　(矢)五月
肩車した子に車椅子押され　美世子
電車内エッと思うことようあるで　満知子
こくですよ中途半端な優しさは　美籠
欲得を言わぬと半端でも喜楽　万紗子
半端じゃない妻の一言山動く　珠生
何するも中途半端な男です　美花
中途半端にすうっと消えるずるい人　(鈴)いさお
割勘の半端は幹事の役得　弥生
憧れの都会で故郷を叫ぶ歌　芳香
常識を持って話せばうまくいく　まつお
肩抱いただけでさよならとは何よ　かよこ
常識を棚上げにして戦争法　一歩
常識もときどき風に流される　美濃
憲法の上に居座る安倍総理　温子
常識が同じレベルの人と添う　紀雄
非常識維新の会の都構想　照月
子を思う心通じぬ親の愛

はびきの市民川柳会(大阪)永田　章司報

胃ろうやめてというてます書いてます　みつこ
胃の中で酒と薬の小競り合い　泰子
世論より自論大事とアベ首相　千鶴子
虫の音を聞いて熱燗もう一杯　洋一
胃薬ははなさず酒も止めずいる　美代子
九条に異論を語る某首相　真一
虫好きの児と嫌う母とのバトルあり　喜久子
頼みごと虫の居所良い時に　フジ
異論など自民党には通じない　さくら
多数派の議員は異論ないんかい　ちづる
老いは楽し来年二月曾孫抱く　敏
戦争でお金儲けを許すまじ　雄太
百寿の秘密食事にありと敬老日　美喜
居ながらにして虫の合奏秋の宵　獏杏
一我慢二三飛ばして又我慢　かつ美
窓際のベッドへ虫の子守歌　ヨシ枝
我慢などやめた私も意地がある　ダン吉
秋の空食べろ食べろとけしかける　シルク
爺さんはマムシ好きだが虫きらい　ひろ介
我が儘を許してくれて有難う　アヤ子
我慢してよかった運が向いてきた　いさお
虫の知らせか会いたい友のメール来る　登志子
胃カメラも腹の黒さは写せない　章司

川柳塔おっぱこ吟社(香川)川﨑ひかり報

再会の本音でオブラートが溶けた　弘
ガリ版の本で学んだ戦時中　放任
本心を明かせば誤解とけてくる　よしみ
ゆっくりと流れてほしい浮く落葉　いさむ
正論を吐くたび故郷遠くなる　初恵
大波を小波に母の防波堤　ひかり

プラザ川柳(大阪)　坂上淳司報

ジーパンと同じ歩幅のお振袖　淳司
さしむかい感謝感謝と乾杯す　和代
名月を酒杯に浮かべ語る友　政夫
盗撮を捕えてみればおまわりさん　修
後の世の宝を守る岩田帯　久美子
記憶遺産罪な抑留戒める　五月
寒霞渓上り下りも万華鏡　勇一
許されぬ入試漏えい呆れ果て　悦夫
マイナンバー自分の歩幅見失い　克三
病み上がり友の歩幅に遅れぎみ　正子
協調はムカデ競争から学び　一夫
短足の私にできた富士登山　清乃
怒ったら自然と歩幅広くなり　篤
テープカットするが責任負わぬ方　弘光

富柳会(大阪)　関よしみ報

待ってます線香一本燃えるまで　文重
押入れにぎっしり積んである昔　登子
溢れ出る思いの丈かその涙　田鶴子
碌でなしでも人でなしにはなれず　正治
女一人今日も詰め込む痩せ我慢　慶子

正論を吐いて世間は向い風　常男
ピエロの目おもろい顔にポロポロリ　朋子
自分史にあれこれ打った句読点　清仁
いにしえの涙ぎっしり小抽斗
一片の嘘が咲かせた赤い薔薇　壽峰
逆風に耐えて耐え抜くど根性　高鷲
向い風傍に肩組む人が居る　澄子
年重ねるごとにしみじみお月さま　深雪
失敗を笑い話にして介護　よりこ
行間にはみ出た真意炙り出す　未知
人生をぎっしり詰めた脳の皺　武人
ぎっしりの旨いがはじけそう秋刀魚　奏子
平明に説いて聴かせる禅の道　一文
一匹に抗う雑魚の目白押し　恵
鬼嫁でなくて良かったカシュナッツ　アキ
花束と風の香りもラッピング　寿之
ぎっしりを群れる私も群すずめ　よしみ
私の中でおんなは向い風　森子

川柳塔なら　中原比呂志報

これからはほどほど長生きのコツ　優
ほどほどにゆずって保つ我が夫婦　賛郎
秋鯖はやっぱりしめて酒の友　崇明
ほどほどにして欲しい自然の猛威　倫
ほどほどの暮らし心豊かです　仁
老いらくの恋ほどほどが丁度良い　紀雄
人間に結論なんてありません　完次
成立しただけどドンパチはやめてや　勝弘
ほどほどの暮らしが出来て秋の旬　萌子
ほどほどの情理円満年の功　博一
無茶話うっかり乗った日の不覚　秋泉
君に会う前の私に戻りたい　眞澄
無茶食いも飲むも五臓が怖気だす　ふりこ
苦節十年やっとライトを浴びている　成子
照りつける西日昭和の一途な日　柾子
口閉じて貝はやっぱり語らない　惠美子
培った腕はやっぱり宝物　甚之市
目隠しをしてあなたに辿りつく　辰雄
ほどほどに遊べと欠けた肺が言う　喜太郎
身の丈を越えてほどほど思い知る　弘子
一隅を照らす小さい小さい善　恭昌
無茶をした昔に病んで行く五体　國治
お喋りもその辺までと咳払い　和夫
太陽が照らしてくれる心闇　將文
手加減を加えて老いと手をつなぐ　富子
ほどほどを許す許さないでもめる　見晴
照準をきっちり合わす君の胸　理恵
土壇場でメッキ剥がれて死んだふり　比呂志

岩美川柳会（鳥取）　石谷美恵子報

僕だってむかし高額納税者　重忠
マッタケがわんさかあったその昔　完司
親方の昔かたぎがなつかしい　圭一郎
泡になってもなっても母は子に尽くす　一瑤
難民の中へ赤ちゃんいるんだよ　天翔
騙されて飲んだ薬がよう効いた　蟹郎
泣き方で赤子しっかり意志伝え　節子
赤ちゃんとふれ合う生徒みな笑顔　たぬ
ポケットの昔の夢が動いとる　幸安
メッキ剥げ昔の顔がのぞき出す　敏子
シャボン玉飛ぶも飛ばぬも風しだい　一粋
宝くじ当てて一泡吹かせたる　茶子
ご不満は何なのですか蟹の泡　弘子
一言が多くて和解水の泡　雅女
赤ちゃんの寝顔のように逝きたいね　菖子
赤ちゃんの百面相よ愛しさよ　美恵子

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

叱った日の裏読み取っていた涙　寿子
まっすぐに叱る父の目忘れない　小雪
ならぬことはならぬと叱る三つ子から　なる子
叱ってる方が泣いてる子のしつけ　准一
叱られるたびに生長する命　弘子
子を叱り母も一緒に泣いている　よしこ
叱る程のことか外野は良く見てる　克子
叱られるたびにうごめく渦がある　あきこ
叱られるたびに大きくなる器　日出男
触れてはならぬ心の奥の深い罪　紀久子
心の傷消すに消せない一ページ　佐一
原風景ページをくれば光り出す　和香
今日と言うページ予告もなく開く　めぐみ
平成のページ足跡刻み込む　紀子
煌めいた青春のページにある伏せ字　徑子
誰にでも一ページずつ今日がある　保州

阪神の意地楽勝はさせません　准一
楽勝より地道の努力性に合う　まさみ
楽勝へ明日の警鐘鳴り止まぬ　冨美子
楽勝の無い人生に深み出て　秀子
楽勝の数だけ努力重ねてる　ほのか
大丈夫なのかと問えばVサイン　夕胡
口癖は楽勝勝ったことがない　大輪

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

ひとり暮らし季節の花を友として　桂子
お互いに愚痴言いあえる古い友　正子
メル友に会ってビックリお婆さん　信男
三人も友いて心強い冬　輝
寂しいわ頼る実家も代替り　郁子
神仏に自分勝手な頼み事　順子
イクメンでパパ大好きと子が頼る　長一
何回も妻呼ぶぼくの夕仕度　黒兎
朝ドラはうまいところでまたあした　純子
心の中の深いところで疼く傷　美智代
気を抜いたところで老と鉢合せ　勝
古傷をひょんなところで妻が突く　堅坊
斜に構えスマホになびく世を見てる　春代
猛暑去り稲穂がゆれる秋となり　柳童
酒の勢い言いたいことの三分ほど　守啓
ほっこりと旅の足湯は聞き上手　美佐子

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

微力でも地球の隅で缶拾う　芳恵
わたくしも地球の上に立つ一人　桂子
地球の隅で弾ける恋をする　久枝
地球儀がこわれてからの深い海　邦代
水と青人と地球の仲であれ　ひふみ
宇宙船地球丸ごとキャッチする　久絵
地球から平和の鐘がこだまする　ちえこ
糖質ゼロ女は嘘をつきたがる　芳山
カウントをゼロへ数える五輪の日　注湖
ゼロ歳児無限の力握ってる　たけし
ゼロ戦が必要になる安倍総理　寛
ゼロ歳児にぎにぎの手は何掴む　知恵子
葉脈になってもおんな紅の跡　とも子
生きた道枯れ葉のように軽かった　輝山
笹舟で日本海に躍り出る　堂太
葉脈になってアナタを育てるわ　孝子
ハーブ嗅ぎゆるり気持ちを太らせる　妙子
花も葉も来る春迄は充電中　哲子
葉の裏でサッカーをするかたつむり　博子
火の様に燃えて二人はゴールイン　幸
めらめらの真ん中に立つ仏様　草庵
めらめらと湖を焦がして大茜　涼子
あぜ道にたき火のくよしホッとする　俊子
髭剃ってめらめら秘めた朝の靴　千里
めらめらの想いノーベル賞の価値　柳歩
めらめらと明日に向かっている踵　美智子
対立に風ふところに秘めている　幸子
風の中笠がクラゲで飛んでいく　紗季
台風の目が光ってる台所　あきら
台風の真ん真中で抹茶飲む　寿代

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

白髪染めもう止めようか考え中　節子
十五夜を愛でる心は丸くなり　杁香
熱心に節約赤字から抜ける　美智子
はいはいと言えない深い訳がある　千恵子
熱押して母は朝餉の葱きざむ　志華子
月おぼろ愛はブレーキオフにする　義昭
車座がお国訛で熱くなる　和夫
母の手で包むと強情溶けてくる　集一
言うことを聞けばよかったにわか雨　洋志
風鈴がお疲れ気味で押し黙り　弘委智
微熱なのに呑むなと言うしつらいとこ　修
ブレーキをかけてかからぬ酒煙草　榮子
頑固でも孫には柔順な夫　満作
まだ母の骨は熱いか彼岸花　和夫
飲み出すとブレーキ外れ朝帰り　高志
変りゆく国ともしらず蜻蛉とぶ　たもつ
桜ラガー知力技量で巨体撃つ　英男
ノーベルは矻矻る人見逃さず　縣祚
ふるさとの風を集めて祭笛　星雨
ノーベル賞熱き心に舞い降りる　武彦
神様の意に逆らえぬ順不同　満洲夫
短詩系文芸情熱の発露　克己
ブレーキが掛からぬ程の里自慢　麗
熱さましシートべたべた貼って老いの恋　直樹
名月に心の垢を落とされる　庄二

くらしむき下流老人になりそう　勝弘
飲み過ぎる酒へブレーキかかる歳　堅坊
「天」とって妻をビックリさせてやろ　いさお
ブレーキとアクセル違う夫婦仲　弘泰
看護師の言うこと聞けば妻が妬く　一歩
負けへんと思う心に来るチャンス　賢子
運命に逆らえないと悟る歳　朝子
初のデモ遊び心の子をつれて　正

あかつき川柳会（大阪）　山本　昌代報

蟻にさえいのちがあると祖母が言う　たもつ
仮面脱ぎメシフロネルで今日も過ぎ　篤
仮面からひょいとこぼれてきた本音　浩子
兵隊蟻が足りなくなるという噂　紅絵
嘆いてもあんたが播いた種でしょう　克己
脇道へ走っていった子を嘆く　茶助
一億総活躍で蟻にされ　一志
少子化へ心痛める女王蟻　いさお
いい素材あっても味のつけ次第　康信
マイナンバー君のうしろに兵が立つ　哲夫
妻の仮面鬼と天女の組み合せ　シマ子
口先の平和仮面の安倍総理　美世子
都構想もう済んだんとちゃうんかい　直子
マイナンバー付いて私が弾まない　ふさゑ
兵隊にされると蟻の立ち話　信二
支払いを済ませて味を振り返る　和雄
マイナンバー内緒でバイト駄目と言う　忠昭
正体を隠す仮面にある秘策　壽峰
危険予知地下から蟻があふれ出る　鈍甲
宗教の仮面外せば金まみれ　隆昭
嘆くばかりじゃ駄目先ずは飯を食う　秀夫
嘆いてもすくすく育つ物忘れ　堅坊
ニュートリノ僕の体も吹き抜ける　英夫
どうせ今離婚もできず八十の妻　武
松茸は食べ飽きたからポチにやる　久美子
言葉の密林から濃厚な味　和
ノーベル賞国のためではない偉業　愿
懲りもせず三本の矢を又かかげ　美智子
政治屋が仮面の下で舌を出す　敏子
仮面天使にうつつを抜かす男達　廣子
味覚ならまかしといてや腕ふるう　生枝
ひょっとことお亀この世は騙しあい　勝弘
菊日和嘆く心を裏返す　朝子
嘆くまい汗流したか自問する　ダン吉
良識の仮面を脱いで安保法　一文

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

輪の中に居るから淋しいはぐれ鳥　洋次郎
愛という輪胸にかけてるボランティア　わこ
支援の輪人種性別国も超え　浩司
かごめかごめも一度逢い度い人ばかり　てる
鬼の子もやさしさ学ぶ輪の中で　美津子
ファンチームの勝った日は買うスポーツ紙　りこ
新聞紙読んで包んでまだ敷ける　武臣
新聞でカブト折った日あったよね　みよし
新聞よりチラシ気になる金曜日　弘子
夕刊は配達されぬ過疎に住む　正和
政権にすり寄るようになった記事　忠
輪が広くなると謀反を考える　千代
想い出に浸ってばかり秋の酒　宏造
吊り橋がゆらり余生を試してる　千賀子
限界を知らぬ若さが妬ましい　美籠
古くともこの生き方が心地良い　一徳
母の背に学んだ百の人の道　キヨミ
よちよちの子役が食っている主役　茂
怪我もせず無事にもどった千鳥足　利子
よちよちとやっと大海見えてきた　文香
よちよちへ視線釘付け歩き初め　光久
微妙な距離でよちよちしてる初デート　遠野
新米ママ子も一歳になりました　章子
よちよちと歩いて人気独り占め　歳子
母さんにしっかりついて行きなさい　ひとみ
よちよちがおばあちゃんの手ふり払う　秋果
やり場なく喚いた後の独りぼち　盛夫
わめいても耳日曜とほっとかれ　光子
卓袱台に家族がそろう昭和の灯　紀華
集いの輪に流れて温い国訛り　比ろ志
さようなら輪から抜けだす尾が痛む　求芽
秋風に心のねじを巻き直す　みつ子
八十路でも熱く語れる輪の中で　豊子
赤とんぼ舞った昔の実る秋　健彦
全没は選者のせいと思ってた　伯備

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

その時はきっと裸足で飛んで出る　弘子
山脈の噴煙九州は若い　孔美子
子らたちが叱られ裸足とんで出る　かおる

儲け過ぎたの雑草の肩重い　冨久江
慎ましく儲けて慎ましく使う　和子
天国のついで地獄へ寄ってみる　照彦
足跡は裸足で四十センチありました　咲和
電話口儲け話に心揺れ　鈴
一日を儲けて帰る月の下　八重
脈が飛ぶ心電図みる母を看る　重忠
後悔はついで人生回り道　実満
賽銭がついでのような音で鳴る　盛桜
気に入らぬ席順にもの申しとる　蟹郎
チンという音で仏に近くなり　螢
買い物のメモをついでに持たされる　京
道端に儲け話が落ちていた　小鹿
貧乏を恥じることない足の裏　満
脈々と息を吹き込む一行詩　みさ子
地の鼓動そっと裸足で確かめる　すみれ
通り便ついでの様に言うて寄り　妻子
アメリカのついでの国の十字軍　拓庵
君だけが僕には過ぎた儲けもの　恒
まさかとは思うが脈にふれてみる　美ッ千
足腰は達者余生が面白い　茶子

川柳花の輪（大阪）　**岡本　薫報**

目から歯へ次は足かと覚悟する　みちる
次回にも笑顔持参で老窓会　やすの
無人駅次の汽車待つひなたぼこ　あや乃
味よりも人気の文字についつられ　薫
次世代へ九条守るデモ行進　一幸
人気ですもてなし上手俺の妻　風

ギャグ一つ受けてテレビの人気者　昭好
漫才師司会の方で人気取り　泰子
塾講師追っかけがいる人気者　正太郎
次の日に会えば後悔しないのに　笑子
次の世も一緒になると言うておく　敬子
二番手で密かにトップ狙ってる　勇太朗

川柳同友会みらい（鳥取）**吉田　陽子報**

七十年前の夏から来た自由　和之
戦争は終っていない七十年　かずこ
お盆来て老いの出る幕墓参り　章子
人逝くと良いことばかり思い出す　恵美代
もう少し待っていてねと亡夫に言う　昭子
いやなこと夕焼け空へ置いてきた　節子
遠き日の夢を見たくて眼鏡拭く　和郎
人並みという物差しに出る格差　信兵衛
靴は赤天のことばを聞きに出る　安子
天と地の狭間で蟻のごと生きる　和代
セルフだと思っていればハイが言え　紫音
苦労話がセリフのようについて出る　勢津子
俺に任せ一度聞きたいそのセリフ　百合子
同病と病のことは語らない　みどり
訓練を重ねたハート丸くなる　陽子
張り切った弁当箸を入れ忘れ　敦子
乾杯に紙コップでは弾まない　美恵子
積年の恨み薄れる俺も呆け　真青
九回の裏がまだある諦めぬ　華蓮
平凡な朝がこんなに有難い　遊子
曲がり角こころ一つがまとまらぬ　公弘

倉吉川柳会（鳥取）　**竹信　照彦報**

行楽へ那須高原の別荘へ　石花菜
行楽を余所に稲田が待っている　日出子
行楽の秋だタケ採り栗ひろい　重忠
お茶会に行楽日和下駄の音　英子
好き同士ゴールはしたが子はまんだ　康子
好きな物食べてひとりを謳歌する　美知江
道端の名もなく可憐花が好き　智恵子
好きだからたまにはお灸すえてみる　雄大
好きですと言えばこの恋終りそう　悠子
柿が好きカニが好き秋が好き　鬼一
地の底でおーいと呼んでいるマグマ　由紀子
壺の中おーい好きだと叫ぶ僕　紀美恵
神風はおーいと呼べど吹きません　萩江
長風呂だ浮いていないかおーいおい　けいこ
おーいお茶ロボット持って来るかしら　瑞子
弟よおーい元気か生きとるか　宣子
届くまでおーい続ける拉致家族　茂夫
暴虐のホームに誰が行くもんか　次男
子や孫に投入堂に誘われる　野蒜
終便に遅れ四キロ歩く破目　風露
貧乏神こりごりだけどついてくる　酔芙蓉
これ以上下流老人こりごりよ　祐子
日本はほころびすぎたこりごりだ　玲子
天国へ逝く道も混む行楽日　照彦

きゃらぼく川柳会（鳥取）**成田　雨奇報**

猛暑でも朝は朝顔咲いてます　あやこ

アメリカは地図ではずっと遠いのに　雨奇
ネクタイを秋の色にし人に逢う　幹啓
この暑さどこにも逃げるとこが無い　桐子
逆らえぬ風に折り合いつけて待つ　恵子
寝て起きて自炊三食ひとり旅　正
酸欠で頭少々回りかね　壽々子
敬老会声までシワを伸ばしてる　多美子
順調に老いて足元からおぼろ　千代
平素からゆるがぬ身体鍛えたい　登実枝
残照の鉢の乾きに水遣りを　初枝
キー押して国勢調査終わってる　治代
ゆらりゆらゆら身体毀れないよう守る　日枝子
けだるさは夏の暑さの置き土産　ひろし
白鵬が留守 日本人今のうち　宏之
防除の汗ヘリが背負って稲田舞う　美佐子
球根に脈あり咲かす手の平に　瑞枝
川柳は私がわたしであるかぎり　ゆき

川柳あまがさき（兵庫）　大浦　初音報

みすゞの詩読んで心の掃除する　宏造
窓開けて朝日と風と深呼吸　千代子
窓あけてカーテン遊ぶ秋の風　よしひさ
出窓には猫専門のおザブあり　修平
窓際でそっと聞いてる虫の声　柳明
逆さ富士右に左にバスの旅　つな子
球根とわたしの明日に水をやる　雪菜
いつまでも心の窓を広く開け　幸香
網走の罪の窓から人を恋う　晴美
スーパームーン犬と一緒に歩く道　初音

仏壇のおはぎのあんこ孫の口　富夫
食って寝てオーシャンビューに横たわる　健二
中秋の名月病後の妻の肩に手を　志激
七輪にさんまパタパタ母が居た　洋子
サラサラと書いてみましたラブレター　芳香
もう出番ないドレスでも吊し置く　里江
偶然の風にふらりとこの街へ　ひとみ
新刊の帯のエキスを読み比べ　靖鬼
読めないが英字新聞持つダンディー　りこ
話題作読みかけのまま夏も過ぎ　まつお
半眼で女医の顔見る歯の治療　歌留多
小さい秋歌ったころの家族の輪　ヨシエ
味の店客の心も読んでいる　五月
あの人を思い続けている右脳　和子
窓ふいて今日の御機嫌窓に聞く　紀華
ラストまで読まない本が積んである　祐康
後期です総活躍と言われても　正和
のん兵衛の電話が憎い休肝日　茂
人情に触れたくなって窓を拭く　美籠
生きているサインに今日も窓開ける　千賀子
十階の窓から覗く別世界　紀乃
バイブルを読んでも酒は酒の味　比ろ志
健康という財産も目減りする　耕治
ふたりでは漫才ひとりでは作家　見清

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

ポケットのメモで思わぬ内輪もめ　博泉
中身ない大風呂敷の景気策　鈍甲
盛大な拍手で迎えられゲスト　ルイ子

オリンピック皆で迎えるおもてなし　一
ビーカーの中で歴史が溺れてる　郁夫
老いらくの恋でゆるんだ笑い皺　高鷲
テレビ観て歴史の勉強しています　さち子
激動の昭和日本はタフだった　仁
伝統の響き和太鼓乱れ打ち　弘一
廃校の門扉校歌が眼裏に　祥昭
タイガース9月の歴史くり返し　弘風
訓辞するゲストの影で高鼾　秀雄
企業倫理そこまで落ちていたショック　修
神様におまけもらって生きている　美江
老人会尽きない話過去と医者　弘委智
秋風が俺の財布を吹き抜ける　高志
景気などどこ吹く風と青テント　忠央
免許取り不安激しくノーカーに　尚世
激しさに遠くひだまり抱く暮らし　朝子
うつむいたら勿体ないよ青い天　賢子
自分史の最後は花の散るように　洋
欲望の仮面被っている五欲　壽峰
古文書を守る兄上いて安堵　かすみ
ふる里の歴史を愛しむ祭り笛　茜
台風が実りの秋をなめつくす　麗
何事も激しく向かう人の汗　美智子
金木犀去年の平穏を想う　恵子

六甲川柳会（兵庫）　市坪　武臣報

騙し絵の奥で作者のしたり顔　敏夫
秋風に亡母と語らう萩の寺　千賀子
青春は過ぎて分かった宝もの　盛夫

幼い眼母の私をさぐってる　弘
ドラマより浮き沈みあり八十路坂　忠貞
奥の手が見抜かれていた悪だくみ　茂
能弁より寡黙が奥を深く見せ　浩司
ヒロインになってドラマの中にいる　弘子
偶然をご縁と呼んで開く道　繁義
知らぬまにまつりあげられ一人悦　じろう
報道でドラマのような現実が　芳江
見上げれば国境のない流れ星　博史
いちばんは祖母の鯖寿し秋まつり　道子
お試しで行ってみたいなあの世まで　邦子
古稀家族それこれあれで日が暮れる　洋一
雨上がりオマケのような虹の橋　武臣
かあさんが花丸つける娘の来る日　利子
しあわせを一ツ探して床に着く　文香
だんじりを曳く子の汗に明日を見る　和宏
町内の祭りが消えた高齢化　洋次郎
逝く夏に秋待つ風が通り抜け　夏子
奥ゆかし文から見えるお人柄　美恵子
祭りきて老いも出番と知恵を出す　和郎
少し繕い少し飾って私小説　無限
凡人の歩幅に恙無い暮し　光久
人生のおまつりだろう百歳は　能子

川柳藤井寺（大阪）　鴨谷瑠美子報

温泉が湧いた東京ど真ん中　美代子
カラオケの余韻うっとり湯に浸る　雅枝
アヒルさん君のお尻は可愛いね　勝弘
ハイヒール履いてよちよち歩く見栄　フジ子
餅背負いヨチヨチ孫の初仕事　絹枝
故郷の訛露天風呂にぷかり　シルク
名湯を巡ってとけたわだかまり　キーキー
職場旅行やっぱ期待は温泉や　雄太
間欠泉あれは地球の息づかい　みつこ
狭い穴覗くと未知の風が吹く　瑠美子
都会でも世間は狭い口の端　喜代子
わたくしのオアシスがあるワンルーム　扶美代
方丈の茶室に似合うにじり口　育代
僕には広いがコニシキには狭い　いさお
籠の鳥未知の世界に憧れる　光男
狭い庭ここが私の憩いの場　ヨシ枝
子が走る狭い路地あるいい町だ　一歩
ダブル戦狭い大阪どうするの　紀雄
狭き門卒業しても遊んでる　武義
四季折折猫の額の庭に咲く　喜久子
狭い路地人の温もり落ちている　婦美枝
車間距離だんだん狭くなる老後　庸佑

わかあゆ川柳会（島根）　松本はるみ報

ごめんねと言うきっかけが見つからぬ　かつ子
今朝もまた運勢欄を見る八十路　英子
寄りかかり乍ら二人のかくれんぼ　好榮
逃げ水と共に消えたはあの笑顔　恵美子
スッピンとあわてて隠す面白さ　ハル子
逝った姑残した花に蝶が舞う　安子
斐伊川に古代の夢をのせ乍ら　はるみ
介護から学んだ人の良し悪しを　昌

京都塔の会　桝本宏子報

もめた訳酒の肴に盛りあがる　万紗子
乗り切った後の仲間で続いてる　葉子
後は無いメロスのように走らねば　北舟
乗り切った先があるから頑張れる　見清
数えない事にしました回る寿司　義昭
病む家に夏乗り切った虫が鳴く　求芽
葬儀屋の訳のわからぬ手数料　洋志
背にべったりの砂が無念と書いている　公子
訳ですかちょっと気持がブルーなの　弘之
訳知りの薀蓄酒をまずくする　英旺
乗り切った難局にふと落し穴　則彦
保険金夫の余命を読み違え　弘子
乗り切った世界注視の談話です　泰夫
握手してカウントされる選挙戦　保子
終いのカウント解っていたら遣い切る　文代
老いの坂乗り切るためのジム通い　悦子
病床の妻の乱筆訳す父　美津子
耳遠くなり訳分らずに笑っとく　忠子
閻魔さんにカウントされてる余命表　益子
訳もわからずにおばあさんになった　啓子
英訳に困る日本のわびとさび　満子
紅と白野鳥のように数えられ　堅坊
カウントダウン宇宙士胸に十字切る　肇
指折ってカウントしてる小さな手　弥生
億の金カウント中に目が覚めた　五月
ライバルの視線貼り付く心地して　紀乃
定年後べったり家にいる吐息　朝子

べったりが嫌い息までむず痒い　ふりこ

豊中もくせい川柳会（大阪）藤井　則彦報

すてきねぇと口先だけで目は嫉妬　英　旺
全身全霊込めた一球だったのに　肇
生きている証し静かに息を吐く　久　子
志望校合格祈願絵馬に込め　健　二
つぶやきに込めた本音を猫が聞く　美佐子
平凡な暮らしすてきな人がいる　雀　舎
労りあうすてきな老後程遠い　美津子
正装の友のすてきに嫉妬する　(永)玲　子
負け必至諦めぬ子に汗光る　武　彦
血圧が上がるステキな人の側　千恵子
意気投合握手に力込もってる　比ろ志
必要な時だけ居ればよい夫　真理子
長生きへ必死で守る酒の量　堅　坊
方言で安らぐ母の子守歌　巴　子
総量規制古い服から捨てましょう　耕　治
津軽弁とは喧嘩もできぬ薩摩弁　則　彦
この国の行末どうなるの安保　満　作
寄り添うてるだけで絵になる老夫婦　葉　子
剪定の汗に応える秋なすび　正　彦
こころ込めた菊人形の笑い声　宏　子
号令にひとりのひまわりが叛く　見　清
コスモスの揺れに私を遊ばせる　美智代
山の湯の訛りは源泉かけ流し　求　芽
好きな趣味歳を忘れるいいサブリ　(岩)玲　子
方言の魔法が効いて座が和む　憲　彦

世界遺産をすてきな皿に盛りつける　公　子
望郷の胸に広がる里訛り　ヨシエ
天に唾必ず戻るブーメラン　歌留多

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

コーヒーの香りに弱い万歩計　紀の治
人のミス知らん顔するのも大人　楓　花
人から人へ泳ぎつかれた自由形　くにこ
晩酌に無事スイスイと辿り着く　照　彦
皿に盛る愛という字の隠し味　美恵子
見えますか気配を消しておりますが　芳　山
くやみ欄マイナンバーがひとつ空　野　蒜
それ以上もめるな酒がまずくなる　圭一郎
居酒屋で隣近所の事情知る　雄　大
外科の先生道路工事のように言う　美ッ千
どれがその何の薬か知りません　大　鯰
松茸の跡ねんごろに土かぶせ　蟹　郎
狸汁もりもり食べてパワーアップ　幹　啓
知らないこといっぱいあるが大丈夫　けいこ
この川に魚影は消えて戻らない　道　唱
いつからか一本杉は忘れられ　規　雄
親介護職を辞めたら共倒れ　章　子
百万も騙される人お金持ち　鈴　野
大移動昔ゲルマン今難民　久　子
恋文を観音様に書いている　重　忠
我が道をすいすいでなくヨタヨタと　希楽良
デイサービス朝のお迎え待ち遠し　恒　子
明らかに僕を狙って来た地震　完　司

翠　洋　会（大阪）　佐々木満作報

生きている限り笑いを絶やさない　捷　也
賞味期限まだあるようなないような　理　恵
我慢限界夫の帰りを待ち侘びる　舞　夢
限りない愛に甘えて親不幸　すみ子
限界を通り越してるお節介　志華子
権限をかざして癒着する賄賂　満　作
病経て家族に勝る家宝なし　公　平
骨董品二人居ります家宝かも　蕉　子
億兆の数字目立って勇ましい　千　歩
数々の仮面かぶって生き上手　集　一
前向きに生きる歳など数えない　浩　二
数えたら切りがない程かいた恥　桃　花
年齢を数える時は昭和人　和　夫
へそくりを数えています午前二時　楓　楽
ありがとう飲んだ水にもする感謝　照　子
ラグビーもバレーボールも有難う　紀　子
健康が遊ぶ時間をくれました　日の出
すぐ逃げる記憶を追っている深夜　富　子
仮面ぬぎホッとしたかのデスマスク　恭　昌
樹も虫も異常気象に迷ってる　げんえい
馬券なら百円で掛けた夢がある　善　之
原点に戻ると視野の広くなり　弘　子
結局は会うことになる長電話　義
勝ち試合知ってゆっくり録画見る　敬　子
みみっちい小細工消費税上がる　眞　澄
気まぐれもたまにはいいと独り言　みつ子
秋晴れへ気まぐれな靴帰らない　希久子

第30回 国民文化祭・かごしま2015（11月1日）

本年度国民文化祭は鹿児島県「入来文化ホール」で開催された。
事前投句、高校生・一般の部は1,970名、小・中学生の部は5,966名、当日参加は320名。
大会各賞は下記のとおり。（太字は同人）

◎高校生・一般の部

文部科学大臣賞

津波にも耐えた宿ですごゆっくり　栃木県　柳岡　睦子

国民文化祭実行委員会会長賞

子の宿になろう元気でいなければ　大阪市　岩田　明子

鹿児島県知事賞

ネジを巻くたびに陽気な古時計　神奈川県　阿部　文彦

第30回国民文化祭鹿児島県実行委員会会長賞

桜島イモ焼酎でなだめたい　沖縄県　真栄城久枝

鹿児島県教育委員会賞

ほがらかを杖に千里の夢を追う　埼玉県　吉澤　泰而

薩摩川内市長賞

どっと過去手花火の玉落ちてから　福岡県　梅崎　流青

第30回国民文化祭薩摩川内市実行委員会会長賞

生き延びて芋に頭が上がらない　鹿児島県　愛甲　敬子

薩摩川内市教育委員会教育長賞

こうのとりベビーブームの春よ来い　大分県　小石　敬子

全日本川柳協会賞

煽られて美徳も脱いで列に入る　鹿児島県　下原　繁治

鹿児島県川柳協会賞

一篇の詩が少年を汽車に乗せ　広島県　田辺与志魚

◎小・中学生の部

文部科学大臣賞

いもほればみんなのこころいちれつだ　小6　藤山　そら

国民文化祭実行委員会会長賞

八十の祖母の料理は演歌付き　中3　内田　一聖

鹿児島県知事賞

ぐんぐんとたいよう目ざせぼくのいも　小2　山下おうが

第30回国民文化祭鹿児島県実行委員会会長賞

友達の十人十色咲かせあう　中1　細井　優希

鹿児島県教育委員会賞

じいちゃんは牛と話せるほがらかに　小4　高城　結衣

薩摩川内市長賞

つかまえたあみの中から夏の声　小3　源　柚希

第30回国民文化祭薩摩川内市実行委員会会長賞

やさしさといっしょに届く祖母のいも　小6　吉永　朋生

薩摩川内市教育委員会教育長賞

父の日にいつも言わないありがとう　小5　幸澤　彩晴

全日本川柳協会賞

いもうとが桃をとりにと川へいく　小4　中村　心春

鹿児島県川柳協会賞

まばたきをしたら時間がすぎていた　小3　真島　芽

二次選者　大野　風柳・竹本瓢太郎・本田　智彦・平田　朝子・井原みつ子

句会名	日時と題	会場と投句先
西宮北口川柳会	14日(月) 14時締切 気・捏ねる・ホープ・自由吟	西宮市立中央公民館　6F 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
南大阪川柳会	14日(月) 13時30分締切 ゆるキャラ・薬・ふんばる やんわり	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳さんだ	15日(火) 13時30分締切 退屈・ショック・眠る とことん・自由吟	キッピーモール6階（JR三田駅前） 「まちづくり協働センター」内のホール 〒669-1546 三田市弥生が丘5－2－4　堀　正和
岸和田川柳会	19日(土) 12時30分開場 師走・余る・しっかり・アピール	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0067 岸和田市南町9－7－818　藤井康信
和歌山三幸川柳会	19日(土) 12時30分開場 ラスト・芸・スランプ	和歌山商工会議所　4階　第3会議室 〒640-8570　ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川柳塔みちのく	19日(土) 17時締切 生きる・くらくら・足跡	弘前市桶屋町4－7「居酒屋とんぼ」 〒036-8275 弘前市城西1－3－10 川柳塔みちのく事務局　稲見則彦 宛
川柳ねやがわ	20日(日) 13時締切 トンネル・音楽・困る・自由吟	寝屋川市立産業振興センター 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9 高田博泉 内　川柳ねやがわ
川柳藤井寺	20日(日) 14時締切 全快・素通り・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺さくら町2－2－201　高田美代子
川柳ふうもん吟社	20日(日) 13時30分開場 色々・棘(トゲ)・罪一つ・渋々・浄土 胸キュン・火のページ・敗者復活吟	開発ビル　2F　ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
豊中もくせい川柳会	21日(月) 13時50分締切 結論・つなぐ・いいえ・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2－8－4　江見見清
はびきの市民川柳会	27日(日) 14時締切 おせち・首・知恵・シャンパン	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東　徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
京都塔の会	28日(日) 14時締切 チャンネル・ちらり・地	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328－202　都倉求芽
川柳塔すみよし	休　会	〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2－4－9 古今堂蕉子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

12月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	3日(木) 14時締切 じっくり・階・歳末	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　松本方　安土理恵
城北 川柳会	5日(土) 14時締切 追及・覆す・ぶっつり・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
富柳会	5日(土) 14時10分締切 底・越える・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4－1－10 川柳とんだばやし富柳会　池　森子
倉吉 川柳会	5日(土) 14時締切 逃げる・餅・お願い	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟社	5日(土) 13時45分締切 終わり・討つ・運・ばたばた	松江市　雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
川柳 あまがさき	8日(火) 14時締切 燃える・外・白い・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ 阪急「武庫之荘」駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5－20－14 加川靖鬼
ほたる 川柳 同好会	8日(火) 13時30分締切 京阪神・任せる・太い	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔 さかい	8日(金) 13時開場 腕・せかせか・せいぼ（折句）	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31　村上玄也
あかつき 川柳会	11日(金) 14時締切 飢え・旗・冬眠・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル 2F） 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
川柳大阪	12日(土) 14時締切 けじめ・夢・奇跡	地下鉄・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区本通4－11－6　山崎珠生
川柳塔 打吹	12日(土) 13時締切 膝・読む・ガタガタ	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民 川柳会	13日(日) 14時締切 白湯・櫓・誇る・雑詠	八尾市渋川町　安中町集会所　1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	13日(日) 14時10分締切 兼　題＝戻る・線香・スイッチ 課題吟＝楽	和歌山ビッグ愛　〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼　題　〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫

柳界展望

★しまね文芸フェスタ2015年島根川柳大会は9月22日、島根県民会館で開催。参加者一四六名。同人天位次の通り。

斉尾くにこ

お仲間になりたくてやや背伸びする　斉尾くにこ

日本の明日を竜馬が見ています

★第66回西宮市民文化川柳大会は10月18日、西宮市民会館で開催。同人の天位は次の通り。

黒田　能子

ゆっくりと立てばこんなに浅い川　両川　無限

沖縄が別居したいとすねている

★第65回岸和田市民川柳大会は10月18日、岸和田市立労働会館で開催。参加者142名。同人の成績は次の通り。

岸川賞　榎本日の出

ストレスを全部食べたら夜が明けた　栃尾　奏子

口付けに恋は静かに発芽する

★第36回桜井市民川柳大会は10月18日、まほろばセンターで開催。参加者77名。本社同人成績。

桜井市教育委員長賞

人格が徘徊をする休肝日　山野　寿之

★「川柳さんだ」創立15周年記念・第4回さんだ川柳大会は10月20日、三田ゴルフクラブで開催。出席者82名。同人秀句は次の通り。

前　たもつ

柔らかな笑顔になって百生きる　野口　晶子

ゴールまで五感ゆすぶり生きてみる　亀岡　哲子

ありのまま年を重ねて素の心

★第39回鳥取県川柳大会は10月25日、鳥取市ふれあい会館で開催。本社同人成績次の通り。

鳥取県知事賞

遅しい児になれ森の幼稚園　岸本　宏章

鳥取県議会議長賞

雀られぬように地球にしがみつく　新家　完司

新日本海新聞社賞

戦車にも母の温もり伝えたい　福西　茶子

鳥取県川柳作家協会長賞

平和って意外に味噌汁が薄い　石橋　芳山

★鶴彬忌・第3回全国誌上川柳大会には六九七人の参加があり、本社同人の成績は次の通り。

大賞　西出　楓楽

敗戦の日の青空を忘れない

▽**お詫びして訂正**△

▼9月号＝P42中段19行目、名称を変えてくれ・と・国技館→名称を変えて**お・く・れ**

▼11月号＝P68上段23行目、姫・達と→**姪**・達と。P99下段17行目、今愁子・→今愁**女**

常任理事会＝11月6日(金)①第22回川柳塔まつり（平成28年）について②平成29年常任理事会と本社句会の日程について③川柳塔まつり反省会持越し事項、また各地句会代表者との事務所での懇談会の方向性について④理事の業務分担、再確認⑤定例確認事項⑥各部報告事項⑦その他

次回＝12月7日(月)AM10時～

番傘川柳本社　新年おめでとうの会

日時　平成28年1月11日（祝）午前10時開場　**出句締切**　11時

場所　ホテル大阪ベイタワー（JR弁天町駅、地下鉄中央線弁天町駅下車）〒552－0007 大阪市港区弁天1－2－1 TEL 06－6577－1111

第一部　式典　13時～

第二部　本社句会　14時30分～

事前投句　「動く」　番傘川柳本社主幹　田中　新一選

（11月30日必着）

宿題　「言う」　真島久美子選

「花」　徳永　政二選

「人」　江畑　哲男選

「若い」　森中惠美子選

第三部　懇親宴　16時～17時30分（終了予定）

事前投句、宿題とも各題1句　席題なし

出席者に限ります

◎◎◎　事前投句ハガキに懇親宴の参加・不参加を明記の上、本社事務所宛お送りください

会費　2000円（弁当付き、掲載誌呈）

懇親宴　7000円

お問合せ・申込み　番傘川柳本社

〒530－0047

大阪市北区西天満5－6－26－605

TEL 06－6361－2455

飯塚書店　新川柳書企画
スポーツ競技
川柳大募集

飯塚書店ではスポーツをテーマとした川柳を募集しております。
投句いただいた作品の選りすぐりを単行本にして出版いたします。
掲載採用作品の方には新刊一部寄贈いたします。

【投句方法】
小社ホームページ投句コーナーからか直接FAXでお送りください。その際ご連絡先ご住所お電話番号お名前を明記してください。

詳しくはホームページか直接小社にお問い合わせください。

HP：http://izbooks.co.jp
FAX：03-3815-3810

〒112-0002 東京都文京区小石川 5-16-4 図書出版 飯塚書店 TEL03-3815-3805 FAX03-3815-3810

平成28年度　業務分担表

平成27年11月現在

	常任理事		
総務部	**水野　黒兎**	久保田千代 島田　誠一	坂　裕之
企画事業部	**片山かずお**	足立　茂 久保田千代	柿花　和夫 佐々木満作
編集部	**木本　朱夏**	江島谷勝弘	森松まつお
句会部	**古今堂蕉子**	居谷真理子 山﨑　武彦	長井　善純
同人誌友部	**江島谷勝弘**	鶴田　遠野	坊農　柳弘
渉外部	**山﨑　武彦**	藤井　宏造	松原　寿子
会計部	**鈴木いさお**	坂　裕之	
発送部	**足立　茂**	江島谷勝弘 藤井　宏造	佐々木満作
事務部	**森松まつお**		

◎ 太字は部長（部長以外は50音順）　◎ アンダーラインは新任者

高野山川柳塔碑合祀ご芳志御礼

永田　俊子様　ご遺族
神夏磯典子様　ご遺族
田中　笑風様　ご遺族

編集後記

★顔見せの勘定流へ黄な　薫風
コート

★農協の直売所でお墓参りの花を誂えていた時のこと。黄菊、白菊いろいろを手にしながら思わず「白菊千日仏も」と傍らの息子に話していると「済みません、今のお話を聞かせていただけませんか」と、中年の女性に声を掛けられた。「日本で有名な薫風先生の、白菊千日仏も飽きはしませぬか　という川柳ですよ」と私は誇らしく答えた。その方は丁寧にメモを取られたが、菊の季節にはきっと思い出して下さるだろう。ほのぼのと心和んだ秋のエピソード。

★手帳を二冊頂いた。一冊は赤い表紙にイラストがついた明らかに若い女性向き。自分の願いを書いたり、☆を使用して一年の自己採点をしたり、単なる予定表ではなく自己啓発のための手帳のようだ。今年の一〇月から使えるところが大きな特徴。もう一冊は新潮文庫のマイブックと名付けられた手帳。文庫本サイズの真っ白い表紙に日付けだけ。シンプル・イズ・ベスト。そのシンプルさが美しい。

★今年買ったのはまるごと一冊ムーミンの手帳。どの頁を開いてもムーミン谷の住人が飛びだして来る。実は下手な字で汚すのが嫌で殆ど使っていない。持っているだけで楽しくなる。過去には新潮社の星野道夫ダイアリーなどを買った。アラスカで不慮の死を遂げた冒険家・星野道夫の写真がふんだんに取り入れられた手帳は、小型の写真集といった趣。こちらも勿体無いのでほとんど使わなかった。百均のノートタイプの手帳が意外に使い勝手が良い。つくづくと貧乏性ではある。

★以前この欄で断捨離のことを書いた。断捨離も悪くはない。長年行方不明だった、作家・北杜夫から戴いた葉書二〇枚が見つかった。私の魂の遍歴を知る宝もの！　仕舞い込むとまた忘れる。そういう年齢だ。ポーの短編『盗まれた手紙』に倣って、木を隠すには森の中、というわけで宝ものは目の前の状差しへ。（朱夏）

□11月「第20回クレオ川柳大会」（島村美津子主宰）に参加した。選者10名すべて男性が特色。選者は披講前に3分間のスピーチがある。徳永政二氏のスピーチ（要約）を紹介する「①川柳は人生観を変える力がある。②抜ける句をつくらない―創作性を失う。③川柳は素人集団、何を詠んでもよい。」と強調された。

□佐藤岳俊著『現代川柳の宇宙』（新葉館）で面白いエッセーを発見。一節を紹介する。「葛飾北斎は九十歳で亡くなるまで、引っ越しを九十三回、画号三十回も変えている。そのバックボーンは川柳である」と述べ、「可候（そうろうべき）の名で八十五編の序文を書いている」と論じ、「半年余りで消えた写楽は北斎である」と断じていた。

団子屋の夫婦喧嘩は犬も食い　可候

八の字のふんばり強し夏の富士　可候

（勝弘）

ひとこと

川柳との対話

10月18日、第65回岸和田市民川柳大会に選者としてお招き頂いた。会場は見渡す限り空席見当たらず満員御礼。

印象的だったのは披講中、選者が思わず声を詰まらせたワンシーン。失敗したのでも、マイクの調子が悪かったのでもない。心うたれて涙をこらえたのだ。

誰かに伝えたいと川柳が生まれる。それが（例えば、選者に会場に）伝わった時、その句は一行詩という枠を越えて、それぞれの懐へ落ち、根をはるのではないかと思う。清々しい快晴の中、一日どっぷりと川柳との対話を楽しんだ。私もそんな句を作りたい…と願い大盛会の岸和田川柳大会をふり返りつつペンを取っている。お招きに心より感謝。（栃尾　奏子）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

種目「　　」発表（2月号）

地名　　市都
県府道

姓
雅号

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

檸檬抄投句用紙

「成り行き」（12月15日締切）

2月号発表

長浜　美籠 選 ――共選―― 三浦　強一 選

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

B　A

地名

県府　市道都

姓雅号

切らないで下さい

B　A

地名

県府　市道都

姓雅号

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

2月号発表（12月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　川上大輪選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「成り行き」（2句）　三浦強一・長浜美籠共選
インスピレーション・ナビ（2句）　大西泰世選
一路集（3句）「招く」　早川邇行選
「要領」　武本碧選
「工夫」　出口セツ子選
初歩教室「道」（3句）　山口光久担当

3月号

檸檬抄「愛着」
一路集「通う」「凄い」「方向」
初歩教室「単純」

本社12月句会

とき　12月7日(月)　13時開場・13時40分締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「健康寿命を延ばそう」　伊達郁夫氏
席題「　」　片山かずお選
兼題「胴」　松尾美智代選
「かすか」　長浜美籠選
「メッキ」　佐々木満作選
「楽器」　河内天笑選
「照明」　小島蘭幸選
（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社1月句会
7日(木)　午後1時から

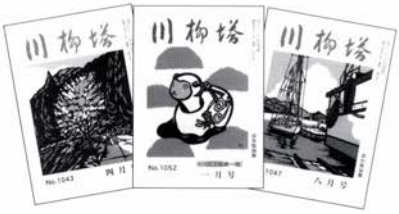
兼題「これから」「甘い」「踊る」「ダッシュ」「本音」

第34年度　夜市川柳募集

第7回「焦る」　日野愿選
ハガキに3句　**12月20日**締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

定価　八百円（送料86円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一五年（平成二十七年）十二月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
〒543-0052　大阪市天王寺区大道一―一四―一七　花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372―1178
FAX (06) 6372―1196
E-mail：bikenart@ea.mbn.or.jp

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十七年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇六三号　川柳塔　十二月号
定価　八百円（送料　八十六円）

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの
一句を募集します。

・兼題　「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸　選
・応募要領　郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記してください。入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。
・発表　本紙4月号にて発表いたします。
・締切り　2016年1月31日（当日消印有効）
・投句先　〒543-0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201号室　川柳塔社　ゴマ川柳係　宛

オニザキの
つきごま
手作りの味わいに
こだわり続けて
六十年

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL 0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－12